
A Study of Love Potion @ Collective Rotation

枕木悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

媚薬の研究 A Study of Love Potion
@ Collective Rotation

【Nコード】

N0103V

【作者名】

枕木悠

【あらすじ】

エルと志、銀と金のライバルの抗争は、「媚薬の研究」という書物を巡って展開される。

そこにはもちろん、百合色の火花が散る……！！

プロローグ

誰にでもコイツには絶対に負けたくない、そういう気持ちを抱く
矛先、仇敵、かっこつけて言えばライバルっていう感じの人が誰に
だって多かれ少なかれているはずだ。口に出しては言わないけれど、
いけ好かない、癪に障って仕方がない、時代が木の實の採取とイノ
シシ、ヘラジカ、マンモスの狩猟で彩られていたら、真っ先に夜な
夜な打ち砕いて鋭く磨き上げた石器の餌食にするのにやぶさかでない、
要するにボッコボコにしてやりたい、そういうヤツがいるはず
だ。

その感情に説明を求めるのは野暮、冴えない冗談にしか聞えない。
以前街で見かけたサラリーマンのテクノカットの方がよっぽど切れ
味がよくて、気持ちがいい。確かに合理主義を振りかざし、そのぐ
つぐつと煮えたぎる非合理精神を断罪するのは非常に簡単で単純で
人道的で道徳的で公務員的な安定性を求める日本人にふさわしいけ
れど……、しかし、だ。
さて、ここはいつたどこでしょう？

この国は一体どこなんだでしょうねえ？
そう、この国は十七年前、日本の臨海地域に突如として創り出され
た新しい国だ。この国で生まれたアンダーセブンティーンは無条件
に日本を知らない。人間の進化を妨げる阿呆の考えと考え方を一切
知らない。

《私立聖ピアンネ女学園》

幼稚舎、初等部、中等部、高等部、大学まで、一度入ってしまったら
エスカレーター式に一貫教育が受けられ、一見、品行方正を象った
お嬢様が純粹培養され、出荷されると思われるこの学園ですら、新

しい風の影響を免れることなど出来なかった。いや、むしろこの場所には新しい風が吹き荒れている。

ピアンネ娘のスカート丈は膝上十三センチとよだれがしたたるほどに短い。それは校則で決められていた。その短すぎるスカートは、その新しい風に煽られながらもピアンネ娘の強烈な個性のパンツを死ぬ物狂いで死守していた。彼女たちのパンツを拝みたくて仕方のない私には少なくともそう見えた。まあ、柔らかそうな太ももだけで勘弁してやろう。……と、少し話が脱線したようだ。

兎にも角にも、この国の風土は成長する。つまり、この国で産まれた少女たちも成長する。両者は同時進行で成長してきたという自負がある。中には自負がある。この国を作り出してきたという自負がある。それは少女たちの深層心理に根付いている。指先、つま先まで浸透している。だから、与えられるのをじっと待ち続けている、なんていう緩やかな少女たちは、存在しない……なんてこともないが、まあ、とどのつまり、この国の、私立聖ピアンネ女学園の少女たちはいつだって渴望している……というのはいいすぎかしら、でも、彼女たちのハングリー精神には目を見張るものがある。例えば、ピアンネの東京ドーム並みの広さの体育館の一階に備え付けられている第三トレーニングルーム（日本の私立高校並みの設備を想像してもらっては困る。想像のヒントは東京ドームだ）、そこを覗いてみると、

案の定、やっぱりいた。

今年の始め、ダイエツトに悩むピアンネの少女たちのために追加投入された最新型エアロバイク二台（日本製）、そのサドルに二人の少女は跨っていた。

一方は金髪、もう一方は銀髪の生粋のピアンネ娘。ゴールド&シルバー。

二人の気丈な頑固さは、ピアンネでの常識である。

少女二人の毛穴から染み出た、思わずペロペロと失敬したくなるような汗は、フローリング張りの床に塩分と毒素を含んだ小さな水溜

りを作っていた。汗を吸収しすぎてタオル地のヘッドバンドは鎖骨までずり落ち、薄紫色の体操着は床に脱ぎ捨てられ、Ｔシャツは上半身にペタツと纏わりついて、めいめい、美しく派手な見たくれに反して地味な下着をつけていた。購買で売っているスポーツブラだ。なぜか哀愁を感じるのは、小さく膨らんだまま一向に成長の兆しを見せないならかな胸部の凹凸のせいだろうか。

そして、そのエアロバイク二台の回転を真剣に見つめる少女たちが十二人ほど、トレーニングルームの戸口で群れていた。彼女たちは一様に中等部の制服姿であり、つまり中等部の生徒である。彼女たちはトレーニングなんてしにきたんじゃないかと、見て分かるように金髪と銀色の髪の少女二人のエアロバイク姿をまさに視姦するよう凝視しに来たのであり、レスじゃないくせに二人のうっとりするほどの苦しむ姿を目を皿のようにして見ている理由は、ギャンブルだからだ。

パタパタパタという足音がして、その群れに新たに一人加わった。その少女は目蓋が半開きでタバコがすこぶる似合いそうな背の高い少女に向かって言った。

「今日はゴールド」ラメ入り、そして緑色のスーパーボールみたいに弾んだ声だ。「ゴールドに三百」

「悪いな、一分前に締め切ったんだ」

「そんなあ、いいじゃん、一分くらい、ケチ、外道、唐変木」

「あんだって？」長身の少女は物言いたてる少女のお凸をぐいぐいとボールペンでつつきあしらうように低い声で言う。「一分は一分だ。日付が変わるのもその一分の間だ。一分あればカップ麺はメーカーの意向に従わずに食べごろに仕上がってくれる。その一分をないがしろにするヤツは賭けに参加する資格もなければ、私にケチ、外道、唐変木、トーテムポールと罵ることは出来ないんだっ！」

「トーテムポールなんて言っていないっ、……ていうかカップ麺は二分でしょ、常識でしょ、ちなみに近頃の私のトレンドはカレーよりもシーフードだね」

「いらん情報ばかり私に教えるのは、いい加減よしてくれ、消化に困る、最近の便秘はお前のせいだっ」

「あうあう……、っていちいちお凸を突つつくなよお！」

二人のかشましい会話からも分かるように、トレーニングルームに群がる少女たちは金と銀の少女を使った賭け事を催している。もちろん、このことは風紀委員に知られては独居房に直送の蛮行であり、ささやかなギャンブルがこの場所で行われていることはふとどきものたちのヒメゴトだ。また、この賭け事は金と銀の本人たちに許可も取っていないければ、《あんたたちをまるでメスのサラブレッドを見るように見つめていますよ》ということも知らしてはいいない。知らしてしまつては賭けが成り立たなくなる可能性がある、逆ギレされて金銭をせびられる可能性もある、……というか、そうなるに決まっている、と、この賭けを取り仕切るトーテムポールのピアンネ娘は思っていた。

「せっかく見つけた催しをみすみすおじゃんにしてたまるものかつ」ともあれ、三十人分の熱視線を浴びせられれば、エアロバイクの少女の二人の内のどちらかが気付きそうなものだが、これが意外と気付かれないでいた。

なぜなら二人の少女は死に物狂いで戦っているから。

賭け事の始まりは一ヶ月前に遡る。丁度、夏休み明けの実力テストが終わつたくらいのとある日のこと、偶然にも金と銀の髪色を持つ少女はエアロバイクで隣同士になった。もちろん、二人は初めから競争目的でやってきたわけではないし、互いに意識などしていなかった。ゴールドは運動すればホルモ的な何かで胸が大きくなるという出鱈目を小耳に挟んで、シルバーは親しい友人にお腹のポッコリ具合を指摘され、めいめいそれまで滅多に訪れることはなかったトレーニングルームに足を運んだのである。

だが、しかし、偶然にもトレーニングルームで二人きり、十四台もエアロバイクがあるにもかかわらず隣同士でウィンウィンと無言で漕いでいるという状況が、どういうわけだか、運動部でこつた返

す放課後という時間帯にもかかわらず、生じてしまったのだった。偶然とはいえ、これはもうどうしようもなかった。二人の少女はどうしようもなくなってしまうのだった。

萎んだままの胸よりも、脂肪が余分に付いたお腹よりもそっちのけで、

『先に降りたら負けだ!』

と思つてしまったのだった。そんなことを一瞬でも思つてしまつたならば、決して引くことは出来ない。退くことなんてこの頑固者のピアンネ娘の二人には出来やしない。

初戦の結果はドローに終わった。消灯時間の午後九時まで二人は漕ぎ続け、結局、見回りに来た体育教師に決着を妨げられた。二人は終始無言を貫いた。しゃべれば気が緩み、相手に付け入られる隙を与えることになる。しかし、心は通つていた。ゆえに、メールでやり取りをしたかのように、二人は同日同時刻に第三トレイニングルームに現れ、再戦を果たしたのだった。今度は負荷をマックスにして、ケリが早くつくように設定した。再戦は銀の方に軍配が上がった。しかし、二人の決着はそれで終わらなかつた。リベンジ、リベンジ、リベンジ、リベンジの応酬がひたすら続いたのだ。

二人の少女を駆り立てるものは、原動力は果たして何なのか？

ピアンネの中等部二年の娘たちは、こう教育されている。

『圧倒的大差をつけ、勝利すべし。敵の十倍上を行け』と。

圧倒的な勝利を望む二人の成績は現在十八勝十八敗一分け、つまり、ドローである。

まだ二人の間に圧倒的な差は存在しない。日本の教育のように平等で面白みがなく個性がない。それは埋没することだ。自分自身が隣にいるいけ好かない娘に同一視されてしまうことだ。そんなこと、死んでもご免だっ!

二人がペダルを漕ぎ始め、はやくも一時間が経過しようとしている。

回転し続ける秒針が十二の数字を通り抜けたところで、金色の髪

の少女の顔が歪み始めた。正面から見て右側、腰まで伸びるさらさらの金色で染めた黒髪、サファイヤを町工場でカットしてもらったようなカラーコンタクトレンズ、道端に捨てられた子犬にしか喧嘩を売らないこと請け合いの高慢ちきに吊りあがった円らな眼、顔立ちは目付きによって十一歳から十九歳まで演じ分けできそうだが、決して欧米人のように堀は深くなくてベビーフェイスというよりは幼顔という表現がぴったりくる、うなじから滲んで香るのはちんちくりんなちよっぴりわがままな不良娘の雰囲気あめ・ゆきだった。名前は天志自他共に認める貧乳であり、アデイダスのポーツブラが学年一似合うと評判の美少女である。

その評判の小さな胸が苦しそうに上下している。呼吸が荒く、色っぽい。二十代前半のレズな女を誘惑するようなフェロモンを出しているなんて、本人はきつと露ほども知らないだろう。

銀色の髪の少女はソレに気付いた。ソレというのは私を悩ませる濃厚なフェロモンのことではなくて、DSには堪らない志の歪んだ表情のことである。正面から見て左側、肩甲骨まで伸びる銀色に輝く髪、エメラルドを溶いて流し込んだような透き通った瞳、垂れ目でも吊り目でもなく感情のふり幅の読めない目付き、日光浴を嫌う白粉をまぶしたような白い肌、顔立ちは中等部の二年にしては幼く見える彼女は、ハンガリーからこの国に移住してきた男女の間に生まれたエセハンガリー娘である。名前はエルヴィーン・クイード・コンベルハイアー、少々長いので彼女のことをエルと呼ぼう。友人からも彼女はエルと呼ばれている。

先にも触れたが貧乳であり、美少女であり、なかなか油断できない、一筋縄ではいかない女子である。

エルは志が苦しそうな呼吸を繰返していても油断なんてしない。逆に自らのからだの建て直しに入る。エルは天秤を安定させるように、慎重に呼吸を整えていく。「スーハー、スーハー……」

しかし、肺の過剰な利用で心拍数が鳴り止まないのはエルも一緒だ

った。

一段階レベルアップした苦しさは急にくる。

足の力が抜けた、エルは「ああっ」と二酸化炭素を吐き出す。まるでエジプトの砂漠の中でペダルを漕いでいるようだった。タイヤが砂に埋まる。回転が地面を捉えない。チェーンが細かい砂を噛む。腰まで細かい砂の海にさらわれたようだった。

空回りのむなしさが嘔吐感となってエルの五臓六腑を駆け巡る。

エルは堪えた。呼吸を十六秒間止め、喉を絞めるイメージを繰返した。

肺で捕らえた空気、その中の酸素を掻きまわすように探す。窒素がこれほどやかましく思ったことはない、細胞が口々にエルに訴える。もう限界だって信じろっ！
静かにしろ！

お前らは黙って脚の筋肉を回していればいいんだっ！

エルは自分の中のハンガリー的な弱さを締め出した。

神経を落ち着かせるため、エルは目蓋を閉じ、光を遮断した。冷静さが眉間に表われる。大丈夫、まだ、私の脚は回転を続けることが出来る。出来るんだ。

動け、動け、動け、動け……、もっと、もっと、もっと動き続けろっ。

エルは薄目を開けた。チラリと志を見やる。まだ死んでない。俯いてはいるが、ヤツはあそこから長い。長くてしつこくて粘っこい。きつと納豆が好物な気持ち悪い味覚をしているんだろっな、きつと、なんて思っただけでエルはまた吐きたくなった。

集中だ。

限界ならとうの昔に超えている。今となってはとうの昔だ、昨日の夜より限界を超えた二十分前がすごく遠くに思える。超えてしまえばどうってことない、どうってことない、どうってことない……。

ふっと急にエルの朦朧とした意識の中にイメージが滑り込んできた。延々と続く坂道、周りは緑が比較的多い住宅街、黄昏時、隣にはマ

マチャリを漕ぐ志、エルも志に併走している、目の前にはすっーと伸びたオレンジ色のコンクリートを滑る真つ黒な影、影の先端にはいつまで経っても追いつけない、それは漕げ、漕げ、漕げ、漕げとエルを鼓舞する、エルのママチャリは傾斜四十五度の重力に逆らい志との距離を、差をつけていく。この風景は決着がつく直前にエルの意識に挿入される勝利のイメージだった。

来たっ！ 勝利を告げるファンファーレは近い。

エルは自らの太ももを叱責し、恫喝するように叩き、文句ばかり言う細胞に針を刺し、無理矢理そばだたせた。首を振り、汗を払う。力の伝わり方が分からないから、とにかく全身に力を込めた。前傾姿勢、空気を裂くように身を倒す。一応断っておくけれど、エルはエアロバイクに乗っていて、舞台はトレーニングルームである。目、鼻、口、肌は感覚を脳みそに伝えることを止めた。ただ、耳は感じていた。エルの躍動と志の鼓動を耳は捕らえていた。

イメージの中の志は重力に引きずられるように速度を緩めていった。二つの車輪のバランスをかるうじて保っているという感じだった。フロントのタイヤは前方を向いていない左に右に、右往左往を繰り返しては安定しない。不安定だ。ふらふらふら、志の全身は震えていた。そしてついに不安定な車体は坂道をくだらうとした。重力に従い始めた。

ドシャリ……。

はつとエルは耳が捉えたその『ドシャリ』という音で、瞳を薄く見開いた。視界の隅には落車し、床に倒れこんでいる志の姿が映った。エルはゆっくりと回転数を下げた。本当にゆっくりとだ。ぴたつとペダルを漕ぐ脚の力を抜いたのは三十秒後。全身の力を抜いたのは四十秒後だ。その表情には未だ厳しさが残っている。満足などしいとその顔は言っている。

エルはおぼつかない足取りでエアロバイクから降り、脱ぎ捨てたジャージの上着を拾い、戸口へと歩く。

そこには賭けに勝ったやつと負けたやつがいた。エルはエネルギー

の不足した声でそいつらに言った。

「あいつを保健室に連れていってくれ」

トーテムポールの少女がびくびくと頷くのを確認すると、エルはその場からふらりと消えた。

場面は銘電地区の《広瀬空手道場》に強制的にフェイドイン。

そこではピアンネの初等部に在籍する、二人の少女の組み手が行われていた。周囲には固唾を吞んで、その組み手を見守る老若男女と審判を務める団十郎。

赤いグローブ、意図せずして茶色髪の少女は広瀬道場の師範の広瀬団十郎だんじゅうろうの一人娘にして師範代、広瀬比呂巳ひろせひろみ、十歳である。小さい姿態からは想像も出来ないほど、その拳の速度は速い。その小さな体型を存分に利用して、軽快な脚裁きで相手を翻弄する。先天的に装備されたしなやかなバネは、比呂巳の速さを保証している。

空手の組み手は板張りの床の上に十五ミリのマットを敷いて、その上で行われる。脚に掛かる衝撃を吸収し、選手らの足裏、膝、尾てい骨の負担を和らげるためである。

ダンッ、という炸裂音が道場にこだました。

同時に「キヤア」と奇声に近い気合が比呂巳の口から飛び出した。

比呂巳の踏み込みの衝撃はマットを貫通し、板張りの床までをも揺らしたのだ。

団十郎の旗が上がる。赤い旗。比呂巳の中段突きは完璧に決まった。ポイントはコレで二対〇。比呂巳の中段突きは二連続で相手の下腹を正確に捕らえた。ここでのルールは三ポイント先取である。無論、比呂巳は次も中段で決める気である。比呂巳の右手の拳の中段は父、団十郎を凌ぐほどだった。ソレは天賦の才に違いない。比呂巳は最強だった。最強ゆえ、比呂巳は悩むことなく、シンプルな中段突きの快楽を知っていた。速度が集約され、体の芯が躍動し、全身が弾丸になり、相手を貫く瞬間の快楽の味を比呂巳は若干十歳で知り尽くしていた。

特に相手が親友の彼女ゆえ、言わば《最高》だった。その彼女は比

呂巳の幼馴染であり、同学年で、現在も同クラス、家が隣同士のために生まれたところから一緒にお風呂に入り、枕をともししてきた関係であるところの、高野弥恵^{たかのやえ}、十歳である。比呂巳は弥恵と競い合い、じゃれあい、痴話げんかをするのを何よりも楽しんだ。

比呂巳は弥恵にニコリと笑いかけ、年季の入った黒帯をきゅっと締めなおす。比呂巳の笑いは弥恵にとって堪らない。狂おしい。……だからといって、屈辱的なわけではなかった。弥恵はわざとむすつという顔を作って見せた。心がほにゃほにゃしてどうしようもないのを悟られないためだ。少し吊り目の黒い瞳で比呂巳を睨みつける。この様を弾くように睨みつけた。比呂巳はソレに反応して、からかうようにジト目をしてみせる。悪くない、比呂巳にそうやって扱われるのは悪くない。

しかし、……最近、膨らみ始めた弥恵の将来有望な小さな胸はもどかしく、悶々として、苦しかった。

今日こそは、今日こそは、今日こそは、必ず勝つもんっ！

比呂巳に勝つことで、理解不能な比呂巳への気持ちに解釈、つまり決着をつけることが出来るのではないかと、この日、弥恵は期待していたのだった。

これは、この気持ちは、比呂巳への胸キュンラブハートは、比呂巳にあんなことやこんなことしたいって意味の、いわゆるそういうことなのかな？

つまり、高野弥恵はレズである。それは自分で確かだ、と判断できることだった。昔から可愛い女の子やお姉さんにキスをせがむませた子供だった。ロリコンだと気付いたのは最近のことだけれど、でも、しかし「そういうことなのかな？」なんていじらしく考えてめそめしちゃうのはレズのせいだけど、ほとんど全部がレズのせいじゃなくて、相手が比呂巳だっというのに問題があるからだ。比呂巳に抱く気持ちが他のレズと違うのが問題なのだ。

「赤、中段突き、有効」団十郎が怖い目で二人に目配せをする。「よーい、始めっ！」

比呂巳は先手必勝とばかりに中段突きを繰り出してきた。弥恵は右手の甲を腹部に差し込んでソレをガードする。すかさず左のジャブを比呂巳の顎に向けて放つが、比呂巳は体勢を低く斜めにスライドさせ、なんなくかわした。弥恵は勢いを殺さず、右足からの中段蹴りを叩き込む。畳まれた足が比呂巳の腹部へと滑り込む。が、比呂巳は避けようせずに弥恵の懐に飛び込んだ。コレでは力が伝わらない。弥恵は即座に足を引いた。比呂巳も下がった。小刻みにステップを踏みながら間合いをとる。

弥恵の狙いは《上段回し蹴り》である。ソレは一気に三ポイントの大技で、弥恵の得意技の一つである。比呂巳を倒すため、毎日兄貴をサンドバックにして、いや兄貴なんていないんだけど、とにかく練習して身に付けたのだ。

その成果を見せてやるんだからっ！

比呂巳はバカの一つ覚えじゃないけど、得意の中段を狙ってくるはず、それを察したら下がって、比呂巳のめちやくちや可愛い顔に向って回し蹴りをお見舞いする。弥恵は比呂巳のワンツーをかわしながらイメージした。昨晚比呂巳のことを思って眠れない夜に何回も繰返したイメージを

たん、たん、たん、だ。このリズム、このリズムでいける。

比呂巳の突きは弥恵を追い詰める。寸でのところで弥恵は捌き、かわす、チャンスを待つ。比呂巳がニヤニヤと笑っている。

あー、可愛いなもう、……じゃなくて、それはチャンスだ。敵は隙を見せている。もう少しだ。こい、こい、こい、こい。来たっ。

弥恵はイメージ通りに比呂巳の中段突きから逃れ、上段回し蹴りの体勢に移行した。足を畳み、横腹筋で太ももを腰の位置まで持ち上げる。軸を回転させる。体重を空中にある右足に込める。比呂巳の可愛い顔がそこにある。

決まった。

と、思った。が、弥恵の足の甲が叩いたのは残像だった。もしくは

弥恵の勘違いだった。じゃあ、比呂巳の可愛い過ぎる顔はどこにいったの？

弥恵の胸元にいた。驚く余裕もなかった。

比呂巳は弥恵に急接近して何をするのか。無論、中段突きではない。このゼロ距離の間合いで打つても互いに痛みが残るだけでポイントにはならない。なんてことを無意識的に思っているうちに弥恵の体はふわりと宙に放り出された。

軸足を刈られたのだ。

比呂巳は倒れた弥恵の側頭部に綺麗な突きを決め、奇声をあげた。相手を倒し、有効打突を決めると二ポイント。四対〇で、この組み手、比呂巳の勝利が確定してしまった。

弥恵は呆然実質の瞳孔のまま、自分を見下ろす比呂巳を見る。なかなか弥恵が起き上がろうとしないので、比呂巳は優しく手を差し伸べてくれた。その優しさに、弥恵は奥歯を噛んだ。

また、まただった。もやもやが込み上げてきた。込み上げてくるこんな気持ち、今までは全然なかったのに。今まで散々負けてきたけれど、こんな気持ちになることなんてなかったのに、胸が膨らみ始めてからだろうか、比呂巳を圧倒したいと思うようになったのは、比呂巳を滅茶苦茶にしてやりたい、そう思うようになったのは、それはレズ的なこと？ ああ、もう訳分かんないよっ！

「いつまで寝てるんだよ」

比呂巳は無理矢理弥恵の手を取り起き上がらせた。立ち上がった勢いで比呂巳に急接近。「大丈夫か？ 顔がピンク色だぞ？」

「別になんでもないよ」

「最近どうしたんだ？ 妙にヤル気出しちゃってさ」

「別になんでもないよ」屈託のない比呂巳の瞳が見れなくて、弥恵は目を団十郎の方に逸らした。ぶーっと唇を尖らせる。「なんでもないわよっ」

弥恵は壁際まで歩いて行って、壁を背にして座り込んだ。弥恵のもどかしい気持ちなんか気付く様子もなく、比呂巳は横にちょこ

んと座った。『あつちへ行ってよ、気持ちを整理しようと思ったんだから』とも言えず、弥恵は塞ぎこむように俯いた。

「本当にどうしたんだよ？ 熱でもあるのか、顔がピンク色だし」
比呂巳は弥恵の顔を覗き込む直視する。カァーッと弥恵の頬が染まる。「うつ……」気持ちを堪え切れなくて、涙がちよちよ出てきた。

「ピンク色じゃないもんっ！」

「ピンク色じゃん。あつ、少し濃くなった」

「もっつ、比呂巳なんて知らない！ 比呂巳には関係ないもの！」
ツンと目を逸らす。

「いやいや、私とやったあとに泣かれたんじゃ、ほつとけないって」

「……そうよ、比呂巳のせいだから」

「えっ、やっぱり？」比呂巳は身振り手振り、口元をあわあわせせる。「その、悪かったな、もつと手加減した方がいい？」

「そういうことじゃないの！」弥恵は癩癩を起こしたように捲くし立てた。「そういうことじゃないの！ 別に比呂巳に手加減して欲しいわけじゃないの！ 比呂巳は比呂巳のままできて！ コレは私の問題だから！ 私が変らなきゃ、意味ないんだから！」

比呂巳は「？」マークを頭上に浮かべポカンとしている。

「つまり、どういふこと？」

「そ、それは、」

弥恵の気持ちは抽象的で、比呂巳に伝わるはずはなかった。自身にも判別不能の気持ちをどうやって寸分の狂いなく、伝えることが出来ようかつ。

比呂巳のことが好き、でも、よく分からない。他のクラスメイトにチュウしたいって思う気持ちと比べ物にならないくらいぐちゃぐちゃに絡んでいる。私は比呂巳に勝ちたいと思っている、それは好きという気持ちと関係がないと思えるしあるように思えるし、私はただ比呂巳にムカついているだけで好きなのではないのかもしれないとも思える、比呂巳は女の子で、私の大好きな女の子、でも最近までほっぺにチュウしたいなんて思ったことは無かったんだ、確かに

比呂巳は可愛いけど、でも、本当にあんなことやこんなことしたい
って思ったことはなかったんだ、今は？ …… よく分かんない、比
呂巳に何をしたいのか分からない、でも《好き》だっていう言葉が
今の気持ちにすんなり当てはまると感じる、けれど、それを比呂巳
に告白して愛し愛される関係になりたいという気持ちはあまりない。
小さな胸の膨らみが弥恵に訴えかけるのは、

「『欲しいものはどんな手段を使っても手に入れよ』」

初等部四年の教えである。「……かな」

《欲しい》確かに、私は比呂巳が欲しいのかもしれない。

「ああ、」比呂巳は合点が言ったように声を上げた。「弥恵は正々
堂々私に勝ちたいって、そういうこと？」

「う、うん」弥恵は斜めに傾きながらも一応頷いた。確かにそれは
弥恵の願望であり、果たさなければならぬことに思える事実だっ
たし、比呂巳に勝つことで、抑え切れない所有欲が満たされる気が
しないでもない。比呂巳を手に入れれば、めちやくちな気持ちに
整理がつくかもしれないも思った。

でも、比呂巳を手に入れるってことってどういうこと？

弥恵の脳みそは軽くループに突入していた。

「よしよし、大丈夫、弥恵ならすぐ私より強くなれるよ」

そっぴいながら撫で撫でしてくれる比呂巳はこんなに近いのに、気
持ちはなんだかすれ違っているよう。胸の膨らみ以前のじゃれあい
よりも、今、こうやって、私の汗で濡れた黒髪を撫で付けられてい
る時間は、私の心を掻き混ぜる。切なさが込み上げてきて、ポエム
が浮かんでくる。詩のことは良く分からないけれど、詩が良く分か
らない理由がなんとなく分かってきた。

弥恵は家に帰ると真っ先に自分の部屋に飛び込んで机に向った。
勝手に部屋に入り込んでいた、いないはずの兄貴はものの十五秒で
スタボロになった。机に向った弥恵はカバンから手帳を取り出し、
ソコに溢れ出て来る気持ち殴り書きした。別に書いて気持ちが休ま
るわけじゃない。必要だと思っからだ。毎日の断片的な想いがいつ

か、きつとパズルのように組み合わせさせて答えになってくれるかもしれない。だから弥恵は一つだけでは何か分からないジグソーパズルのピースのような、不思議な文句を書き連ねている。

さて、長い長い前置きは女の子に嫌われるのでコレくらいにして、じゃあそろそろ本題の方に移りましょうか。

《媚薬の研究》

それを取り巻くピアンネ娘たちの明朗快活な群像劇をとくところご覧あれ。

第一幕

【1】

ピアンネの中等部の校舎の一階、職員室、校長室ときて、一番東側には保健室がある。生徒数がマンモスと形容するよりもウルトラサウルスと比喻した方がふさわしいほどにピアンネは女子で溢れかえっているから、保健室にはベッドが二十台設置されていた。が、ピアンネの天衣無縫の女子たちが温いベッドに二十人も寝そべる光景は学園創立以来なく、当初は三人勤務していた保健医はいつの間にか一人になっていた。

その仕事内容も主に水質検査と、ときたまやってくる女子たちとのカウンセリングとは名ばかりの雑談と、最近よく運ばれてくるゴールド&シルバーの介抱くらいになっている。

ただっ広い保健室にたった一人の保健医は窓際に並ぶ白百合を突っつきながら嘆息する。

「……暇すぎて死にそう」

暇すぎて、白衣の似合う保健医、藍染陵あいでめやちか、二十六歳はセーラー服がピッタリと似合いそうな童顔を苦痛で歪めていた。暇すぎて、先月結婚したばかりの彼のことを思い出していた。その結婚は互いの両親が画策したいいわゆる政略結婚だった。陵の両親と彼の両親はそれぞれ財閥系の素材メーカーの重鎮で、というわけだ。彼は二歳年上で、ピアンネの初等部の社会の教師をしていた。ドラマで考古学者の役を当てられそうな渋めの顔を、陵は嫌いじゃなかったし、山岳用のリュックサックが似合う髭も中々素敵だった。彼は人当たりがよく、表面だけじゃなくて本当に優しく、生徒たちからも人気があった。結婚相手として、これほどの人はいない、両親は陵にそう言ったし、陵もそう思った。だから三ヶ月の交際期間を便宜的に執り行つてから、事務的に結婚した。だからといって感慨が何もない

かったというわけではなくて、陵は泣いたし、嬉しかったし、羽が生えたような気がした。

しかし、彼には問題があった。

彼は男が好きだったのだ。彼は土下座して陵に謝った。初夜のベツドの上で謝った。『ごめん、すまない、実は俺は男が好きなんだよ、お願いだ、ごめん、待ってくれ』

ホモと、ゲイと、同性愛者には格別に理解のある陵もさすがに戸惑った。戸惑い過ぎて、先に下げた頭を上げたほどだった。ホモで、ゲイで、同性愛者の彼に『待ってくれ』といわれたらなんと言えばいいだろう。

答えは未だ出てこない。「……暇すぎて死にそう」

誰か、彼のことを忘れさせてくれるような厄介ごとを持ってきてはくれないかしら。

陵がそう思ったときだった。

『せんせー、今日はゴールドです』

志が保健室に運ばれてきたのだ。いつも通り、気を失い、オーバーヒートしている。

「毎度、ご苦労様」

陵は志を担架に乗せて運んできた二人の女子にラーメンの食券を渡し、労った。二人は保健室の時計を見て、まだ食堂におばちゃんが見機している時間だということを確認してから、『せんせー、ありがとー』と言って、一目散に駆けていった。彼女たちは運び屋をして毎日の食事を豪華なものにしているのだった。

「さて、」

陵はベッドに横たわる志の服を脱がせた。下着まで汗だくなので、すっぽんぽんにする。陵は志の綺麗な体を濡れたタオルで拭き、新品の下着を穿かせ、もう既に志専用になったタオル地のパジャマを着させる。まるで着せ替え人形みたいで、気を失っている志には悪いが、陵は楽しんでいた。綺麗な女の子を愛でるほどの幸福な時間はそうそうないだろう。

陵は志の綺麗に染められた金色の髪を指で梳きながら、透き通る頬を突つつきながら、スヤスヤという息遣いを聞きながら、志をじつくりと眺めた。

そうしていると、結婚した彼のことも忘れられた。

やがて、そろそろ日が沈み始めた頃に、「んあっ」というとぼけた声を上げ、志は目を覚まし、上半身を持上げた。陵は志のよだれを拭い、

「気分はどう？」と聞いた。

「……さいてーです」志は額を押さえながらそう言って、枕に顔を埋めた。エルに負けたことが鮮明に思い出され、堪らないようだった。「うー、うー、うー」

陵は彼女たちが交代に運ばれてくる理由を知っている。しかし、どうしてそう不毛な争いを行っているのか、陵にはすんなりと理解しがたいことだった。しかし、十四歳でそういう年頃だよ、振り返ってみれば恥ずかしいことばかりに夢中になっていたような気がする、と理解がないわけではない。

だからだろうか、志の視線が近頃陵に甘えてくるように小動物っぽく見える。気のせいだろうか？ 志が陵の愛撫を求めてくるように見えるのは？

陵は、ものは試しにと、ぎゅっと志を抱きしめた。

「な、なんですか、急に……」といいながらも志は抵抗しなかった。陵の腕の中で目を閉じる。十秒経って、志はふっ切れたように陵にうずまってきた。

「静まった？」

志はぴくぴくと頷いた。

「よし、じゃあ、」陵は携帯電話を白衣のポケットから取り出した。「保護者に迎えに来てもらいましょうか」

「なっ!？」志は途端に慌て始めた。「駄目、駄目、駄目、駄目!」

まだ愛撫され足りないの? 「ごめんね、志ちゃん、もう私たち公務員は帰宅する時間なのよ」

針が定時を指した腕時計を見せる。

「いや、一人で帰れますから、保護者は呼ばなくていいですから！」
志はふらふらとベッドから降りると、案の定、陵の支えが必要だった。コレはお迎えが絶対的に必要である。志を寮まで運んでくれる人材が必要だ。陵は寮に立ち入ることは出来ないから、出来れば志のお姉さんなんか丁度良く、志にはあまり似ていない高等部のお姉さんがいることを陵は知っていたから、そのお姉さんに電話を掛けようとしていたのである。というか、既にダイヤルしていた。

「もしもし、玉ちゃんたま」

『すぐにお伺いしますわ』

さすが十九回目だけあって、皆まで言わずに伝わったらしかった。
「あうはあう、あうはあう、あうはあう」

なぜか志はお姉さまが迎えに来てくれるというのに呻き声を上げている。「あうはあう」

「そんなにあうはあうしてどうしたの？」
気が触れてしまったのだろうかと心配になる陵だった。しかし、返ってきた答えは至極単純なものだった。

「昨日喧嘩して、まだ決着が、心の準備的な儀式があるほど、確かにそれは深刻な問題だ。陵にも二人の双子の妹と一人の弟がいる。兄弟喧嘩の深刻さはそれなりに熟知していた。兄弟喧嘩は時間が経てば経つほどに、処理が難しくなることも経験で知っていた。

「コレを機会に謝りなさい、」先生らしくピシヤリと言って、人差し指を立てる。「仲直りすることに理由なんていりません。先延ばしにして苦しむのはあなたであり、あなたのお姉さまであり、迷惑を被るのは第七軽音楽部のメンバーだいななバンドでしょう」

天姉妹は同じバンドで活躍していた。ゆえに、志は中等部二年の秋をエアロバイクでぶっ倒れることに費やすよりは、ギターを奏でる方がはるかに生産的で健全であるのだ。しかし彼女は才能溢れるシンガーソングライター。プレッシャーに弱く、情緒がすこぶる安

定しないのはご愛嬌というべきか。年がら年中姉と対立しては、様々な部活や遊びに逃避して、舞い戻っては対立して、そんな感じにぐるぐるとしていた。それは必要悪なのかどうか、毎度のサイクルを経ることにより、志からとてつもなくいい楽曲が生産されるのも確かだった。

この点、姉のもどかしさも募るというものである。

「……………その通り、すごく正論なんですけど、」

陵には素直な志は素直に反省の意志を見せる。志も自分の感情の起伏が他人よりもちよいとオーバードライブなのを分かっているのである。

が、しかし、

「でも、」志はすがりつくように腰に纏わりついて、陵の尻をなぜか驚掴み、必死の記号を瞳に浮かべて、母性本能をくすぐりたいいな顔をする。「あの鬼にココにすることが知れたらヤバイんですよ、昨日もエアロバイクを漕ぐ漕がないで喧嘩したんですけど、それがどうにかこうにか二転三転して、なぜか『あなた、もし、次にエアロバイクしたら、あなた、テルミンですわよ、テルミンしながら歌ってもらいますわよ』って激昂してからに、」

「そのテルミンを小ばかにしたような玉ちゃんの発言と志ちゃんの嫌がりようの方が気になるわね。テルミンはいいものよ。まあ、あのかゆくなる音のよさは二十二になるまでは分からないかしらね」「バカにはしてませんよ、あの創造的な音色が欲しくなるときもあります、あるんです、でも、観客の前でテルミンは死んでも嫌あ。まるで無駄毛処理を公に披露するみたいで」

「考えすぎよ。それに、まだこの国にはプロのテルミン奏者はいないという話を小耳に挟んだのだけねど」

「……………立候補しろってことですか？」

「志ちゃんの年なら可能性はいくらでもあるってそういう大人みたいなことがちよつと言いたくなっただけよ」

「……………エアロバイクも私にとっては可能性の一つなんです」

「ふむふむ」

「ソレを言っても、玉姉は理解してくれないんです」

「ふむふむ」

「バンドもエアロバイクもベースボールもサバゲーも油絵も空手も溶接も美容師も、全部私の可能性なんです。なのにあの鬼ときたら、

」

「誰が鬼ですって」カーテンからうにゅっと志になんとなく似た、しかし似てない、姉の玉の顔が覗いた。

「ひい！」

「やあ、玉ちゃん」

「先生、お世話掛けましたわ、さあ、志、さつさと帰りますわよ」

玉は志の襟首を掴んで、連行していった。志がテルミンを演奏する羽目になったのかどうかは、陵にはあまり気になることではなかった。

【2】

最近、比呂巳の様子がどうもおかしい。

とある日の放課後、ホームルームが終了し、カバンに教科書やお弁当箱や少し汗を吸ったピンク色の体操着とブルマを詰め込んでいるとき、弥恵ははたと比呂巳の様子がおかしいことに確信を持たざるを得なかった。

今に始まったことではない。

比呂巳が担任の藤原ふじわらと仲良く話していることは今に始まったことではない。が、黒板脇で何やらしゃべっている比呂巳と藤原を遠目で見てみると、まるで、まるで、その関係は互いに秘密を共有しあった仲に見えるというか、生徒と教師の垣根を越えてしまったような関係と言いますか、私と会話をしているときよりも澁刺としていて楽しそうと言いますか、女子って恋をするとキラキラしちゃうのなら、まさに比呂巳は先生に恋をしてキラキラしているように見え

て…………、

「はうあぁう、はうあぁう、はうあぁう…………」

弥恵はプシユケーと頭に血を上らせ、悶えていた。ひしつと頭を抱え、悶えていた。その奇行の周囲には、訝しげに見守る四人のクラスメイトのお嬢様たち。彼女たちは弥恵の『はうあぁう』を聞くのに慣れっこであったので、『どうなさって？』なんて問わず、『弥恵さんたら、また始まってしまいましたわね』と少々食傷気味にジト目を浴びせ、クスクスと微笑むだけである。

「はう！」

弥恵は突然奇声を放った。それに『なにごと！』とビクつくクラスメイトたち。

『一体弥恵さんの心の中ではどんなエマージェンシーが発動しますのっ！』

いくらお嬢様といえども、『はう！』の原因を聞かずにはいられなかった。

「そういえば、」弥恵の声音は神妙だった。だったけれど、次第に声のトーンが家賃の振込みを忘れていたくらいのおっけなさになっていく。「今日、鼓笛隊の練習だった」

『え？…………それだけ？』

お嬢様たちは不満げである。弥恵はもつととてつもないことを考えているように『はうあぁう』していたから。例えば、実は私レズなの、そういう重大なカミングアウトのことを四人のクラスメイトは思ったわけである。ちなみに弥恵本人からレズのカミングアウトはまだない。『本当にソレだけ？』

「え？ うん、」お嬢様たちの不満そうな表情に戸惑いながら弥恵は返答し、

「って、ソレだけってどういうことよ、私が鼓笛隊のコルネット奏者であることに何か納得できない点でも？」

と最近膨らみ始めた胸元に手の平を当てて、仏頂面を見せ、異議申し立てる。

弥恵はピアノの初等部四年から六年の生徒で構成される聖歌隊と並ぶ由緒正しき鼓笛隊に所属していて、コルネットを担当していた。コルネットとはトランペットを小ぶりにしたような楽器であり、いわば鼓笛隊の花形である。弥恵は鼓笛隊の中で最も人気の高いポジションをオーデイションで勝ち取ったのであり、それを妬む生徒もいるとかいないとか。そんなわけでの、

「私が相応しくないとでもっ！」という立ち振る舞いのわけである。若干十歳にして、弥恵には譲れないものが人一倍多かった。

『いや、そういうんじゃない、』 クラスメイトたちは両手を振ってあわあわと、弥恵のご機嫌をお伺いする。『弥恵さんの腕前に一抹の疑問も不満もありません、けれど、ただ、弥恵さんの最近膨らみ始めた胸に秘めた壮絶な思いは、鼓笛隊の練習のことではなくて、もつと別の、重大なことではなかったのですか、ということをお聞きしたいと思つてのぶしつけな質問で御座いまして、』

そう言われ、弥恵はあからさまにギクツとした。その態度にクラスメイトは色めきたった。『やっぱり弥恵さん、おっぱいの中に一物お抱えだったんですわ』とはやしたてる。しかし、弥恵の心で点灯していた『ギクツ』は、別のところにあつた。

もしかして、私が憧れのお姉さま目当てで鼓笛隊に入ったことがバレちゃったの？

それは今後の進退にかかわる重要機密である。例え、悟られているとしても、自分の口からいうなんてバカな真似は決して犯してはいけない。今まで築き上げてきた、崇高なイメージが東京湾に沈んでしまう。

それに、それに、ソノ恋はもうおわったんだから……。

弥恵はソノ失恋を思い出して苦しくなった。そして、また藤原としゃべり続ける比呂巳を視界の隅に見てしまって、また「あうはあう、あうはあう、あうはあう」となってきた。

しかし、いつまでもものうのうと発作を繰返し、へたれているばかりではいけない。

ココは、比呂巳に対して横柄な態度を取るべきだ。例えば、さよならを言わずに教室から出て行ってやるとか。
ぶいっ。

弥恵は発作を引き起こす困りものの感情を勢いよく振り払い、『ぶいっ』と比呂巳には及ばないまでも可愛いクラスメイトのお嬢様たちに、自分の魅力と思想の奥深さを連想させ、「ではでは、皆さん、ご機嫌麗しゅう」とカバンを手にとり鼓笛隊の練習が行われる第三音楽室へと歩き始めた。
すたすたすた。

クラスメイトたちは弥恵の安っぽい神秘的な振る舞いに『はあー、弥恵しゃまあ』と掠れた声を上げている。

高貴な口り顔、初等部の四年生にしては大人びたものの考え方、自らの喉元に鋭いナイフを常に宛がっているような厳格で流麗な振る舞い、その他諸々の属性はクラスメイトのお嬢様に所有欲を抱かせるほどの魅力がある、と弥恵は自分自身をそう自覚していた。自覚させるほどの雰囲気は弥恵を取り巻いていることも確かだった。

その立場に不満などない。皆、お姫様のように私を見てくれる、その立場に不満などあるはずがない。可愛い女の子に見境のない弥恵は、来るもの拒まず、抱いて、キスして、舐めたりしてあげること一度や二度のことではない。

しかし、どうして、と弥恵は下唇を甘噛んだ。どうして、比呂巳に私の魅力は届かないだろう、と自意識過剰に弥恵は肩で空気を裂いて、教室を後にした。その後ろ姿は気品漂いキラキラと輝いていて、長らく血を吸っていない妖刀のようだった。

【3】

ふじわら まさあき
藤原正史、初等部で社会を教える二十八歳の最近の悩みは最近夫婦の誓いをかわした彼女のことに尽きる。彼女は二歳年下の二十六歳で中等部の校舎の保健室に勤めている。政略結婚だった。が、彼

女は気さくで、保健医という身分にそぐわず優しさに満ち溢れていたし、断る理由もなかった。女子高に勤務してから、ホモで、ゲイで、同性愛者になりつつあった藤原は、これを機に普通に女性を愛しようと決め、結婚を承諾した。だからといって、藤原は無機質に抑揚乏しく結婚という儀礼を事務的に済ませたのではなく、世の力ツプルが経験するであろう、感動を得ていたことは事実で、背中に羽が生えたように思えたものだった。

しかし、彼女には問題があった。

彼女は女が好きだったのだ。彼女は土下座して藤原に謝った。初夜のベッドの上で謝った。

『ごめんなさい、実は私は女の子が好きなの、お願い、まだ、心の準備が出来てないの』

レズと、百合と、同性愛者には格別の理解のある藤原もさすがに戸惑った。女の《子》というところもちよいと気に掛かった。俺の嫁はロリコンなのか、いやいや、そんなことよりもまずはレズビア人ということに驚いて、どうして男の俺と結婚したのかと問いたくなって、とりあえず自分がホモで、ゲイで、同性愛者であることを咄嗟にカミングアウトしてしまった。当然、その告白に彼女も度肝を抜かれたらしく、藤原と嫁の間には重厚な壁がそびえ立った。

ホモとレズの夫婦に未来はあるのだろうか？

その悩みの相談に乗ってくれたのは、今年からピアンネに勤め始めた根っからのホモで、藤原とプラトニックな関係を持つていた理科教師の森川利洋もりかわとしひろではなく、藤原が担任を勤める四年E組の生徒、広瀬比呂巳だった。

比呂巳は成績もトップクラス、スポーツ万能、ピアンネの天衣無縫な生徒の中でも一際天真爛漫で、いわば、最強の女子だった。

その最強の女子が、どうして藤原の相談事に乗ってくれるかといえは、男同士が乳繰り合うことを想像して素晴らしい快樂を得る、という行為に多少なりとも興味があるからだった。

きっかけは階段の踊り場で森川とのプラトニックな関係を目撃され

てしまったことに端を発している。

その光景は比呂巳にとつての洗礼であつたらしい。

その日から、比呂巳は初等部四年の授業では求め難い刺激を求め始め、藤原に様々なことを聞いてきた。藤原も溢れ出る好奇心を咎めるのは良くないと思い、包むところはオブラートに包み上げ、様々な大人の世界を比呂巳に伝えた。いつしか二人は年と性別を越え、長い間戦火とともに掻い潜ってきた友のように互いを思い始めていた。

そして今日という日の放課後、戦友は藤原に大事な手帳を渡してくれた。

「せんせー、一度、試してみなつて」

敬語も使わず、ニヤニヤと邪気のない笑みをこぼしながら比呂巳は言うのだった。その手帳には二〇三高地を前になす術のない藤原を救う、起死回生の手段が書かれているのだという。

第二幕

【4】

ピアンネの図書委員会は返却期限を守らない人間を極端に嫌う。

いつの頃からか、図書委員会には本の回収部隊が設けられ、いつのころからか回収部隊の巡回が一週間に一回の頻度で始まった。ターゲットは一週間の返却期限を守らず、あまつさえ図書委員長がしたためる督促状を無視したアウトローである。その回収部隊から逃げることもなだて出来やしない。逃避を想起した時点で、図書委員は回収の手はずを整えている。その制裁に例外など無い。いたいけでジヤングルジムに夢中の初等部の低学年の生徒たちも免れる事など出来ない。もちろん教師も同様に、その制裁のターゲットになりえるいや、むしろ教師たちの方が忙しいというつまらない理由をつけて、なかなか図書の返却に図書館に足を運ばない。足を運んでも、本の返却を忘れ、逆にさらに借りていくという体たらくである。生徒のはちきれんばかりの利発さは正反対に、ピアンネの教師陣にはデイドリームビルパーを気取る怠け者が多かった。

ガラガラガラ。「失礼いたします」

秋風が心地よい今日という日も初等部の職員室にスーパーのカートにスーパーの買い物かごを乗せ、高等部の図書委員がやってきた。その風貌は図書委員のイメージと寸分の狂いなく厳格そうで、どことなく将来は同性愛に走りそうなきゅっとした唇をしている。新調したばかりのブルーのおしゃれメガネは、特徴があまりない、薄っぺらい端正な顔立ちにピッタリ似合っていた。

彼女は例によって、真っ先に社会担当の藤原の席に向った。藤原には数十件の前科と、期限を超過した本の借りが大量にあった。

藤原はいなかった。教頭先生の席の後ろの掲示板によれば、藤原は出張中ということだ。督促状を無視して藤原は学校を去ったとい

うことだ。腹立たしい。さらに腹立たしいことに、藤原の机の上は本の山が出来ていた。明らかに一人分の貸し出し数を超えている。図書委員の目を盗み、勝手に持ち出したのだろう。これは早いところ図書館の近代化が望まれる。大学の図書館のようにマイクロチップを貼り付けたりして。

乱雑な机の上には物書きできる空間はマウスパッドほどしかなく、そこにもマイクロソフトのグレーのマウスが陣取っていた。その雑然とした光景に図書委員は呻いた。その神経質な眼には、将来はこんななおおざっぱな男とは結婚したくないという風な厳然たる決意が読みとれる。

図書委員は藤原の本を片端から、カートの中に放り込んでいった。その中には期限の過ぎているものもあるだろうが、委員長からのお達しは藤原の本をすべて回収し、一ヶ月間の貸し出し不可を申しつけることである。

図書委員の彼女は藤原の机に油性のサインペンで《一ヶ月間、図書館への入室を禁ずる By 図書委員長》と殴り書きして、すると次の収集場所へと向かった。

【5】

エルは原子力発電所の向かいの温泉宿で生まれた。エルの両親は科学者としてこの国にやってきたが、エルが母の胎内に宿ってから、枯湯寸前の温泉をただ同然で買い取り、ハンガリーのルダシュのような八角形の浴場を作った。父の話では、エルが産まれてすぐに、枯れていた温泉は湧き出したのだという。

エルは水蒸気の中で育った。

エルの乳児の頃の記憶は、浴場の、脳みそが溶け出してしまいうな、ぬくい匂いだった。その匂いは紛れもなくこの国の匂いだった。エルはその匂いが自分に染み込んでいることを自覚している。

十三歳の夏に、エルはハンガリーに出かけた。ハンガリー語もし

やべれるし、エルは小さい頃から人並みはずれた度胸の持ち主だったから、両親は隠し持っていたという大量のユーロ札をエルに渡して送り出した。十数年前より、ハンガリーの物価は十倍以上も下がっていた。

別段、ハンガリーに行つて何をしようとか、何を見ようとか、そういうことは決めていなかった。恥ずかしいことを言うと自分探しだった。エルの中にはまだこの国か、ハンガリーかで迷いがあった。自分の中のハンガリーを追い出すために、エルはハンガリー平原をひたすら歩き、ドナウ川で釣りをした。ブタペストでフォアグラを食べ、ブルゲンラントのワインを飲んで、自分はハンガリー娘ではないと自覚した。

ブタペストのヒルトンホテルに泊まり十日経った雨の日、エルは無性に握り寿司が食べたくなくて、街に出た。寿司屋は直ぐに見つかった。毒々しいネオンの眩い、アボガドがわさびの代りに添えられていそうなアメリカ製の寿司屋だった。まあ、酢飯と魚介類があるなら……、エルはその店に入った。しかし杞憂だった。寿司はさらに乗ってクルクルと回転していたし、カウンターに立つ覇気のないハンガリー人を除けば、エルの国の回転寿司チェーンとなんら変わるどころがなかったのだ。そこにはアボガドのカリフォルニアロールも、ロブスターの握りも、エスカルゴの軍艦もなかった。きつとアメリカ人は学んだんだな、とエルはウニを頬張りながら思った。「ウニ、うめえー」

その寿司屋から帰りだった。一目で日本民族だと分かる顔つきの少女が、アンティークショップの軒下で雨宿りをしながら、地図を片手に困惑した表情を浮かべていた。背丈はエルと同じくらいで、茶色い髪の毛は雨で濡れていた。エルは友達に会ったみたいに嬉しくなつて「久しぶり」と話しかけていた。

その人が燦獄^{さんごく}三國^{みくに}だった。

三國はいきなり流暢な日本語を話すハンガリー娘に対して、丸い目をパチクリとさせていたが、エルが身分を手短に話すと、安心し

たようにふんわりと笑った。

「こんなところで後輩に行くわすなんて」

三国はピアノネの中等部三年に在籍していた。エルは相合傘で、自分の泊まるホテルまで三国を案内した。バスタオルを三国に渡し、濡れた髪を拭くように勧め、「シャワー浴びる？」と勧め、紅茶を勧めた。

三国はシャワーだけ断り、バスタオルを首に巻き、暖かい紅茶を啜りながら、

「あなたのこと、チラリと見たことある気がする。エセハンガリー娘と評判のエルヴィーンなんかかんとか」

と、紅茶の蒸気のような、暖かい声音で言った。

「エルでいいよ、面倒臭いから」

二人はすぐに打ち解けた。

一台のダブルベッドの上で、エルは胡坐をかき、三国は寝そべって、ピアノネのことを話し、ブルマの履き方についてそれぞれの持論を発表しあい、国で流行りの同人作家チヨコレートムースについての意見を交換した。

夢の中から現実に戻されたような感じだった。やっぱり私はエセハンガリー娘なんだ、とエルは自覚した。

「ところで、先輩はどこに行こうとしてたんだ？」

「おおうつ、そうだった、そうだった、のんびんたらりと雑談している暇なんてないんだった」

と言いながらも三国は慌てた素振りを見せず、おもむろに水を吸った地図をポケットから取り出し、広げ、目的地を指差した。「ココなんだけど」

エルは「うーん？」と目を落とす。

「ミリタリーシヨップ？」エルは三国の顔をまじまじと見た。この人の優しい顔にミリタリーはあまりにもかけ離れていた言葉だったから。

「コノ事は機密事項よ」

燦獄三国先輩は自らを《バルチャー》と名乗り、「ばーんっ」と銃を撃つ真似をした。

「ば、ばるチャー？」

エルと三国はその店に向った。雨はすっかり上がり、透明度の高いブルーに空は溢れていた。その店は三国が雨宿りしていたアンテイクショップの裏通り、メインストリートから少し外れた、比較的住宅街と呼べる入り組んだ所にあり、つまり立地条件は最悪だった。崩れたレンガ道と地図の道は違っていて、

「コレじゃ私の索敵能力をもってしても分からないわよね」という按配だった。

店はトミーガンのBGMで、陳列棚はハンガリー軍だった。三国はエルを入り口のハンガリー国旗の下に置いたまま、瞳を爛々と輝かせ、迷彩服をあれやこれや着込み、モデルガンを取り、鏡に向って構えた。

構えたときだった。三国の目の色が変わった。

鏡越しにエルは胸を打たれた。三国の弾丸が届き、炸裂した。

エルはその目に打たれたのだった。そして、やっとハンガリーに來た意味が分かった。

ひげのもふもふとした店の亭主が興味深そうに三国を見ながら、エルに話しかけてきた。もちろんハンガリー語で。

「中国人かい、それとも日本人かい？」

「違うよ。中国人でも日本人でもない。名前のない国の生まれだよ」

「あの国のことかい？」

「そうだよ。珍しい？」

「あの国のお嬢ちゃんたちは皆あんな目をするのかい？」

「先輩だけだよ、なんたってバルチャーだからね」

三国は手に取ったミリタリーグッズを片端からお買い上げになり、親日の亭主を喜ばせた。が、少々ユーロが足りなかったようだ。三国は残念そうに商品の選別を開始した。帰りの飛行機の間まであまり無いよう、「うー」と泣きそうな顔をしていた。

「コレ、使つてよ」

エルはあまりにあまっているユー口札を三国に渡した。

「いいの？」

エルは満面の笑みで頷いた。「夏休みが終わったら、絶対に返してくださいね」

夏休みが明けて、エルは三国と再会し、約束は果たされて、《バルチャー》となった。

そして、年月は瞬く間に一年を終え、エルは今、中等部校舎の屋上で寝そべっていた。秋風が心地よかった。風が頬をかすめる。制服は緩み、短いスカートは風ではためいて、純白のパンツは人工衛星の高精度カメラに向って煌いている。

コンクリートの温度が気持ちいい。

「……………眠い」

うとうとまどろみ、このまま次の授業をサボることをエルは半ば決めていた。放課後までの昼寝を決行しようとした。銀色の髪が強風で煽られた。

その時だった。

エルの瞳に何やら尋常でない事態が飛び込んできたのだ。

最初、あまりにいきなりのことで、目の錯覚かもしれないと疑った。けれど、向かいの初等部校舎の屋上のフェンスをよじ登る娘の姿を、エルのエメラルド色の瞳は確か捉えたのだ。

「なっ、あいつっ、何してんだよっ！」

エルは珍しく慌てた顔つきになって叫んでいた。フェンスの金網を掴み、頬を擦りつけ、叫ぶ。が、エルの声が向かいの金網をよじ登る娘に届くためには結構な距離があった。

あいつ、まさか……………。

初等部の娘が屋上のフェンスをよじ登ってまでやることは一つだ。というか、屋上でやることといえばソーラーカーの実験と写生大会と教師の目を盗んでの昼寝と飛び降り自殺しかないじゃないかっ。オタオタオタオタ、エルはくるくると回転しながら焦った。

「どうすんだ、どうすんだ、どうすんだ」

こんなときの対処法なんて道徳の教科書にも、校長の話にも出ていなかったぞ。

焦っている間にも、娘はゆっくりと死へ近づいていつている。

ともかくっ！ 彼女の自殺に気付いたのは自分しかない。彼女の自殺を止められるのは自分しかない。いないじゃないか！ エルは走った。向かいの屋上まで三分つてところか？ 時間切れになるなよ、「死ぬなよ、ばかっ！」エルは階段を二段抜かして駆け下りる。初等部校舎まで行くには三階から伸びている渡り廊下を走らねばならない。そこを通過する。その渡り廊下から屋上を見上げると、初等部の娘はすでにフェンスの外側にいて、思い詰めた表情で足元を見ている。エルは加速した。《バルチャー》として鍛えた健脚をフル回転させる。速度をそのままに階段を駆け上がる。「授業中に何してるの！？ あっ、コラ、待ちなさい！」途中で教師に問質されたが、躊躇うことなく振り切った。教師に彼女の命が守れるはずない。壊すように屋上に出るための扉を開いた。

空の明るさが眼に飛び込んでくる。空気に揺さぶられながら、エルの一步がコンクリートを踏みしめた。

左を向いて、右を見る。その視線の先に自殺志願者の娘がいた。彼女は十字架をきって、今にもふわりと飛び降りてしまいそうだった。ショートカットの黒髪はすでに飛び降りてしまったかのようにはためいている。

けれど、エルがこの場所へ来る間に彼女は飛び降りてしまわなかった。それはつまり説得の余地があるということだ。彼女はまた迷っている。迷うくらいなら、屋上に来るなっ、ばかっ！

エルは彼女に向かって走った。

『一度死んだ気になれば、何でも出来る』。いつだか三国が言ったその言葉の意味を、エルの肉体にはまだ分からないその言葉を彼女にぶん投げようと考えながら、

「待てコラッ！」と喉を引き絞って叫んだ。

娘は全身をビクツと震わせてから、そーっとエルに涙目を向けた。その水晶玉のように輝く黒い瞳の持ち主は弥恵だった。初等部四年の高野弥恵だった。エルと弥恵は、この時刻、この場所で遭遇したのだった。

エルはフェンスに飛び付いて、ヤモリのようにすると登る。そしてまるで生と死の狭間、一メートルもないフェンスの外側のコンクリートに着地した。エルの一連の動作は安定感タップリだった。軸にブレがない。

「自殺なんてバカな真似はよせっ！」

スタツという効果音の後、間髪いれずに、エルは弥恵に体当たりするように密着した。フェンスの網に指を絡ませる。弥恵は一瞬いやいやと逃げるような素振りをしたが、思いもよらぬエルの腕っ節に簡単に捕らえられた。

「いや、いや、離してっ！ 離してください！」

「はなしてたまるかっ！」

弥恵は狂ったように首を振り、やんややんやと奇声を上げ、目をマインス記号にして、エルのいろんな場所をポカポカと殴った。エルもアドレナリンを注射されたように、弥恵をきつく締め上げる。しかし、その作業は容易ではなかった。弥恵は空手の有段者である。思いもよらぬ娘の拳の力強さと鋭さに、エルは舌を巻いた。簡単に説得できそうにないと思った。しかし、説得して、回心させなきゃ、この娘はこの学園を事件現場に変えてしまう。その威勢をエルは弥恵から感じていた。

「私はエルヴィーン・クイード・コンベルハイアー、中等部二年C組、温泉宿の娘だ、お前はっ？」

エルの唇が弥恵の唇の前でたたたましく動いた。弥恵はソコで、自分の自殺願望をすんでのところで踏み倒そうとする綺麗な外人が、エセハンガリー娘と評判のエルさんであると気付いた。

気付いてしまったから決意が鈍った。エルさんにきつく愛撫されているのに死んでしまうのは惜しいことこの上ない……、まあ、最初

から本気で死ぬつもりなんてなかったんだけど。

弥恵は、

「あ、あの、」私は中流階級の父と母の間に生まれた至って中流の一人娘です。兄なんていません、

と、言いかけて、しかし、弥恵は口をキツと告ぐんだ。どうして？

やはり、本気なのか？

いや、そうではなかった。弥恵のリビドーはむくむくと膨らんで自殺願望なんて毛先ほどに小さく柔らかくなっていた。弥恵の発作的に生じた自殺願望はハタリと消えていた。

……もう少し、もう少し、ジタバタすれば、もっとギュツとしてくれるかもしれない。

「お、おとおお教えてたまるものですかっ、コレから死ぬんですもの、エルさんに私の名前を知ってほしくないんです！」

エルは思った。これから死ぬ人間のクセに、元気すぎるだろう。「死ぬ前だから、聞いてやるって言ってるんだよっ！ せっかくだ、一度しかない飛び降り自殺なんだ、最後に私につき合わせてくれよ、悩みを言えよ、笑ってやるよ、その悩みの小ささを笑ってやる、例えば、そうだ、宇宙と比べてやるから、話せよ、死ぬのはそうしてからだって遅くない、そうだろ、だから、」

「宇宙と私の悩みを比べないで！」

エルは予想外の剣幕に押し黙った。……コイツ、と少しムカツと

一方、弥恵は内心ほくそ笑んだ。笑みがコロコロと零れて仕方なかった。ああ、また一人、私ってばお姉さまを手中に、私ってばなんて罪深い、なんて思いながら、弥恵の口から次々に出てくるのは悲哀（？）に満ちた言葉の数々。

「宇宙の荘厳さを思えば十歳の乙女が自分のちっぽけさに気付き、『よおうし、明日から頑張るぞいっ』、なんて回心すると思いですか？ 言わせて下さい、エルさん、回心の覚悟は宇宙に比べて

貧弱ですか？ 確かに小生の体に広がる悩みは宇宙空間を浮かぶ銀河クワサーに比べて、ずっと小さくて、小さすぎて、秤ハカリなどいりません。細菌です。ウイルスです。けれど、貧弱ですか？ 細菌は貧弱ですか？ ウイルスは貧弱ですか？ エルさん、私の悩みは小さいかもしれません。でも貧弱じゃないんです。悩みは私を確かに苦しめるんです、飛び降りてしまいたいと思うほどに苦しいんです。エルさんは一体、私の何を知っているんですか！？ ああ、死にたい、エルさんがこの腕の力を抜いてくれたら、」そういえば、エルはもう腕に力なんぞを込めてなどいなかった。「直ぐに楽になれるのに、ああ、死にたい、ああ、今すぐに死んでしまいたい」

一筋の涙が弥恵のふにやっとして柔らかい頬を伝った。その涙はエルエルの胸元に落ちた。演説の終了と同時に落ちた。絶妙のタイミンタイミンググだ。弥恵は確信した。エルさんの同情を勝ち取った、エルさんの心に染み入ったはずだと。

しかし、エルエルの心中は冷ややかだった。所詮初等部四年の演技である。バルチャーバルチャーとして修羅場を幾たびも掻い潜ってきたエルである。コイツ、さっきから心にもないこと言いやがって、と胃のムカつきがピークピークに来ていて、なんだか苛めたくなってきた。「……さつきから気になってたんだけど、どうして私の名前を知ってるんだ？」

「中等部の綺麗なお姉さまたちのことはフルネームからスリーサイズ、住所まで熟知しています、それが健全なピアンネ娘の嗜みですもの！」

ちよっぴり自慢げに弥恵は言い放った。なんだか開き直ったような風な物言いに、エルは不信感を募らせる。コイツ、実は超絶に面倒臭いヤツなんじゃないかっていう不信感を募らせる。「そうか、…… 上級生のフルネームやスリーサイズや住所を突き止めるのが、初等部では流行っているのか？」

「え？ あっ、いや、その………」

弥恵はちよっぴり調子に乗ってしまった五秒前の自分を叱咤した。

お姉さまのフルネームやスリーサイズや住所を突き止めたいと思うなんて、この学園では、百合で、ストーカーで、将来有望な変態さんの初等部四年の小娘以外に有り得ないからだ。

弥恵は、

「……べ、別に」とあわあわと口を尖らせながら、「どちらかと言えば、中等部のお姉さまたちを盗撮するのが流行っていて、……はっ、ええっつと、……っつてそんなことはないんですけどね」と言い繕った。

危なかった、百合で、ストーカーで、将来有望な変態さんだと思われてしまうところだった。弥恵は額に浮かび上がった汗を「ふうっ」と拭った。

そんな弥恵の思いとは裏腹に、エルは疑い始めていた。

この娘が犯人ではないのか？ と。

最近、ストーキング行為を風紀委員に訴える生徒が増加しているという噂を耳にしていた。エルも何回か、不穏で、おぞましい気配を感じたことが、気のせいを含めて五十七回もあった。主に女子トイレ、更衣室の前や、階段の中腹や、スク水が溢れるプールの授業などで。

この小娘はその犯人ではないのか？

でも、何の目的があつて、盗撮なんぞ？

弥恵にとつての幸運はエルが同性愛という概念にあまり親しくはない、ということだった。が、エルは弥恵がピアンネの美少女たちの写真で小遣い稼ぎをしているのではないだろうか、という金の絡んだ犯罪の下手人ではと疑い始めた。その疑いは、弥恵が饒舌に飛び降り自殺の理由を話し始めたことで増していった。弥恵は同情と愛情を、この機会にガツチリと頂こうとして、涙の数を増やして語り始めたのである。「ねえ、エルさん、エルさん、どうして私が自殺をしようと思ったか聞いてくださいよ」

「はあ？」まあ、いいか、この小娘、死ぬ気なさそうだし。「えっ」と、どうして？」

「……それ、聞くんですか？」

必殺の上目遣い。多少少女を愛でる趣味のある女子には即行で利くのだが、確かに女の子に興味のないエルでも可愛いと思うほどの魅力を持つているのだけれど、しかし、エルはこめかみに十字を浮かび上がらせるほどに腹が立った。しかし、我慢、我慢、ココで気が変わって飛び降りられたら元も子もない。……お願い、話してくれよ、どうしても聞きたいんだ」

「そんなに私に興味関心がありませんね？」

「ソウナンダヨ」日本語覚えたてのハンガリー人のような発音だ。

それに引つかかることなく、すでに自分の都合のよい世界の住人は、「仕方ありません特別ですよ、エルさんにしかしゃべりませんからね」と朗々と語り始めた。

「私が鼓笛隊に入っていることはご存知ですか？」

シラネ。

「エルさんの視線は前々から感じていましたよ。赤地にチエック柄の鼓笛隊のユニフォームが一番似合うのは弥恵ちゃんね、という視線を感じていました」

ミタコトネーヨ。

「鼓笛隊で私、ある先輩に苛められているんです」

ソリヤ、ソノセーカクナラナ。

「コルネットのリーダーの六年生なんですけど、その先輩が練習の度に私を怒鳴りつけるんです。高いドの音が不安定よ、ソの音が不安定よ、低いドが不安定よって」

キヨウイクネツシンナ、イイセンパイジャナイカ。

「それだけならまだいいんです！ 先輩、練習が終わるたびに個人練習とか言っつて、私を呼び出して準備室で、二人つきりで、練習させるんです！ しかも、先輩は自分のコルネットを使えばいいのに、その個人レッスンのときだけ、私のコルネットを二人で吹き合っつて使うように強いるんです。例えば、先輩がお手本を見せてくれて、その後に私が吹く。駄目だと即座に霧吹きを目元に噴射してきて、

こうよってコルネットを取り上げて、その繰り返しなんです！ 何回、あの先輩と間接キッスしたか！」

「ツンデレじゃね」

「そんなことくらい分かってますよ！ 私、学園一、可愛いから、先輩が好きになっちゃうのも完全に頷けます」

分かってんのかよ、もう万事自己解決してんじゃんかつ！

「……と、ココまでは前フリなんですけど、」

思わずエルは弥恵を叩き落としそうになった。叩き落さずに済んだのは、弥恵が盗撮の犯人であることを証明する供述を始めたからだった。

「実は、私、手帳をどこかに落としてしまったんです」

「手帳？」

「はい、手帳です」弥恵の声音は前フリのとくと違って、なんだかしおらしかった。エルは、コイツは本当のことを言っていると思った。弥恵は手帳をなくしてしまって自殺をしようとしたのである。無論、本気で死ぬ気はなかったのだが、足を屋上のフェンスの外に運ばせるほど、弥恵にとっては切羽詰ったことだったのだ。「その手帳を見られたら、私、この学園で生きていけません」

弥恵は顔を両手で覆った。

あの手帳には比呂巳への想いが綴ってある。それを見られてしまったのは、恥ずかしすぎて生きていけない。弥恵の頬は朱に染まった。茹でダコ並みに一気に茹で上がった。エルとの密着でソノ恥ずかしさは干潟にさらわれてしまったけど、一瞬我に返り、考え出すと、込み上げてくる衝動は弥恵を死へと向かわせた。元来、極度に恥ずかしがり屋の娘なのである。その女癖の悪さからは窺えないナイーブな面も普通の女子同様に持っている。

「や、やつぱり死ぬっ！」

恥ずかしさを思い出し、カァツといたたまれなくなって、エルから見れば突然、弥恵は自殺願望を読みがえらせ、叫び、エルの腕を押しやって飛び降りようとしたのだった。

もちろん、極度に思い詰めた弥恵だが、死ぬ気などさらさらなかった。その場の勢いである。本気ではない。本気ではない証拠に、弥恵はエルの熱い熱い抱擁を期待して、少し悦に入っていた。

が、しかし、ふと、感じれば、弥恵の体はふわっと宙に放り出されていたのだった。

なんで？

どうして？

地面がない、踏み場がない、続きがない、ココは終わる場所に違くない。

刹那的に、濁流のように、死の恐怖が弥恵の全身を駆け巡った。

声も上げられなかった。重力を感じて、体の重さを知る。ブラックホールに取り込まれてしまったように全身が引き伸ばされた。まだいたい、ココにいたい、この世界の女の人に優しくされたくて、弥恵は重力に抗っていた。いやだつ、死にたくない。

まだ、弥恵は生きていた。

「……お前だつたんだな」

弥恵が屋上から落下せずに、ぶらぶらと揺れて、生きながらえているのはエルが弥恵の細い手首をきつく握ってくれているおかげだった。弥恵は死んだ目をして、エルを見上げている。

「お前が盗撮の犯人だつたんだな、そうだろ、きつと手帳にはソノ証拠が残っていたんだろ、そうだろ？ 自殺騒ぎを起こせば、周りの同情を引けるとでも思つたんだろ、そうだろ？」

弥恵は小さく首を振った。まだ、死に片足を突っ込んでいない思考回路が、弥恵の首を横に振らせたのだった。

「嘘付け」

エルは手首を握り締めた右手の小指を立てた。瞳孔が見開かれ、頬が痙攣し始めた。

「冗談ですよ」

そう言うからに、エルは薬指も立てた。すると、弥恵は本気の涙を流し始めた。

「離さないで、お願い、エルさん、私です、盗撮の犯人は私です、認めます、だから、離さないで、助けて、私を助けてください」
「どうして、お前を助ける必要がある、お前は死ぬ気だったんだろ？ 死ぬきで屋上まで来たんだろ？ 授業をサボって悪い子だな、そんな悪い子は天国にはいけないよ、もちろん、盗撮なんていう悪さをしたり、神様に授かった命を無下にするようなやつは天国にはいけないが、でも、私が殺せば、行けるかもしれないなあ、神様が同情してくれるかもしれないなあ、天国行きの切符をくださるかもしれないだろ？」

どういうわけか、この時のエルの精神状態は普通じゃなかった。殻が剥がれて、本性が露になったというものでもない。興奮していた。この小娘を泣かせることによって、エルは枯渇していった。小さい頃から浴場で体内に入り込んだエネルギーが枯渇していくのを感じた。精神が震えている。

その感覚は脱力感ではない。徒労感でもない。絶頂、という表現が正しいと思えた。

今まで味わったことがない感覚だった。

ソレが下腹部から骨髄を駆け上がって脳天を突く。

人の命を握っているからだろうか？ 生意気な彼女だからだろうか？

もちろん、エルは弥恵を本気で殺そうとしていたわけではなかった。腕の力を抜いて、弥恵を宙に浮かせたところまで、エルの神経は正常だった。少しの恐怖を植え付けてやろう、それだけだった。しかし、今は、絶頂を登り詰めるために、エルは弥恵を本気で殺そうとしている。

「さつき、お前は、自分を学園一、可愛いと言ったよな、でも、お前より可愛い子はピアンネに何百人もいる、私はエセハンガリー可愛いし、先輩はパックス・ミックニカ（三国的平和）可愛い、ソレと比較して、貴様の可愛さはなんだ？ フロリダの田舎娘ももっと突き抜けた個性を持っているっていうのに、貴様の可愛さはなんだ

？ 中流だ、中流階級の可愛さだ、つまり、貴様は可愛くないんだよっ、ピアノで貴様は通用しないんだ」

エルは自分で何を言っているのか分からなかった。分からなかったが、終始、弥恵のブラックホールの中心のごとく、黒い墨がかかったようにくすんだ瞳をとつともなく愛おしく思ったことは確かだった。

「じゃあな」

エルが手の力を抜いた。弥恵はすでに気絶していた。

しかし、弥恵はそれ以下の高度に落下することはなかった。

屋上の二人に気付いた教師たちが慌ただしく駆けつけたのだ。エルが階段ですれ違った教師を筆頭に群れをなしていた。そこでエルは正気というか、精神の振るえを止めることが出来た。

危なかった。初めて教師たちにエルは感謝した。教師たちはエルが初等部の子を救ったと、賞賛するばかりだったが。

それから職員室で小一時間ほど事情を聞かれた。殺そうと思ったなどと話せるはずはなく、当たり障りなく、弥恵の盗撮の件も話さずに、エルは職員室を後にした。教師たちの賞賛はほとほと疲れた一人になって考えたかった。あの興奮はなんだったのだろうか？

冷静になって考えれば、彼女、エルは彼女の名前を聞いた、高野弥恵、弥恵は厄介だが、非常に面白い存在だった。

誰もいない廊下をゆっくり歩きながら、エルは思い出していた。

『エルは少し破滅的などころがあるよね、きつとエネルギーが充満して、いつも破裂寸前なんだ、バルチャーはそれにもってこいだけど、それでもエルのエネルギーは抜けきらないね、きつともっと強い敵が必要なんだと思うんだ、私？ 私は駄目だよ、闘争心がないからエルのエネルギーを吸い出しては上げられないよ、ライバルの存在が必要よね』

そのライバルは二カ月後の春にバルチャーの敵として現れた。それが志だった。

『もしくは、初等部の伸びしろのありそうな子を鍛え上げるとか、

源氏物語の若紫やね』

弥恵は屋上での出来事を教師たちに話してしまうかもしれない。殺されかけたのだと訴えるかもしれない。それはそれで面白いことになりそうだが、若紫がヒステリーを起こして噛み付いてくるのも面白い。虐げればいい。爪を立て、牙を剥き出しにしてきたら、そのときこそ、屋上から叩き落してやればいい。そう考えると、ゾクゾクする。このとき、エルは弥恵をバルチャーにすることを決めた。

【6】

月に一度の映像学部の新作の上映会、その催しは陵の起伏のない人生においての楽しみの一つだった。彼女たちが作る映画は矛盾が多くて、毒気も多くて、画像処理も大ざっぱで、目標のロンドンにはほど遠い。しかしロンドンも越えられないほどのみずみずしさと勢いと思ってもっていた。どんなクライマックスでも陵の瞳からは涙が伝い、無茶苦茶なハッピーエンディングに陵は堪えきれずに嘔吐することもある。

今日もポップコーンとメロンソーダを両手に持って、陵は上機嫌に映画が上映される講堂に赴いた。席は半分ほど埋まっていた。ぽっかりと空いた一番後ろのスペースに陵は席を決め、ゆったりと腰を下ろし、ポップコーンを口に放り込んで受付でもらったチラシを見やる。

《先天的後継者の祈り》。題名からは全くストーリーの想像がつかなかった。

やがて、幕が上がり映画が始まった。こったオープニングはいつものことで、サウンドはピアンネの吹奏楽部のオリジナルトラックである。今回はゆったりとしたジャズテイストで、雰囲気は甘酸っぱいラブロマンスだった。

陵はその映画に感情移入を始めていた。

と、そこへ誰かが陵の感情移入を邪魔するように隣の席へとどか

つと腰を下ろした。席は他にもあるのにと思ったが、咎めるのも狭量だと思い、陵は保健医だし、気にせず映画に没頭しようとした。が、そこで予想外の事態が起こった。その人物は、いきなり陵のポップコーンを頬張り始めたのだ。

わ、私のポップコーン！

なにやつ、とキツと睨むように見れば、ポップコーンを頬張っているのは志だった。映画なんて興味なさげに口をはむはむと動かししている。陵が啞然としてみると、志は喉が渴いたのか、メロンソーダにまで口をつけた。

あつ、……………間接キツス。

陵がちよっぴり照れちゃっていることなど知らず、志はズズズー、と勢いよくメロンソーダを吸い上げている。吸い上げながら、志は陵に目配せした。

今、ちよつといいですか？ とそんな感じの目配せだった。

上映中はもちろん会話なんて出来ないから陵は志に腕を引かれ、講堂から出た。

「どうしたの、急患？」志の背中に問う。

「そういうんじゃないんですけど」なんだか考えあぐねている、という感じに志は歩みの速度を落とさずにスタスタと生徒の通りが少ない講堂裏まで陵を誘った。

「私の至福の時間に干渉したのだから、それなりの用事でしょうね？」

「うん、私にとってはね。その、……………せんせーにみてもらいたいのがあつて、」志は瞳をうろろさせながら、「コレなんだけど」といって、豪華なデザインの手帳をもそもそと懐から取り出し渡した。まるで近世ヨーロッパの哲学書のような。「？」と陵は受け取った。そしてページをめくる。日記帳かなと思っただけで、そういうものでもないらしい。ずっと白紙が続いて、最後の二三ページになにやら書いてあった。

「媚薬の研究？」

「うん」志は周囲の気配を伺い誰もいないことを確認してから、「せんせー、ソレ作れる？」と弱々しい瞳で訊ねた。「保健医だったら、さ」

「……志ちゃん」思わず食べちゃいたくなるような表情の志の風貌を見ながら、陵は考えた。軽く熟考した。そして、コレは先生として忠告しておくべきだろう、という結論に至った。「いくら好きな男の子が出来たからって、媚薬に頼ってはいけないわよ」

一指し指を立てて、びしっと戒める。が、

「で、相手は誰なの？」と二十六歳になっても陵の心はホンワカ乙女。映像学部には悪いけれど、志ちゃんの色恋沙汰の方が、陵の興味を惹いた。「ドコの男なの!？」

「違いますって!」

志は色めき立っている陵に少々困り意味、食い入って見つめる瞳を面倒臭そうに振り払って、そして、言いづらそうに続けた。「男に使うんじゃないんです」

「え?」

「玉姉に、その、使おうと思って……」

志はもじもじと、恥ずかしそうに告げた。その仕草は友達に恋のキューピットを頼む少女の仕草だった。

……まさか、まさか、まさか、志ちゃん、そうだったの? 頬を必要以上に赤らめるもんだから、陵は勘違いをしてしまったらしい。

志ちゃんといえども、やっぱりお姉さまとあんな事やこんな事したいのねっ!

「むはー」レズな陵は一人悦に入っていた。志と玉の姉妹百合を妄想していたのである。コレが現実になるのなら、保健医として、保健室に住まう教職者と言えども、志の願いをかなえてあげないわけにはいかないだろう。

ムハる陵を横目に、「?」と志は慄くように不審がっている。陵の感情が全く読めなかった。詳細な説明が必要だろうと志は思った。

「あ、あのですね、実は、」

しかし陵は手の平で志の説明を遮りながら、どうしてか鼻を摘みながら、発情期のメスライオンのような血走った瞳で、「皆まで言わなくてもいいわよ、志ちゃん、そういうことだったのね、そうよね、考えてみれば、こんなに分かりやすい姉妹百合もないわよね」と捲くし立てた。

「シマイユリ？」と志は思わず可愛子ぶるように小首を傾げてしまった。その辺の知識には乏しかったためである。「何ですか、シマイユリって？」

「お花のことよ、」中学生は百合なんて言葉知らなくていいのよ、お姉さまを愛する心があればいいの。「ともかく！　そういうことなら任せて志ちゃん、協力してあげる」

そういうことの説明をあまりしていないように思ったが、

「やっぱり、せんせー、頼りになるう」と志は素直に嬉しがった。

思わず陵に抱きついてしまうほどに。コレで、コレで、上手くいけば、テルミンから逃れられるかもしれない。志が媚薬の作成を持ちかけたのは、そういうわけだった。玉をかどわかつて、プロのテルミン奏者の道に進まないための予防線を張ったのだ。

「そういえば、このこんなもの、一体全体、どこで手に入れたの？」

「図書館にあつたんです」

「へえ、こんなものが図書館にねえ」

【7】

出張帰りの早朝、他の先生方よりも早めに職員室にやってきた藤原は愕然とした。

油性のサインペンで《一ヶ月間、図書館への入室を禁ずる B Y

図書委員長》なんて書かれていれば、愕然とするしかなかった。

「いやはや」

藤原は剛毛の髪を掻き揚げ、「まいったなあ」と呟いた。その呟

きはどことなく参っていないなさそうだ。まだ余裕がある。とりあえず、机を磨こうと思い、雑巾を取りに流しに向かった。雑巾を絞りながら、ふと、脳裏をよぎったのは、比呂巳から受け取った手帳のことだった。

あの手帳は、机の上に……………。

はっとなつて、藤原はすぐに自分の机に舞い戻り、比呂巳の手帳を探した。机の上にはない。棚を探る。引き出しを開ける。職員室内をほふく前進して回った。が、

「ない」

案の定、なくなっていた。余裕は綺麗さっぱり消え去った。

「まいったなあ」と藤原は呟いた。

第三幕

【8】

結局、比呂巳から預かった起死回生の手帳は見つからないまま放課後になってしまった。きつと図書館に持っていかれたのだと思うのだが、藤原は捜索に向おうにも入室禁止を食らって入ることが出来ないでいた。

「せんせー、どうだった？」

ホームルーム後、黒板の前で比呂巳は実験結果を確かめるように聞いてきた。

「昨日は出張でな、もう少し、手帳を借りていてもいいか？」

教師、という威厳とプライドが少なからず働いて、なくしたとは言えなかった。冷や汗が額に浮かんではいないだろうか、この態度に怪しさが浮かんでないかと藤原は心配だった。最強の比呂巳には、全てが見透かされてしまうのではないかと不安にならざるを得ない。しかし、屈託のない笑みに救われる。

「いつでもいいよ、気が向いたときでもいいから、急ぐ必要もないだろうし」

最強の笑顔だ。慈愛に満ちている。彼女があと十年早く生まれていれば、と悔やまれるほどの笑みだ。藤原は子供好きだが、決してロリコンではない。教師の立場からも、一人の成人男性としてロリコンは滅却されるべきだと思っている。

「でも、とつても大切な手帳だから、なくしたりしないよね」

ギクリとした。必死にクールを装う。「なくしたりはしないよ」

と、そこまで言っただけで藤原は不思議に思った。比呂巳は大切な手帳といったが、起死回生の術の他に何も書かれていなかったような気がしたから。

「好きな子から貰ったものだから、真っ白でも大切なんだ」

藤原は、比呂巳がホレる男はどんなやつだろうとしばし考え、コシは必ず回収して、起死回生の術で比呂巳に朗報を伝えねばいけな
いと思った。

比呂巳のケータイがブルブルとなったから、藤原は教室を後にし
て駄目もとで図書館へと向った。

【9】

「志様！ どこに行く気ですかっ!？」

ホームルームが終わり、志が教室を脱兎のごとく飛び出して行こ
うとするのをクラスメイトの一人が呼び止めた。脳味噌がとろけて
しまいそうな苺のような声質である。彼女の名前は片吟綾^{へんぎんあや}、という
奇特な名前の持ち主で、その双眸は生まれただばかりのペンギンとい
う感じで、つやつやとした潤った黒髪が制服に張り付くように伸び
ている。志と同じようにロングスカートを纏い、志と同じブレスレ
ットを装着していた。

志のロングスカートの裾を引っ張って静止を呼びかけたため、後
足で立ち上がったレッサーパンダのお子さまパンツが綾の目にする
りと飛び込んできた。志はコホンと一つ咳払いしてから、スカート
をつかんだ綾の手をスパンと払う。

「はづう……」

「ジロジロ見るんじゃないの、今日はレッサーパンダのパンツなん
だから」

「いいじゃないですか、かわいいおパンツくらいジロジロ見せてく
れても！ 生尻を見る訳じゃあるまいし、あいたっ」

志のデコピンが飛んだのだ。「生尻とか言わない」

周囲では「またやってるよ」とクスクス笑い声が漏れている。

「はづう……」

「で、志様はドコに行こうとしていたんです？」と、そこへ風船ガ
ムを膨らませながらうにゅうと割って入ってきたのは、おっぱいが

はちきれんばかりに膨らんでいる豹然京子ヒョウゼンキョウコだった。長い茶色髪をなでつけながら、「今日はゲームの日です、サボる気ですか？」と鞆で志の後頭部をコツンと小突いた。

「ごめん、京子、今日は遊んでる暇ないんだって」

「そんなあ」

「志様がいないのでは、ゲームが成り立ちませんよ」

「そうですね、志様がいないんじゃないや、どさくさに紛れてあんなことやこんなことができな、あいたっ」

志のデコピンがまた飛んだのだ。「あーやってば、やっぱり確信犯だったのね。私を困らせることがそんなに楽しい？」

「はうう……。決して、そういうことじゃないんですけど、」綾はペンギンみたいなる目を作り、口をすぼめながら、「まだ志様は気付いて下さらないんですかあ？」と上目遣い。

「？」志は何のことやら分からない。綾の意図を分かっているのは、志以外のこの教室に残っているクラスメイト全員である。

「綾ちゃん、志様に秘め事を汲んでもらおうなんて思わないことよ」

京子の物言いに、周囲のギャラリーが少なからず頷いていた。

「でも、いくら志様でも、」と綾はじつと志のカラーコンタクトを見つめに掛かる。秘めた気持ちをテレパシーのように送ろうとしているのだ。「何々？」と後ずさる志。「私の想い、届いてますか？ 私志様をどう思っているのかお分かりですか？」

「あーやが、私のことをどう思ってるかって？」

綾はペンギンのように小刻みに頷く。

「そうねえ、」志は「うーん」と長考してから、結局適当に告げた。「仲のいいクラスメイト？」

「ただ単に仲のいいクラスメイトなんて思ってます」

「えっ、仲いいじゃん、私たち」

「そういうことじゃなくて、」綾は気持ちが伝わらなくて、噛み合わなくて、段々ラムラムとしてきた。「ただ単に仲のいいクラスメイトに《様》なんてつけて呼んだりしませんってことです」

「ソレって京子が遊びで呼んでたのが、あーやに伝染しただけですよ」

「私がそうお呼びしたいから、そう呼んでいるんです」

「遊びじゃん」

「遊びじゃないんです、私が志様にご奉仕しているのは遊びじゃないんです！」

「確かにご奉仕は遊びじゃないかもしれないけれど、でも、あーやが私にご奉仕してくれるのは、私が治療の余地のない片付けられない女だからでしょ。ソコへ今年の春にひょんと現れた世話好きのあーやが見かねてやって来てくれるようになったわけで、とどのつまり、あーやは私のことをだらしのない女だと、」

「ち、ち、ち、」

「血？」

「ちつがーうー！」綾はペンギンが海底が流水に躍り出る勢いで激昂した。「志様はだらしのない女でも、志様じゃなきや、毎朝モーニングコールしたり、お部屋の掃除に出向いたり、髪の毛を洗いに出向いたり、耳掃除に出向いたりしません！！ するはずがありませんんー！！」

「う、うん」

「つまり、どういふことだと思いませんか？」

「あ、ありがとう、感謝してる、あーやはきつといいメイドさんか、いいお嫁さんになれるわ。奉仕されてきた、私が保証するわ」

「えへへ、ありがとうございます」志様にほめられちゃった。…

…つて、ちつがーうー！！」

「何々？ 今日のあーやはちょっと変だよ」

「も、もう言っちゃう、京ちゃん、止めないでね」

「どーぞ」

「志様、私、実は、志様のことが幼稚舎の頃からずっと、」
「ピ、トお。」

「？」

志の天使のように綺麗な顔がそこにあつた。おでこはピタリとくっついている。

「熱はないかあ。……いや、あつっ、熱いって、あーや大丈夫？」

ヘナヘナと綾はその場にへたり込んでしまった。サウナに放り込まれたペンギンみたいにしゅわしゅわと湯気を上げている。

「ご愁傷様、」京子は綾の肩に手を置き、労を労う。その言葉には、同じ目標を共有しているもの同士に通じ合う優しさが伴っていた。

京子も、今の綾と同じ経験と挫折を経験しているのだった。「どう、綾ちゃん、志様の鈍さといったらないでしょ？」

「ちよつと京子、私が鈍いってどういうことよ？」

「はあー、」京子は首を振って嘆息する。「コレは一生直らねえな」
「だから、鈍くないって」

「とりあえず、」京子は噛んでいたガムを吐き出さんばかりに言った。「志様の鈍さに振り回されている人間が少なくとも二人いることを知っていて下さい！！」

京子の剣幕に志は思わず「は、はい」と頷いた。当然、目の前の二人が被害者であるなんて思うこともなく。

「ま、ともかくにも、今日のゲームは中止ですね、では、敵のチームに中止の旨を、」

「そういえば、今日の相手は誰？」

「少々お待ちを、」京子は鞆の中からケータイを取り出し、ポチポチと画面を確認する。「バルチャーズです」

「……あー、今日だったか、」

バルチャーズには、志の天敵のエルがいるのだ。このままでは戦いもせず、かけがえのない一勝をエルに無条件で与えることになる。「どうします？」

「うーん」と唸っていると妙な案が閃いた。あの子を呼ぼう。志が完敗を認めた最強のあの娘を。

「ちよつと待つてて、」志はケータイを取り出し、ダイヤルする。相手はすぐに出た。「あ、比呂巳、お願いがあるんだけど、」

京子と綾は顔を見合わせた。終始、猫撫で声ではなしていたからだ。

「それじゃ、よろしくね」志は電話を切った。そしてジロジロと視線を浴びせる京子と綾を一瞥して、「何？」と不振がる。

『別にい』声を併せて、首を振った。

「そう、ま、いいけど、とにかく、助っ人をココに呼んだから」

「助っ人？」

「安心して、最強の女の子だから」それだけ言って、二カツと笑い、志は鞆を肩に掛け、二人を置いて教室を出て行ってしまった。

【10】

藤原は図書館に向かって歩いていった。立ち入り禁止を食らっても、比呂巳の大事な手帳をそのままにしておけない。図書館へ行くためには、初等部の校舎から中等部の校舎を通って行かなければならない。三階の渡り廊下を通って、中等部の校舎に赴いた。と、そこに階段をいきおいよく駆け降りてきた生徒を衝突した。

「ぶぎゃー」という悲鳴を上げて、藤原のがつちりとした体躯にぶつかった生徒は軽自動車にはじかれたように飛んだ。盛大に鞆の中心身をぶちまけた。

「すまん、大丈夫か!？」

藤原は駆け寄り、顔をのぞき込んだ。すかさず、拳が飛んできた。拳は藤原の頬を抉った。この拳に、藤原は覚えがあった。

「前向いて歩きなさいよ! バカッ!」

そんな汚い言葉使いを使うのは、三年前の初等部六年G組のクラスでただ一人しかいなかった。

「アメじゃないか、久しぶりだな、元気でやってるか？」

「うっげー、藤原かよ」

「うっげーとはなんだ、うっげーとは」

「言葉の通りですよ、血反吐を吐きなくなるほど、私は藤原せんせ

「ーのことが嫌いだったってことですよ」

言葉とは裏腹に志の瞳は笑っていた。

「相変わらずで、何よりだ。でも、その金髪と細い眉とカラーコンタクトとピアスとロングスカートとミリタリーブーツは感心せんよ」

「中二だからいいんですよ」

「クラスの担任は何もいわないのか？」

「……あいつも仕方ないな」

「って、せんせーとはなしてる場合じゃなくて」

せかせかと鞆の中身を広い始めた。藤原も手伝う。と、手を伸ばした先にあつたのは件の『媚薬の研究』だった。

なんで、コイツが、コレを？

藤原は固まり、しばし黙考する。ココはアメに尋ねてみるべきだろうか？

「なあ、」

「なっ、」

志は藤原の手から手帳を引っ手繰った。その慌てぶりに藤原は、コノ手帳はアノ手帳で間違いないと踏んだ。「ソノ本はなんだ？」藤原が、本、と言ったのは、背表紙に図書館の本のすべてについている管理用のシールが付着していたからだ。図書委員が勝手に図書館の本に仕立てあげたに違いない。この調子だと、藤原が購入して机の上に一緒に置いていた他の本も勝手に拝借されているのだろう、今はそんなことよりも比呂巳の手帳が、どうということだか志に渡っていることが問題である。

アメはこの本の中身を知っている。

だから、実はこうこうでこうなんだよ、なんて気軽に返してもらえよう頼むことはできない。

手帳の中身は起死回生の術。

その術を使おうとしていたことがバレてみる、教職者の威厳、プライドその他諸々はもちろんのこと、教職免許まで剥奪されるに決ま

っている。

例えばそれが、嫁相手だとしても、だ。薬で人の心を操るなどというお手軽な手段をとろうとした人格は、子供を健全な大人に導く人格ではないのだ。

世間はそう断罪するに違いない。

俺は大バカだ、大バカ者だ。

最初から、遠回りをしてでも、その道をゆっくり歩み始めればよかったのだ。

ああ、神よ。これは心を入れ替え、女性と向き合えとのお示しなのでしょうか？

藤原が、そんな風に怖い顔を歪めて考えている間に、

「じゃ、じゃあ、さよなら、せんせー」と志はそっーと、背を向け走って行ってしまった。

「あつ、アメつ」静止を呼び掛けても、志は振り返らなかった。

どうすればいい、どうすれば………………。」「むう…………」

藤原の切羽詰った脳みそが考え出したのは、あまりにも大人気ない愚行だった。

【11】

京子と綾、机に座って、教室でしばし待っていると、志が《最強》と讚え、猫なで声で接していた助っ人ちゃんが、急いでやってきたのだらうか、少し息を上げて現れた。綾はその娘を見るやいなや、ぺんぺんと京子のふくよかな胸を触りながら歓声を上げた。

「京ちゃん、京ちゃん、最強に可愛いじゃない!」

「ホントに、」京子も胸を鷲掴みにされていることも忘れ、目を見開き、ぷわつと女の子の子に見入っている。

「広瀬比呂巳、十歳です」

比呂巳は礼儀正しく頭を下げた。青いキラキラとしたリボンで括られた、左にすらりと伸びたポニーテールがキュート過ぎる。綾は

自己紹介も忘れて、

「白いスクール水着が似合いそう、将来は水泳部に入るといいわ」
なんて目を血走らせて突拍子もないことを言う。

「……バーカ」

京子が思わず小声で、その半狂乱振りを罵った。比呂巳は上級生の斜め上発言に困った素振りを見せずに「選択肢の一つに加えておきますね」と最上級の笑みを見せている。その笑みにとろとろしている綾の耳を摘みながら、気を取り直すように京子は咳払いをした。

「私は京子、このペンギンみたいなのが綾」

「あーや先輩って呼んでね」

「はい。京子先輩、あーや先輩」

「きゃー、あーや先輩だって、あーや先輩だって」

「はいはい、」京子は綾を鷹揚に落ち着かせながら、比呂巳に向き直る。「で、志から話はいっていると思うんだけど、ご経験は？」

志の口ぶりから察するに、比呂巳は相当な手だれだと思われたが。
「ええつと、」

比呂巳は口元に小指を当ててしばし考えていた。何気ない素振りが可愛くて、綾は常に悶絶しそうである。その両手は常に罪のない十歳を歯牙にかけようとしていて、京子は常に綾を背中で押し留めていた。そんなつばぜり合いを無言で行っている二人は、比呂巳の答えに率直に驚いた。

「経験というんですかね、志姉ちゃんと一度しだけしか」

「えっ！ たった一度つきり？」と、そんなの助っ人にならないじやん、と京子。

「えっ！ 志姉ちゃん？」と、そんなに志様と親しいご関係なの？
と綾。

比呂巳は「えつと」とどちらに頷いたらいいのか迷っている様子を見せてから、とりあえず二度頷いた。

「もっつ！」と京子は綾に一喝。「話が進まないから、綾ちゃんは少し黙っててくれない!？」

「でもでも、」綾は怒鳴られながらも、おずおずと主張する。「志様とヒロミンの関係性に一抹どころか、小惑星ほどの興味関心がありまして、」

確かに、まあ、気にならないこともないけど……、「って、ヒロミンって何よっ？ 勝手に変なあだ名をつけるでないのっ！」

「クラスでは、『ピロ2』と呼ばれてます」

比呂巳が随分と奇抜なあだ名呼ばれているので二人はしばし固まった。顔を合わせ、そして聞いた。『……どうして、そのあだ名？』

「広瀬比呂巳の二つのひろをとってひろひろ、でひろ2、それがなまっていつの間にやらピロ2に」

『へえ』二人は初等部の斜め上空の発想力に『若いわね』と思った。「じゃあ、コードネームは『ピロ2』で決定として、」

京子は綾の手前、すまし顔で聞いてみる。「志様とはどういったご関係で？」

「ゆきさま？」

「あっ、いや、志とはどういう関係なの？」

「志姉ちゃんは、私の父ちゃんがやっている空手道場に昔から通っていたんです」

『空手？』いろんなものに出していたのは知っていたけれど、空手道場に通っていたとは知らなかった。志様は一体何者になりたんだ、と二人は思わざるを得なかった。

「はい、確か五年前くらいからうちに来始めて」

「で、で、で、」綾は興奮し始めていた。志と比呂巳のカップリングが溜まらんといい具合に。「姉妹の契りは交わしたの？」

「バカっ！」

京子は溜まらず声を上げ、叱咤した。

それは十歳に聞く質問じゃないでしょ？

レズなら学園に私たちだけで充分でしょ？ 確かに綾ちゃんの気持ちも痛いほど分かるけど、私も比呂巳ちゃんを巻き込んでしまいたいと思うわ、でもソレだけは駄目よ、本能は駄目と言っているわ、

この子は将来、健かに育つべきなのよ。

しかし、比呂巳は上級生の斜め上発言に困った素振りを見せずに「いやいや、私と志姉ちゃんのカップリングなんて、絶対ありえませんよ」と最上級の笑みを見せている……って、「えっ!？」

質問した綾も、まさか比呂巳がその百合的でレズ的なかしましをを分かっているとは思わなかったので驚いてしまった。だって、十歳よ、私が目覚めたのだって志様と出会った十三歳の春だったのに。比呂巳はそんな風な二人の気も知らずに、ポニーテールを揺らしながら語り始めた。

「志姉ちゃんは、私を妹っていうよりは、師匠って感じにちよつぴりと離れた距離から崇めていますから、私、空手では一度も志姉ちゃんに負けたことなく、だから牙も立てられることなく、受けとか攻めとかの土俵に乗ってくれないんです、それに、私、人よりもちよつぴり器用なんで、志姉ちゃんに誘われたゲームでも勝つちよつて、それからもう関係は出来上がっちゃった、と言いますか、よく言えば何のフラグも立ち上がらない健全な友情関係に、悪く言えば、過ちの起こりようのないつまらない関係になってしまったんです、志姉ちゃんは私にだけはもろ手を上げてしまっているんです、だから、私がDSに目覚めて虐げようが、DMを装って取り入ろうが、きつと無理なんです」

そんなことを至極淡々と話す比呂巳に、なんだか二人は全てを持っていかれた気がした。二人は元来の服従心がざわつくのを抑えようがなかった。比呂巳には天下を統一した王者だけが持ちえる、王者ゆえの寂しさを感じたのだ。その寂しさを紛らわせる左右の家臣になるのに、二人はやぶさかではなかった。

ソレに比呂巳は将来有望な、というかもう染まりきった百合娘であることは先の話から間違いと判断された。

何の迷いが必要だろうか、京子と綾は神妙な面持ちで『ピロ2』
と言いながら跪いて、ちよつちよつ手を取り、そこに軽くキスした。
いきなりのことに比呂巳は「え? え?」と顔をピンク色に染め

て、ポニーテールをフルフルと揺らしていた。自分が発した言葉の憂いが、二人の心を射てしまったとはまるで気付いていない。

「あ、あのっ、京子先輩に、あーや先輩、いきなりどうしちゃったんですか？」

「私たちのことは呼び捨てで結構でございます」京子は服従する快感を得ていた。

「はい、あーやとぞんざいにお呼びください」綾はちよっぴり虐げられたい気分である。

「だめ、それはいろんな意味でダメですって」

はわはわと比呂巳は首と手の平を使つて拒絶した。広瀬道場の師範代は礼儀を生まれたときから叩きこまれていて、先輩を呼び捨てになんて出来ない。その理由も、かしくかれる理由も今のところ、全く分からないのだから。

「理由などいりません」

「そうです。私たちがピロ2に従いたい、それだけはいけませんか？」

「従うなんて、そんな、」比呂巳は困りきつた表情で二人を見た。

ふざけているようには見えなかった。頑なな二人の意志を感じ、それを無下にするのは酷いことだと思われた。二人に応えよう、比呂巳はぐつと決心した。「じゃ、じゃあ、」

今までの慣習を破るのは容易ではない。「きよ、京子」

「はい、ピロ2」

「あ、あーや」

「はい、ピロ2がなすがままに」

しかし、言ってしまうばどうということとはなかった。上級生のちよつと変つたお姉さんたちを喜ばせることと思えば、それは逆に幸福なことだと思えたからだ。

比呂巳は「あはは」と当惑気味に笑いながらも、微笑みを返してくれる京子と綾を見て、まるでお姫様になった気分だった。

保健室は暗幕で仕切られ、異例の《重患者以外立ち入り禁止》の札が掛けられていた。中央の円卓にはガスコンロと薄手の鍋と媚薬の材料が並べられていた。陵は材料を一つ一つ確認していく。が、どうしても入手できないものがあつた。

ガラスと扉が開いて、志がやってきた。なにやら、ココまでくる間にひと悶着あつたように「ふうっ」と息をついた。

「何かあつたの？」

「せんせー、の旦那と接触事故して、危うく、コレの中身を見られるところだつたんですよ」と言つて『媚薬の研究』を円卓に差し出した。「ともかく、さっそく始めようよ」

「そうしたいところなんだけれど、」

陵は『媚薬の研究』をコピーしたA4の紙の《材料》という項目を指さしながら「どうしても手に入らなかつたものがあるのよ」と申し訳なさそうに言った。姉妹百合への謝罪である。

「志ちゃん、《神代峠》って知ってる？ 今日、保健医という職業柄、暇にあかして一日中調べてみたんだけど、一向に分からなくて」

もしかして、この国ではなくて、日本なのかしら、と言いかけたところで、

「知ってますけど、」

と、志はあっさりと言つた。ソレもそのはず、《神代峠》はゲームのフィールドの一つである。志が知らないはずはなかつた。しかし、と志は不思議に思った。その場所の《名前》はゲームに参加している生徒しか知らないはずだし、その場所でゲームが催されることを知られては何かとまずいので、他の何者かに《神代峠》という名称と場所が伝わる可能性というのはまずないだろう。しかし、確かに書いてあつた。

媚薬の調合を何もかも陵に任せていたから、今の今まで気が付か

なかったけれど、確かに《神代峠》と書いてある。志の中で、一つの疑問が浮かんできた。この本の作者、もしくはこの白紙ばかりの本に『媚薬の研究』を記した人物は一体何者なのか？ ゲームの参加者なのか？ というか、そもそもなんでこんな本が図書館においてあったのか？

志はダメもとで図書館を訪れ、この不思議な本を見つけたのである。見つけたときはコレだ！ と思ったが、考えれば考えるほど謎である。

そんな風に珍しく小難しい顔をしている志に向って、陵は言った。

「そこで採れるトリユフがいるのよね」

《材料》の項目の最も下段にはこうある。「《神代峠で取れるトリユフ たくさん》」

「それに、トリユフを取るんだったらブタが必要よね。この前インデバーチャンネルでやってるのを見たの」

陵の助言を受けて、しばし考え、志はいった。「私が神代峠でトリユフを取ってきますよ」

神代峠の場所を、いくら陵とは知られるわけにはいかない。志は意外と義理堅いところがある。

「私もいくよ。志ちゃん、一人だと心配だし」

心配というより、安心できない、という風な陵の視線である。

「トリユフくらい、一人で採ってくれますって」

「そう、……でも、ブタは？ トリユフ探しにブタが随行しないんじゃない、ヒントなしのクロスワードパズルをするようなものよ」

「大丈夫です、当てはありますんで」

【13】

エルは待っていた。ジャグジー風呂に「あうっうっう」と両目をマイナス記号にしながら待っていた。タオルをターバンみたいに巻いたエルの対面には、同じく「あうっうっう」と両目をマイナス記

号にしている三国がいた。

ここはエルの両親が経営する、温泉宿の浴場である。秋の平日、四時を少し回ったばかりの時間帯なので、浴場にはエルと三国しかない。

八角形の浴槽を中心に、教室四つ分のスペースには様々な種類のお風呂が設置されていた。ライオンの口も、サウナも、純和風の露天風呂もある。

ゲームの前は安全祈願のためにココで身を清めるのが日課になっていた。というか、慣例を怠った二週間前のゲームでは、そのためか分からないけれど、ケガ人を出してしまったのだ。そのケガ人はココにはいない。未だエルと三国の元には帰ってきていなかった。ゲームに参加するためには、三人じゃなきゃいけない。本来であれば、今日も不戦勝を相手クラン（このゲームにおいてチームを《クラン》と呼ぶ）に予定であったが、エルは昨日、出会ってしまったのだ。

三国は気持ちよさそうな声を震わせ、エルに問う。

「本当に、エルの想い人は来てくれるの？」

「分からない」

エルは素直に首を横に振った。高野弥恵、思い上がりも甚だしい自尊心の塊のような十歳に、エルは手紙を出して、ココに呼び出していた。一見、ラブレターのような便箋の中に、この場所と《お前に会いたい》という短い文を書き付けて下駄箱に放り込んでおいた。この国の人間でこの宿のことを知らないふとどき者はいないはずだし、弥恵はエルが温泉宿の娘だと言うことを知らないことはないと思うから、場所が分からない、かつ、何この手紙と訳が分からなくなるということはないだろう。問題は、彼女がエルに会いたいかどうかだ。

エルは今のところ、弥恵を殺しかけた罪状で教師や生徒会や風紀委員会からお呼ばれされていない。今日のホームルームで来月の全校集会で表彰もされると担任から聞いていた。つまり、弥恵も屋上

での出来事を周囲の人たちに秘匿している、ということだ。

なぜだろうか？

エルは弥恵のことをいろいろ考える。

浮かぶのは、弥恵はきつと私に復讐しにくるに違いない、ということ。大人の力を借りず気はない、落とし前は当事者間できっちり付けたる、そんな復讐心をエルは想像する。

弥恵に感じたえもいれない絶頂はもう過ぎて遠くに行ってしまったている。でも、確かに経験したということは覚えている。その記憶がエルの記憶の弥恵を美化していたのだった。

その想像から、弥恵は必ず復讐染みた行いを企てに来るのではないか、そうでなくても何らかのアクションを取ってくるのではないか、だったらこちらに居場所を伝えてやれば面倒な手続きが互いに必要なくなる、とエルには思われた。

ソレを思うだけでもエルはゾクゾクとした。尿意がこみ上げてくるのを感じた。「……やばっ」。エルは必死に我慢する。その顔付きを見て、三国はまさか？ という顔つきになる。

「まさか、漏らした？」

「……ちよつと、「風呂のせいではなくて、頬が染まりエルは静かに謝る。「ごめん」

「うづん、いいよ、全然気にしないでね」

三国は優しく言ってくれた。やっぱり、先輩はいい人だな、と思って微笑もうとしたら、三国はそーっとジャグジーから出て行くこととしていた。行動に移されるのはショックだった。

「先輩、ホントに、ほんとーにちよつとなんだからな！ まるまるスッキリしてないんだからな！」

「べ、別にエルのおしっこが嫌なんてことは全然ツないよっ」

三国は冗談をよく言うけど、肝心なところで嘘がつけない可愛いい人だ。つまり、

「うづ……、やっぱり嫌なんじゃないか、「先輩は自分のことを何でも受け止めてくれると思っていたから、エルは漏らしたと素直に

言ったのだ。少量のおしっこくらい受け止めてくれるだろうと思っ
ていたから。「おしっこくらいいいじゃないか！ 私のおしっこだ
ぞ！ 私のおしっこは聖水並にきれいなんだからな！」

浴場にエルの叫び声が響いた。客がいなくてホントによかった。
「分かった、分かってば、」三国はエルを宥めるように肩まで湯に
浸かって、エルに向き合おうと、決心したように言うのだった。「じ
ゃ、じゃあ、さ。エルのおしっこが嫌じゃないってことを証明する
から、今から全部出して」

「全部？」なんでそうなるの？ 私はただ少量のおしっこでいいの
に。

「うん。でも、それだと不公平よね」
何が？

「だってエルがおしっこ漏らすのに、さっきからずっと我慢してい
る私が漏らさないっておかしくない？」

確かに……………って、だつての意味が良く分からないし、不公平
の意味が、そもそも全部出したいなら一度浴槽を出てから脱衣場の
脇のトイレに行けばいいじゃん。

「エル、行くよ」

「う、うん」

どことなく切羽詰っている様子で、今まで見てきた中で一番の真
面目な表情を見せるから、エルは思わず頷き、準備をしてしまった。
そして。

エルと三国は互いに見詰め合って、「……………」と、言葉にしがた
い十五秒間の沈黙を迎えたのだった。なんというか、えもいわれぬ
背徳感であった。

ブルブルツと二人は同時に済ませるものを済ませ、絆を堅固なもの
にした。

「その、めっちゃくちや気持ちよかったよ、」エルは恥ずかしそうに
口にする。「ありがとな、先輩」

「えへへ、私も気持ちよかったよ」

「あはは」

「えへへ」

「あはは」と、エルは三国の手首をがっしりとホールドした。エルに気付かれないように、浴槽から退こうとしていたからだ。三国はやっぱりおしっこが嫌だったのだ、ていうか、丸々出してしまったんだかエルも浴槽から出たくなっていたけれど、最初に少量漏らしてしまった手前、出辛くて、そして三国が体よく逃げようとしているのに、つまり、その、なんか卑怯だ！

「やっぱり嫌だったんじゃないか！」

「嫌よ！」三国はどうやら開き直ってしまった。「いくらエルのおしっこでも嫌、私のおしっこも混じってる、そんなお風呂にコレ以上浸かっていたくないものお！」

「だったら、全部出そうとか提案するな！」

「だ、だって、我慢できなかつたんだもの！」

と、そんな感じにやんややんやエルと三国がおしっこの成分について議論を始めた場合に、からからと一人の少女が浴場に姿を見せた。

エルと三国は議論を止めて少女を見やる。

少女は胸元にタオルを当てて、脇目も振らず、エルと三国のおしっこのまざったジャグジー風呂に飛び込んだ。

『あっ』エルと三国は少女が来てくれたことよりも、おしっこ風呂に入れちゃったと申し訳ない気持ちになっていた。

そんなことを知る由もない弥恵は、伏せ目がちにエルと三国を交互に見た。レズな彼女は上級生の裸体に緊張してしまっている。エルだけかと思ってきたら、三国というサービスマンのオプシオン付ではないか。優雅に登場して、エルさんにも申そうと考えていたのに、途端に真っ白である。

どういうことだか、エルさんもこの綺麗な方も私を見つめるばかりで何も言われないし……。

その視線はまだおしっこ関係のことを言うか言うまいかで悩んでい

る視線だった。

弥恵は緊張のピークに達していた。どうしよう？ 試されてるのかな？ でも、なんて言えば？ 勢いのままジャグジーに飛び込んだはいいけど分からない。綺麗なお姉さま二人に見つめられたら分からない。

クラスメイトの熱い視線とは違う。弥恵は元来の弁慶的な性格で出てきて、身動きが取れなくなった。下半身の筋肉が緩んで、おしっこが漏れた。なんだろう、めちゃくちゃ気持ちい。

「……………」

なんだか、ほっとした雰囲気湯気とともに弥恵の周囲から漂い始めた。

「…………お、お前も？」エルが恐る恐る聞いた。「まさか、お前も漏らしたのか？」

気付かれてしまったっ！？

どうして？ ココ、ジャグジーだから、攪拌されて綺麗さっぱり証拠隠滅のはずじゃ。

バレてしまったのは、当然といえば当然であった。

弥恵の表情は、先ほど二人が丸々スッキリしたときに見せた表情そのものだったから。

弥恵は自らの下腹部の緩さを叱咤した。

きつと、これからお姉さま方にお漏らし娘なんて罵られるんだわっ！しかし、今日の弥恵は自殺願望を抱いていた昨日とは違って、受け入れ態勢が出来ていた。だから素直に自分の否を認めた。私のものを攪拌させてしまって、

「……………しゅみましえん、」と謝った。怒られる、と思った。コはエルさんの温泉。ソコにおしっこを攪拌させてしまったのだから当然『私の聖水を汚したな！？』と罵倒されると思った。でも、エルと三国はいたたまれないとばかりに顔を合わせ、苦笑していた。その二人の引きつった表情に気付き、そしてさっきのエルがなんて言っただかを思い出した。「…………お前も、って、まさか……………」

弥恵はじーつと聖水が混ざった水面を見つめた。第三期バルチャーズは、ここに結成されたのである。

【14】

ピアンネの広大な敷地には農学校並みに設備の整った養豚場がある。校舎群の北側、貯水湖の向こう側、乗馬部が馬を走らせている芝の北西に、鶏、羊、アルパカ、乳牛、イベリコ豚など多数の動物が飼育されている施設群のなかの養豚場である。

上着を制服から迷彩服姿に着替えた志は荷物の運搬用に走っているトロツコに乗せてもらい、まるで戦場へ送られる兵士のように、養豚場を訪れた。トロツコから降りると、志の斬新な姿が露になった。迷彩服とミリタリーブーツで、紺色のロングスカートを挟んでいる、そのファッショナブルな出で立ちは兎にも角にも新しかった。「ありがとう」

トロツコを運転してくれたフロリダの田舎娘のようなピアンネ娘に天使のような笑顔を見せ、手を振った。

「さて、」志はココに来るのは初めてだが、お目当ての人物がココにいたことが分かっていった。誰かに取り次いでもらう必要もなく、彼女は小屋の前で藁を束ねていた。

近づいていくと、動物の濃い匂い鼻をついた。だからといって臭くはない。何かが生産されている優しい匂いだった。

一心不乱に仕事に励んでいる彼女の背に声を掛ける。

「ごきげんよう、アリーナ」

いきなりの志の声にも驚きもせず、アリーナはゆっくりと振り向き、視線をくれる。

「あら、ごきげんよう、志」

ごきげんよう、なんていう挨拶が似合い、自然と様になっているのは、この学園でアリーナくらいのもんだろう。アリーナ・レイアス、彼女はフランス生まれの留学生で、志が憧れてやまない透き通る金

色の髪の毛の持ち主だ。瞳は大きく、薄い紫色をしていて、いつだって眠たげだった。中等部二年で、志と同年でもあり、エルの親友でもある。

「なにか御用かしら、」抑揚のない声は拒絶していないように思えるような気がするから、志は一応、安堵した。「それとも、また謝りに来たの？ もうケガは治っているわ、気にしないで」

「うん、それは分かってる」

アリーナは元バルチャーズの一員で、二週間前まではゲームに参加していた。けれど、二週間前、志はアリーナにケガを負わせてしまった。ケガはそれほど大きなものではなかった。相手がエルならこんなには気にしなかったのだろうけれど、華奢で、背の小さく、妖精のような佇まいのアリーナにケガをさせてしまったことを、志はずっと気にかけていたのだった。彼女に負わせてしまった傷は、見た目以上に深いと思われた。養豚場に入り浸りになり、ゲームに参加しなくなったのは、やはり、志に責任があるだろう。

「ねえ、志、私、最近詩を書いているのよ」

志がなんと言って切り出そうか考えていると、アリーナはゴム手袋を水で洗いながら言った。

「詩？」

「ええ、詩よ」アリーナは儂げに微笑んだ。「読みたい？」

「いや、遠慮しとく」

「そう、」別段、残念そうでもない。「いい詩なんだけどな」と小さく呟いた。いや、やっぱり読ませたがっているようだ。

「じゃ、じゃあ、いつでもいいから読ませてよ」

言つとアリーナはぽつと頬を染め、ツンと「いいわよ。多分、志の価値観を根底からくつがえすと思うわ」と抑揚なく恐ろしいことを言った。きつと恥ずかしくて、そんな大げさなことを言っているのだと思われる。

「それよりさ、」志は小屋の方を覗きながら言った。「ブタを一頭貸してほしいんだけど」

「ブタを？ 食べるの？ 何頭？ 種類は？」アリーナが電卓と明細をつなぎのポケットから取り出そうとしたところで、志は首を振った。

「貸してくれるだけでいいから」

「別に構わないけれど、」アリーナは不思議そうな目をした。ブタを借りに来る生徒なんて、この二週間どころか一年のうちに現れたことはないのではないだろうか。「目的は？」

「散歩？」

「どうして疑問形？ 誰にも言わないから話して」

アリーナにそう言われると、本当のことを言わないといけないような気がして、志は全てを洗いざらい話してしまった。「エルには内緒にしておいてよ」

「言わないわよ、私が志にエルの秘密を話したことはないでしょ」

「……エルの秘密、教えてくれない？」

「嫌よ、」儂げな声できつぱり断られるとそれ以上の追求の気はなくなつた。「それにしても、お姉さんに媚薬を盛ろうなんて、さすが志ね」

「ソレ、誉めてるの？」

「志らしいって言ってるのよ、」アリーナは「ふふっ」と口元に手をやって笑つた。「いいわ、トリユフを探してくれるブタを紹介してあげる。ついてきて」

アリーナはブタ小屋の中に入っていった。志もミリタリーブーツを鳴らしながらついていく。中は非常に清潔に保たれていた。きつい匂いもしないし、泥が靴底につくということもない。ブタはぬいぐるみのように大人しく、ラジカセから流れてくるモーツァルトに耳をひくひくさせていた。

アリーナは柵を開け、子ブタの群れの中に入っていった。器用に隅に追い詰め、アリーナは件のブタを抱え上げた。「ピエールよ」

ピエールと呼ばれた子ブタは全身が真っ黒で、獰猛なイノシシのようだった。つぶらな瞳が可愛い。眠り足りないようで欠伸を

していた。

志は額を撫でようと手を伸ばした。そこで目があった。ピエールの目がハートマークに光った。志に照準が合う。その瞬間、ピエールはアリーナの懐から跳躍し、志目がけてダイブしてきた。「なっ！？」

志はとりあえずキャッチしようとした。が、咄嗟のことで受け止めたところでバランスを崩し、すってんと尻餅を付いてしまった。

「いたたたた」

「だ、大丈夫？」柵の中からアリーナが呼ぶ。うん、平気、と応えようとしたところで、「ん？」股間に何やら生暖かい感触が。志はバサツとロングスカートを捲り上げた。……パンツ越しに感じた生暖かいものの正体はピエールのもふもふとしたブタっばなだった。

「こ、こ、こ、この、エロブタア　　ッ！」

志は人生で初めて動物に対して切れてしまった。まるで貞操を奪われたような気分だったのだ。ブタ相手に、志ったら、純情なのね。じゃれ合う志とピエールを見て、アリーナは優しげに微笑んだ。「あらあら、もうすっかり仲良しね」

【15】

志と京子は寮で同室である。草笛寮の二〇一、そこが二人の寮部屋であり、イーグルスの弾薬庫でもあり、衣裳部屋である。京子はクローゼットとは名ばかりの収納能力ゼロのクローゼットを開け、自衛隊が標準装備の迷彩服を取り出した。今日は黒を基調にした迷彩服を着る順番だった。敵は緑を基調にした迷彩をいる、コレで敵と味方の区別をつける。

当然、比呂巳に合うサイズはないので、袖と裾を安全ピンで留めて、ぶかぶかであることに変わりないが、なんとか動けるような形になった。比呂巳は拳を握り、突きを何回か繰り出して、ぴよんぴよんと飛び跳ねて、「うん、大丈夫みたい、ありがと、あーや」と

すでに臨戦態勢である。

「ピロ2、武器はどれになさいますか？」

京子が二段ベッドの下段のマットレスをどかすと、そこには物々しい年季の入った銀色のアタッシュケースが敷き詰められていた。開けば、マシンガン、ライフル、リヴォルバー、ガトリングガン……、詳しくは知らないけれど、そういった物騒なものが出てきた。

「好きな武器をお使い下さい」

「うーん」比呂巳は見慣れない武器に少し戸惑っている様子だった。その横で、綾は迷うことなくスナイパーライフルのアタッシュケースを選んだ。京子も同様にガトリングガンを手を取った。さて、比呂巳はというと……。

「接近戦用の武器はないですか？」

京子と綾は顔を見合わせた。サバイバルゲームに接近戦用？

……しかし、あるのだった。京子は何年も開かれていないような、外装にあまり傷のないアタッシュケースを取り出し、開いた中にはアサルトライフルと黒光りするナイフがあった。

銃剣である。

「このナイフを銃身に取り付けます。刀身は過度の付加を与えると引っ込むようになっていて、ほら、こんな感じに、今は蛍光塗料を補充してないので出てきませんが、刀身が引っ込むのと同時に蛍光塗料を吐き出す仕組みになっています。もちろん、弾も発射できません」

京子は組み立て、比呂巳に渡した。「わぁ」とテディベアをプレゼントされたように瞳をキラキラと輝かせた。「京子、あーや、私、コレにするね」

比呂巳は二人に向かって、銃剣を構えた。十歳とは思えない、鷹の目をみた。

【16】

神代峠まではピアンネからバスを乗り継いで三十五分、エルの温泉宿からは車で二十分ほどの距離がある。

神代峠、正式名称拝氷峠、エルの父親のヴォクシーに揺られ、バルチャーズの三人はゲームのフィールド入り口となる通称メガネ橋、正式名称拝氷峠第六橋梁の下までやってきた。めがね橋は明治の頃に建設された、今はもう水量が溝川ほどの拝氷川に架かる、煉瓦造りの六連アーチ橋である。煉瓦が幾重にも積み上げられたその橋の姿は、自然ばかりの峠において異様で、それらは百年以上もの間、反撥しあっているように思えた。

白くて粒の大きい砂利道の上、三国とエルは手際よく銃を組み立て、試し打ち、鼓膜にガツンと迫る発砲音、紅く染まり始めた樹木の葉に蛍光塗料が付着する、手袋をはめ、イヤホンマイクをし、ゴーグルを装着した。

エルの父親はファンキーにタバコの煙を燻らし、窓から親指を立てた左手を出して去っていく。

その間、弥恵はオタオタと何をしていいやら分からない。ダボダボの迷彩服を着て、説明を求める顔をしている。とりあえず、おずおずと、

「あ、あの、私はどうすれば……？」と聞いた。

「まだ用意が出来てないじゃないかっ！」

「ひえっ！」思わず悲鳴を上げてしまうほどの叱責が飛んだ。その悲鳴を叩きつけるように、エルの黒い手袋をはめた右手が、弥恵の無駄口を黙らせるべく顎を襲った。息が出来ないほどの強さで握られてしまった。体が一つと宙に浮く。屋上での出来事を思い出し、パニックになる。けれど、嫌ではないのだった。しかし、苦しくなつて弥恵はまさにジタバタと足掻いた。「むー、むー、むー」

「まったく、」エルはリングを落とすように握力を解いた。ドシャリと弥恵は尻餅を付いた。エルは手も差し伸べない。それどころかブラックホールを突き刺すような眼光を浴びせる。「厳しくすると言っただじゃないか！」

エルは腰に手を当て自衛隊の鬼教官のように怒鳴りつける。三國はケータイをいじくって、見てみぬ振りである。

「は、はい」でも、確かに厳しくして欲しいとは言ったけれど、何も指示されていないのだから、おずおずと、教官の神経を逆なでするようなことしか出来ないのだ。

弥恵は数十分前のことを思い出す。

弥恵は三人分のおしっこが攪拌された浴槽で、頬を真っ赤に、首を傾け見上げれば一面に広がる紅葉色に染めて、エルへの思いを語ったのだった。

『エルさんに殺されかけたとき、エルさんが小指を外して、薬指を外したとき、私、滅茶苦茶怖くて、今みたいにおしっこを漏らしちゃったんですけど、不思議と怖くなくて、もちろん死んじゃうんだってという感覚も残っていたんですけど、怖くなくなって、不思議なんですけど、殺されかけているシチュエーションが物凄く気持ちよくて、空手でおっさんに勝ったときとか、コルネットが上手く吹けたときは気持ちよさの種類が違いますけど、体の心を貫かれたっていうか、ズドンと来たんです、来ちゃったんです、もうスカートを煽る強風もなにもかも全部気持ちよく感じて、エルさんが私を罵ってくれるのがたまらなくて、段々とエルさんになら殺されてもいって思うようになっていって、気付いたら保健室で寝ていたんですけど。私、昨日、家に帰って考えました。どうしてあんな気持ちになっただんだらうって。冷静になって考えると、私、他人に怒られたことってあんまりなかったんですよ。ママもパパも兄貴も、あつ、兄貴なんていませんけど、そのパパもママも私に甘くて。私も勉強でもスポーツでもなんでも人並み以上にこなせちゃうし、人よりも可愛い可愛い言われて育ってきたから、人に本気で怒られるって、初めてだったのかもしれない……、私、エルさんに『お前は可愛くない！』って言われたとき、ズキンって来ました。分かっただんです、私は人よりもズバ抜けて可愛くもなければ、スポーツも勉強も突き抜けているわけでもなくて。比呂巳っていう幼馴染が

いるんですけど、私、昔から彼女には絶対に敵わない、容姿も、勉強も、スポーツも、空手も絶対に適いつこない、なんて思ってたんですけど、最近比呂巳を倒してやるとか、向こうはそんな気ないのに気を張ってて、持ち前の自尊心が暴走しちゃってて、盗撮のことだって、今思えばどうしてそんなことやってたんだろうと思いません。私は、私より綺麗な人を写真の中に納めて、手に入れたと思いつ込んで優越感に浸っていたんです。死ぬ気もないのに、自殺なんて悲劇のヒロインじみた真似を起こしたわけです。本当にどうかしてました』

そして、弥恵は宣言したのだった。

『エルさん、コレも何かの縁、いえ、運命かもしれない！私を虐げてください、私を苦しめてください、私を踏み付けてください。』

とんだドM宣言だった。エルと三国はちよっぴり引いた。おしっこが浴槽で攪拌されていることも綺麗さっぱり忘れていた。若干十歳でコレほどのものをいう娘がいたのかと。だからといって、エルは手紙を送ったこと後悔はしなかった。弥恵は復讐心など微塵も抱いておらず、逆にもっともっととせがんできたが、全然、問題ナッシングだった。何故ならエルはメス犬のようにハアハア言ってくる弥恵にゾクゾクしていたからだ。体温は上がり、汗を掻きっぱなしだった。

『私を調教して、エルさん』

エルはニヤリと口角を吊り上げ、早くものぼせたように瞳を虚ろにしている弥恵を浴槽の隅に追い詰めて、言ったのだった。『厳しくいくからな』

『はい、エルさん』弥恵は伏せ目がちになって、またスッキリしたような顔を見せたのだった。

それが数十分前に交わされたブリーダーとメス犬の契約だった。そしてそのまま何も説明することなく、コノ場所まで連れてきた。

契約を交わしたのなら、厳しくいく。ツンデレのような甘々な日

々など送らせるものか。立派なバルチャーに育ててやる。そしていつか、私を空っぽにしてくれる、夢中にしてくれる女になればよ。お前には素質が充分にある。それは方向転換しようが何しようが、お前の言動のあり方にはある共通点が見える。極端で、危ない、ということだ。ハゲワシのように、狡賢そうで、しつこそうな、厭らしい瞳をしているじゃないか。

エルは眼光にそんな風な思いを込めていた。それは常に理不尽な要求に繋がる。

「お前は今日から、我がバルチャーズの一員だ、分かるな？」

「い、いえっさー」弥恵はなれない敬礼を返す。途端に回し蹴りが飛び、「くへっ」と倒れこんだ。それを見過ごすことは出来ず、三国が駆け寄る。

「大丈夫？ 弥恵ちゃん」

しかし、弥恵は三国の手を制止し、立ち上がった。「コレくらい、平気です」

回し蹴りを喰らったせいか、神経回路が書き換わってしまったのではないかと思えるほどに弥恵の黒目は鋭くなった。

いい瞳、三国は気が引き締まる思いがした。

「いくらお前が鈍感で、頭の回転が遅くとも、この状況を察することが出来るな。コレから私たちはいわゆるサバゲーをする」

「イエッサー！」

「ひよこのお前はコイツを使え」

エルはワルサーを投げた。弥恵は受け取り、その重量を確かめた。「ルールは至極簡単明瞭、これから、午後五時半を回ってからの三十分間、この神代峠がゲームのフィールドになる。範囲はメガネ橋の向こう側から、五百メートルほど先にあるもう一本のメガネ橋の間だ。今頃、そこに相手のイーグルスがいるはずだ。北西と南東は二本のメガネ橋によって区切られている。北東と南西のフィールドは国道十七号線に区切られているから、そこへ行けば分かるだろう」

弥恵はメガネ橋を見上げ、その奥の方を眺めた。紅葉の木々が邪

魔をして五百メートル先なんて見えなかった。

「銃にはペイント弾を装填するんだ。胸、腹、背中、腰、頭部に当てれば、相手は戦闘不能になる。腕、脚に銃弾が付着しても動くことが出来るからな。先にクラン、いわゆるチームの全員が戦闘不能になった方が負けだ。敵は私たちとは違う迷彩服を着ているから、見間違えることはないだろうとは思うが、敵と見方を誤認するかな」

弥恵は三国になされるがままに安全ピンで袖と裾を止め、手袋を嵌め、イヤホンマイクを付け、ゴーグルで瞳を覆った。どれも大きめだが、運動に支障が出るほどではない。

「連絡はコレで取る、」エルはイヤホンをつつく。「コレには常に回線が通っているからな、無駄な独り言はいうなよな。そして、やられたら、やられたと報告するんだぞ。やられたら、ゲーム終了までその場で死んだフリだ。その後ちゃんと迎えに行くからな、分かったか？」

「イエッサー！」

三人は円陣を組んだ。互いの肩を引き寄せせる。頬を近づける。弥恵はチュツチュしたくなったが、まだ百合であることはカミングアウトしていないのでうにゅっと唇は突き出さないでおく。しかし、間違いが起こる程度には近づけておく。

「作戦は？」三国がエルに振る。

「作戦も何もないだろ、コツチはお荷物を抱えているんだから」

エルがわしゃわしゃと弥恵の髪を掻き乱す。

「恐縮であります！」弥恵は異常に興奮しきった面持ちで、意味の通じない言葉を張り上げる。

「それ、使い方違うと思うな」三国がどうどうと背中を軽く叩く。

「あつ、いい案を思いついたぞ」

「何？」

「何でありんすかつ！？」

「お前、囃」

「オ、ト、リ？」 弥恵はしばし言われた言葉を反芻してから、そのぞんざいな扱われ方に恍惚の叫び声を上げた。「囿ってことは、私は阿呆のようにアヒル口をして、人差し指を甘噛んで、敵の前にもんべんたたりと現れると、つまりそういうことですね？」

玉砕の命は弥恵の望むところだった。私など、せいぜい犬死で結構で御座います。

「話が早いな、そういうことだ」

「いいの、弥恵ちゃん？」

「断る理由は銀河系にはありません」

「いい心がけだ」

「嫌、誉めないで、罵ってください！」

「……………」

「ああん、放置プレイも最高です！」 弥恵は斑模様の蛇のように悶えている。

「……………」じゃあ、ともかく、弥恵ちゃんを囿として先導させて、十メートル後ろをエルが、その五メートル斜めに私がつくってことで

「オツケー、三佐」

「三佐？」

「コードネームのこと、私は三国だから、《三佐》」

「私は面倒臭いから《エル》のままでもいいよ」

「弥恵ちゃんは どうする？ 何か、あだ名とかある？」

弥恵はしばし考えた。記憶を手繰る。最近はやえちん、やえっち、えっち、それはないわね、確か何か奇特なあだ名があったはずだった。なんだったか、こいこいこい、弥恵はこめかみに神経を集中させる。そしてはっと思ひ出し、咄嗟に呟いてしまった。「ニューフアング」

『はいっ？』エルと三国、同時に聞き返した、にゆうふあんぐ、確かそんな風に聞えたが、はてどういった意味だろう。『もう一度言っつて』

「い、いや、それは駄目です！」 弥恵は首をブンブンと横に振った。

だつて全然つ、可愛くないんだもん！」「ニューファンクは絶対ダメですからっ！」

「ニューファンク？」

「ニューファンクか」

「あつ、しまった」

「しまったとはなんだ、しまったとは、」エルは弥恵の首をきつく締め上げる。

「く、苦しい……」

「どうせお前のことだ、可愛くないとかいう陳腐な理由で、親友からからかい半分にもらった奇特なあだ名を滅却しようとしたんだろ」その通り過ぎて、弥恵はエルの首筋に頬ずりしていた。そして、今度は三国に頬ずりしたくなってしまうほどの的確な推測が彼女の口から出た。

「あつ、そうか、弥恵ちゃん、八重歯が出てるよね」その指摘にエルは弥恵の上唇を指で引つ張り上げて確認した。「ほら、やっぱり可愛い小悪魔八重歯が生えてる。これらのことから考えられることは、ニューファンク、新しい牙は、八重歯の永久歯が生えてきたときに付けられたあだ名ね。そして、そのあだ名をつけた人物は、弥恵ちゃんの近くにいた人。でも、親、兄妹はないわね。あだ名をつける必要がないものね。きっと幼馴染の子が名付けたんだわ。『うわー、弥恵の新しい歯、牙みたいだね』『き、牙じゃないもん！』『ねえねえ、おとーさん、新しい牙って英語でなんていうの？』『うーんと、ニューファンクかな』『弥恵は今日からニューファンクだあ』『うえ〜ん』』っていうやり取りが合ったはずね」

その通り過ぎて返す言葉もない。頬ずりして、肯定の意を示す。「なるほど、八重歯が出てるから、弥恵って名前なのか」エルは一人で納得していたが、そればかりはさすがに違うだろう。

「エルさん、その通りなんです、」えっ？「うちのパパとママ、揃いも揃って八重歯の子が欲しかったから、ママも八重歯なんで、八重歯になりますようにって、弥恵って名前にしたんです」

えもいわれぬ沈黙が、三秒生まれた。それをなかつたことにするべくカラツとしたエルの声が場を席卷する。「ニューファンクで決定え」

「エ、エルさん!？」

「そうね、ご両親の気持ちと幼馴染の想像力の詰まった画期的でピツタリのコードネームだね」

「み、三国さんまで……」と弥恵はうじうじとしおらしくなってしまうた。

まったく、変なところで落ち込むんだから、そんなにニューファンクが嫌なのか、ピツタリじゃないか、弥恵、お前はバルチャーズの新しい牙なんだから、剥き出しにしろ、相手を骨までしゃぶりつくすんだ。

と、そこでエルはなんの予告もせず、

「んむっ?」と弥恵の唇に自分の唇をくっつけた。力強いキスだった。吸うのではなくて、押し付ける感じ。盛り上がりも何もないから、弥恵は戸惑うばかり。ツンデレはないという話だったのに、楽しめない。それはエルのエセハンガリー流の闘魂の注入の仕方だったのかもしれない。しかし、アドレナリンは一気に放出した。そして何の余韻も表情に残さずに、

「ほら、気合を入れろっ」とエルは弥恵の背中を強く叩いた。出ないわけがないじゃないですか!

出来れば、今度は互いの舌を這わせましょう。私の八重歯を、ニューファンクを舐めてください。ニューファンク、いいコードネームじゃないですかっ!

ピピピピと三国の首に下がったストップウォッチが鳴った。ゲームの始まりの合図だ。三国はエルと弥恵をぐつと引き寄せ、「せーのっ!」と叫んだ。

『ウチラは超えるまだまだ超えたる、愛情、友情、絶頂、幸福、達成感に高揚感に自己陶醉にチョコレート、ミルフィーユにエンゼルシヨコラ、その他諸々まだまだ足りない、皆まとめて、大好きだあ

っ！」

エルと三国と弥恵の三人は拳を付き合わせ、ゴーグルを下げ、銃を構え、歩き始めた。

【17】

コードネーム、レオパルドこと豹然京子は舌を巻いた。比呂巳の自然にとけ込むスピードが尋常ではなかったのだ。

「じゃあ、各自好き勝手暴れるっていうことで」

比呂巳は邪気のない笑顔で二人にそう指示した。綾はどこでスナイパーを気取っているか知らないが、京子は比呂巳の後ろを付けていた。いくら比呂巳が最強と言っても、銃を持って二度目の初心者であり、相手は悪名高きバルチャーである。フォーメーションを組んで行動すべきだと考えたのである。

しかし、そんな心配いらなかった。比呂巳は速攻で相手に銃弾を浴びせかけ、仕留められはしなかったものの、相手のフォーメーションを崩し、また自然に潜り込んだのである。京子はそんな比呂巳の行動を追うばかりである。コレではまるで比呂巳を付け狙っているストーカーのようだった。

「こちらピロ2、レオパルド、近くにいますんでしょ？」

イヤホンから比呂巳の声。どうやら、京子が付いてきていることは気付かれていたようである。「はい、ピロ2」

見上げると、比呂巳は高い場所から、こちらを振り向き、視線を合わせてきた。「ここまで来て」

京子と比呂巳は岩場の影に肩を並べ隠れた。

「作戦を言っよ。とりあえず、あっちを見て、「京子は言われたとおり、岩から少しだけ顔を出し、比呂巳の視線の方向を見やる。「二人いる、分かる？」分からなかった。木の幹や葉が視線を遮っていた。「倍率を上げてみて」バイザーの倍率を上げる。微かだが、動きを捉えることが出来た。ピロ2は、あれを肉眼で捕らえていた

のか？

「眼じゃないんだよ。なんていうか、空気が教えてくれるって言うか」「いやいや、そっちの方が充分凄い。つまり第六感ってやつじゃないか。」「私の家が、この近くだから、小さい頃からこの森で遊んでたりしたから、分かるんだと思うよ。」「

「なるほど、ここはピロ2のホームグラウンドってわけですか。序盤の奇襲も納得できました」

「で、作戦なんだけど、」「比呂巳は堪えきれない、という風に笑みを零した。頼もしくもあり怖くもある。」「突撃してもいい、レオパルド？」

京子も釣られてクスツと笑った。「仰せのままに」

「決まりね。じゃあ、援護を頼むよ、レオパルド」

「はい、ピロ2」

そうかしずいたところでポケットのケータイが震えた。見ると、志からだった。

「志様？ どうしたの、……………はあ？ 何よ、いきなり、まあ、豚しゃぶかなあ、……………っていうか、今忙しいから、また後で！」

【18】

エルと三国はぜえぜえと肩で息をしながら、先ほどの奇襲に思いを巡らしていた。

エルは三国の首に下がるストップウォッチを見た。

「開始五分も立っていないじゃないか！」

いつもの前哨戦とは全く違った。互いに銃を突き合せてはいるが、中身はペイント弾だし、これはそもそもゲームなのである。意地の張り合いの前に、楽しむ、という暗黙の掟がある。起承転結を旨とし、最初は敵かに、最後はどわっと盛り上がる、そういう楽しみ方がサバゲーの醍醐味だ。

けれど、さっきのヤロウはそのお決まりの緩いセオリーをぶち壊

しやがった。

アレは一気にカタをつける気での奇襲だった。エルは奥歯を噛んだ。

そっちがその気なら、コッチだって。

「あの動きはルシフアーでもペンギンでもレオパルトでもなかったわね。向こうも新戦力を投入したのかな」

「新戦力か、同じ単語でもこっちの八重歯ちゃんのはえらい違いだな」

ふふつと小さく笑って、「なあ？」と皮肉を込めて隣の弥恵に声を投げるが、返事がない。横を見ても、ぐるつと視線を旋回させても、弥恵の姿はなかった。はぐれてしまったのだ。それとも、もうやられちゃったのかっ!?

「弥恵のやつ、どこ行きやがった!」

「弥恵ちゃん、弥恵ちゃん」三国がイヤホンに指を当て、マイクに向って語りかけている。が、中々返事が返ってこないようだ。「駄目、返事ない。外れちゃったのかな? エル、どうしよう? 探しにいかないよ、」

「まったくもつ、」エルは銀色の髪を掻き毟り、天を仰ぎ、一言。

「ほつとけ」

「そんなあ、弥恵ちゃんはココに来るの初めてなんだよ。遭難しちゃうかもしれないよ。もう少しで暗くなるし、無線も通じないんだから、」

「ケータイは?」エルが周囲に気を配りながら聞いた。今、狙い撃ちされたら終わりである。「ここはバリ三のはずだぞ」

「あつ、そっか………つて、まだ私たち番号聞いてない」

「じゃあ、それまでつてことだな」

「エルったら酷いよ。弥恵ちゃんはまだ十歳だよ」

「十歳でも知恵があつて、知識もある。弥恵はただの十歳じゃないよ。私はそう思ってる。思わなきゃ、あいつをバルチャーにしたりなんかしないって、」エルは鷹揚に三国を励ますように言った。「

大丈夫だつて先輩、あいつはこんなところで遭難して、レスキュー隊のお世話になるようなタマじゃないよ」

「で、でもお」

「もう、先輩は心配性だなあ」言いながらも、三国の悲しげな顔は一刻も早く退散させたいエルである。それに、散々な言葉を積み上げながらもエルも弥恵のことが心配だった。「しょうがないな」

探しにいくか、そうやって隙を見せ、走ってきた方向に踵を返したときだった。

ヒュンツという音が耳に入る。斜め前方の樹木の太い幹に毒々しいライトグリーンを確認した。

そして続けざま、けたたましい発射音とともに嵐のような弾幕が襲ってきた。

『レオパルド！』

彼女のガトリングガンの弾幕だ。咄嗟にエルと三国は互いに別々の細い幹に隠れる。十秒間の弾幕だった。幹に納まらずさらしてしまっていた手足はライトグリーンに染まっていた。

ガトリングガンは、連射は出来るが、玉の充填に時間がかかる。

その隙をついて、エルと三国は太い幹に転がり込み、半身と銃を突き出し、敵を探る。

「三佐、こつちにはいないよ！」

「こつちもよ！」二人で三百六十度、全方位を見回した。

が、敵の姿はない。ガトリングガンは威嚇だったか？ 援護射撃なら、どうして敵が姿を見せない。

どこだ、どこだ、どこにいる。

「上っ！」三国が先に気づいた。信じられなかったが、銃剣を構えたイーグルスの新戦力が、ズダダと発砲しながら降りてくるではないか。エルと三国は左右に転がってやつのことで頭部と胴体に発砲されずに済んだ。これが実戦なら手足が何本持っていかれたか分からない。

エルのサブマシンガン、三国の二丁拳銃が低い位置から火を吹い

て、イーグルスの新戦力を襲う。しかし当たらない。体にかすりもしない。

二方向からの狙い撃ちだぞ、どうして当たらない！

エルと三国、同時に弾が切れた。

こりゃあ、ヤバイ。

新戦力が余裕の態度でエルの凍りついた顔を睥睨しているように見える。首をもたげ、「もう終わり？」そんな感じに。銃剣をこちらに構えてもいない。

「ち、畜生！」エルは叫び、立ち上がる。慣れた手つきで、マガジンを装填。と、その間に距離が詰められた。目の前に顔がある。バイザー越しに視線が絡んだ。早すぎて、一連の動作をエルは見えない。ペテンにあったような気分だった。情けなくなり、腹が立ち、怖くなる。

「こつちに来んなっ！」

叫びながら発砲。当たらない、当たらない、見事に当たらない。当たらないどころか、新戦力の銃剣の先、黒く歪み、光を鈍く反射するナイフが銃弾の波を潜っては、襲ってくる。再度弾切れ。補充している暇を与えてくれない。サブマシンガンはナイフを防ぐ盾となった。

「お前、何もんだ！」

銃剣をやつとのこととで交わしながら、エルは声を張り上げる。余裕があるのか、そうじゃない、余裕がないから叫ばないとやっついてられないのだ。

「ピロ2よ」

「変ったコードネームだなっ！」

罅迫り合いのようになり、エルはそれを力任せに振り払った。「どうして銃を使わないんだっ！？」

「あなたはコレでやると決めたから」

突きがズバツと脇の下を襲う。袖が短く切れた。おもちゃのナイフのはずだ。しかし、切れた。どうということだ、簡単だ、ピロ2の

銃剣に刺されたらヤバイってことだ。

ニタリ。ピロ2の極上の笑みがエルの網膜に張り付いた。そして銃剣の切っ先がエルの胸元へ向いた。

と、そこでガトリングガンの弾幕が襲ってきた。どちらかという、それに助けられたというべきか。味方の弾に当たってもアウトであることは変わらない。ピロ2もどこかで弾幕を避ける必要がある。ピロ2はふっと退いた。エルも慌てて地面に伏せ、三国のところへくるくと転がり、やっとのことで辿り着いた。

そして一言。

「三佐、援護してくれたって罰は当たらないよっ！」

「してたもん！」確かにエルとピロ2の攻防の間に三国の二丁拳銃は火を噴いていた。しかし、全て交わされていたのである。「こうなったら、アレを使うわ」

「アレか？」確かにこの状況を覆せるのはアレしかない。

「エル、時間を稼いで」

「オッケー、三佐」

三国は二丁拳銃をエルに渡した。そして背負っていたかなり大き目のリュックサックを降ろし、金属片を取り出し、組み立て始めた。ガトリングガンがピタリと止んだ。

すかさず、エルは幹から躍り出て、三国を背に、二丁拳銃を構えた。ピロ2は狙ってくれといわんばかりにゆったりとエルの前に姿を表す。

「このっ！」もう当てる気などさらさらなかった。時間稼ぎだ、三国がアレを打つまでの時間稼ぎである。

「三佐、まだか!?!」

ピロ2がゆっくりとこちらに歩いてくる。

「あと六秒！」三国は金属片をガッコンガッコンとやっている。「あと五秒！」

カチカチ、弾が早くも切れた。マガジンの交換って、……………拳銃用の弾は三佐の腰だ。「ああ、もうっ！」

エルは右手の拳銃を比呂巳に向って投げつけた。当然、弾ほどの速度もない。簡単に避けられてしまう。そんなことは百も承知だ。エルは考えていた。もうココは捨て身でいくしかない。アレの命中率を上げるために、エルはピロ2を組み伏せようと考えた。ピロ2は驚異的な身体能力を持っているが、身長体重は初等部の四年、十歳つてところだ。全然、行けるっ！

エルは銃身を持ち、斧を振り上げる感じにピロ2に向かって突進した。その捨て身の攻撃にはさすがのピロ2も虚をつかれたのか、バタバタと組み伏せることに成功した。

思ったより華奢な体つき。おっぱいもまだ膨らんでいない。

エルは少しばかり可哀想に思った。……が、コレもこの状況なら許されるよな！

「三佐アアッ！」エルは唸り声を地面にがなりつけた。

「準備完了ッ！」爆弾が弾けたような返事が返ってくる。「いくわよおおおお！」

三国はアレを構えていた。黒くて、硬くて、太い円筒型の危ないやつ。

どこから見てもロケットランチャー。

三国はロケットランチャーを肩に背負い、そして、あの目をしていた。ハンガリーのミリタリーショップで見たあの目をしていた。

普段の優しい風貌からかけ離れたバルチャーの瞳だ。

狡猾で、残忍、ゆえにエルが標的と被っていることなど気にも止めない。『エル退きなさい』『私のことは気にすんな！早く打て！』『そんなの駄目よ！』みたいなこともしたかったけれど、三国の目は完全に標的しか見ていなかった。

さあ、三佐、打ってください。

そんな具合に、エルが重々しく達観した哲学者の顔付きになったときだった。一匹の黒ブタがエルの凹凸のない胸に飛び込んできたのである。

「？　び、ピエールじゃないかっ！」

愛して止まない親友、アリーナが飼育するミニブタがどうしてこんなところに？

おお、可愛そうに、なんだか怯えているじゃないかあ。

いや、ピエールを落ち着かせる前に、

「三佐あ待ってえ！」

しかし、遅かった。三国が「え？」という顔になるコンマ一秒前に、既に引き金は引かれてしまっていたからだ。ピエールを危険に晒すわけにはいかない、ペイント弾だけど、気付いたときには、エルは握り締めていた拳銃を発射されて間もない砲弾に向って投げた。

拳銃と砲弾は衝突した。砲弾はエルの方へはやって来なかった。だからといって衝突地点で爆発もしていない。が、奇妙な軌道を描いて、「いやあああああつ！」と悲鳴を上げる三国を血祭りに上げてしまっていた。

全身ライトグリーンの三国はココで戦闘不能になった。

ペイント弾とはいえ、ロケットランチャーである。その威力は相当なもので、自分の砲弾に当てられた三国は目をぐるぐるとさせている。

「あわわわっ」

そんなやつちまった感を漂わせているエルも、クサツ、ピロ2の銃剣に胸を突かれ、あっけなく戦闘不能になった。

【19】

志は《めがね橋前》というバス停で下車し、砂利道を少し歩いて、背負っていたドラム型のリュックサックを降ろした。

志はしばし考える。エロブタは本当に役に立つのだろうか？

ま、考えても仕方がない。ファスナーをズーっと開く。「ブグウ」と志の凹凸の無い胸に飛び込んできた。ピエールはそれがお気に入らしかった。

志は細く整った眉をぴくぴくさせながら、逃げる心配の無いピエールの首輪に手綱をつけた。志は「よいしょ」とピエールを懐から抱き上げ、しゃべりかける。

ピエールはどこか人間の言葉が分かる節がある。

「頼むよ、ピエール」このブタを頼りにせざるを得ない立場がなんだが悩ましい。「さあ、さっさかトリユフを探しちゃってちょうだい」

「ぶひっ」

まるで親指を立てたみたいに蹄を志に向けると、ピエールは懐から軽快に飛び降り、地面の匂いをかぎ始めた。ピエールは鼻を鳴らしながら、トコトコと前進する。匂いはまだ捉えられていない感じで、志の早歩きのパースで進んでいく。いつの間にかやら、道の無い樹木の繁みに入っていた。ミリタリーブーツがめり込むほどに柔らかい腐葉土の地面だ。足を取られないように慎重に、慎重に、とバランスを取っていると、急にピエールが「ぶひっ」と走り出した。見つけたのか？

「あわわ」と腕を引かれ、転びかけながらも、志は懸命に走った。ピエールはまるでロケット弾頭のように風を切り、首にかかる志の重さもなんのその、途中から志は四駆に引かれる軽自動車の気分になっていた。

「はあ、はあ」

どれくらい走っただろうか、志は膝に手を当て、肩で息をしていた。もう走れませんが、かすんだ瞳が言っていた。志はオレンジ色に染まりかけた空を仰ぎ、ブルーのカラーコンタクトに目薬を差す。すでに手綱は志の手には握られていなかった。

ピエールは忠実に志の足元で、目薬が瞳に染み入るのを待っている。

目元をキラキラとさせ、志はピエールに尋ねた。「で、どこなの？」
「ぶひっ」ピエールはここ掘れワンワンという具合に樹木の根本に鼻先を向ける。

なんの変哲も無い木の根本である。

半信半疑ながら、志は「……よしっ」とリュックから園芸用のシヤベルを取り出し、指定された場所を慎重に掘り進めた。アリーナによれば『トリユフは地中五センチから四十センチくらいのところに埋まっているから、シヤベルで突き刺さないように優しく掘るのよ』とそういうことだった。

ふと、二十センチくらい掘り進めたところだろうか、硬い感覚がシヤベルの先から志の手の平に伝わった。志は表情を変え、シヤベルを穴の脇に置き、手で掘り返す。

「あつた」

黒くて、丸くて、世界三大珍味の一つが見つかったのだ。「あつたよ、ピエール。あんた、すごいじゃないのっ！」

エロプタと認定した小一時間前とはまるで違う態度である。志はピエールをぎゅうと抱きしめた。

「ぶひっ」本来のブタであれば、トリユフを見つけたら、直ぐにがつつきたくなって、リーダーとの争奪戦になるようなのだが、ピエールはトリユフの誘惑に負けることも無く、理性的だった、というか、人間の女子の抱擁にトリユフを超える快感を得ている様子である。「ぶひひっ」

志は嬉しすぎて、手元の黒いダイヤをこう形容してしまった。

「まるでウ コミたいね」

その発言をピエールは鷹揚に諫めるように、渋い表情で鼻を鳴らした。「ぶひっ」

可愛い女の子はウ コとは言っちゃいけないよ、とそんな感じに。そして、ピエールは一心不乱に喜んでいる志の懐から飛び出して、次のトリユフを探し始めた。この辺りはトリユフが大量に埋まっているらしく、ピエールは怪しい場所に器用に前足で、×印を付けていく。志が掘ると、出てくるものはトリユフばかりである。

いつの間にか、アリーナから渡された皮袋はトリユフでいっぱいになった。

「ふう、コレだけあれば充分だよな」

志は木の根本に腰を降ろし、脇に控えるピエールを撫でた。ピエールは嬉しそうな表情を見せる。「あつ、ブタはトリユフが好物なんだよね？ ピエールにご褒美をあげなくちゃね」

志は皮袋から一つ取り出し、妖艶な匂いを嗅いで、ピエールの口元に持っていった。喜んで食べると思いきや、しかし首を振って食べようとしない。

遠慮してるのか？

最初は欲望に忠実なエロブタかもしれないと思っていただけ、実は八子公並みに礼節を重んじる、凄い主人思いのブタなのかもしれない、と志はさらにピエールを見直し、トリユフを勧めた。

しかし、ピエールは口を開かない。どちらかというと嫌いなものを無理矢理食べさせられているという感じだった。

そんなブタの感情に気付かない志は、「もうつ、人間様の親切はしっかりと受け止めなさいよね！」と怒り出した。ピエールは『だつて……』という困惑の表情で後ずさる。

「ピエール、いいから口を開けなさい」ついに高圧的に命令し始めた。「開けないと、焼きブタとチャーシューとハムとソーセージとベーコンよ！」

志の表情は本気だった。いや、酔っ払ってしまったように頬に丸くピンク色が浮かんでいる。なるほど、トリユフに当てられてしまったようである。アリーナは言っていた。『この国のトリユフは香りが強くて、少しの麻薬作用があるから気をつけてね』。それゆえの媚薬の材料であり、この場においての志の惨状なのであった。

「そういえば、コレ、本当においしいのかな？」

そしてとうとう志は胡乱な瞳で、まるでマカデミアナッツを二、三個口に放り込むように、トリユフをくちやくちやくと食べてしまった。世界の三大珍味を噛み砕いているのにもかかわらず、感慨という二文字は志の表情から窺えない。まずいわね、とフランス人とイタリア人に喧嘩を売りかねない横柄な態度が志のうなじから滲み出

ている。

さて、

「ごっくん、」と志はトリユフを飲み込んだ。喉を通り、食道を通り、胃液がトリユフの成分を分解し始めると、さらに志の症状は「ひっふ」てな具合に悪化した。「さあ、ピエールっ！ 口を開けなさい」

ピエールは身震いした。このままではトリユフの思惑通りにやすやすと酔っ払った志に、焼きブタとチャーシューとハムとソーセージとベーコンだ。仕方なく、ピエールは口を開けた。

そこへ放り込まれたのは一つ、二つ、三つ、四つのトリユフであった。

「……ぶぶぶう」

ピエールは青い顔をして、必死で飲み込まないように頬袋にトリユフを放置しておく。

「ろお？ ピエール、おいしい？」

ついに呂律の回らなくなってしまった志は、普段のエセヤンキーの姿と打って変わり、幼女のようなお気楽顔で、口元は緩みに緩んで、ふとしたはずみに目の前のブタをまる焼きにしかねない墮天使だった。

ピエールは発汗しながら、「ぶひひ」と精一杯の愛想笑いを浮かべるばかりである。

ああ、アリーナの小屋に帰りたい、ピエールの横顔はそう言っていた。

不意に、志は首を左右に振った。ピエールは何事？ とビクつく。さらに志は大げさに、酔っ払いが自分の体を制御できずに無駄な動きを繰返すように、首を左右に振り、その場でぐるりと回転した。志の瞳に飛び込んできたのは、辺り一面、ある風景を横に伸ばしてパノラマ写真にしたような秋の森の風景だった。そして不安定な心を襲ったのは孤独、敏感になった背筋を凍りつかせたのは計り知れない恐怖だった。

そして、トリユフの麻薬作用で平静を失った志はおもむろに立ち上がり、ピエールを抱き上げ、歩き出した。

ここはどこ？ どこなの？

志のカラーコンタクトの奥の瞳はせわしない。せわしなく、震えている。

ピエールは木の根本に置かれたままの、皮袋を眺めていた。「ぶひっ」と気付かせようとするが、志は見向きもしない。ピエールはやってきた方向に蹄を向けるが、志は逆方向へと歩を進める。ピエール、万事休す。このまま夜を迎えたら、軽い遭難である。そして腹をすかせた志はピエールを食べてしまはずだ……、ピエールはそこまで考えると、「ぶひひひひ」と暴れたが、志から逃れられることは出来なかった。

「ピエール、出口はどこ？」こっちこっち、とピエールは蹄を立てる。

「そうね、分かる訳ないよね」いや、だからこっちこっち。

「ピエール、」神妙な顔の志がピエールの額を擦りながら言った。

「……食べちゃっても恨まないでね」

「ぶひひひひひひひ！」

ピエールが悲鳴を上げたところで、志はケータイを取り出した。よし、それで救助を、と思ったが、違っていた。119番は志の頭にはなく、親友その一にダイヤルしていた。

「もしもし、京子？」

『志様、どうしたの？』

「豚料理っていえば何かなあ？」

『はあ？ 何よ、いきなり、まあ、豚しゃぶかなあ』

「いいねえ、豚しゃぶ、豚しゃぶ」

ピエールは生きた心地がしない。

『っていつか、今忙しいから、また後でね！ ツー、ツー、ツー…』

……

「ひ、酷いよ、京子お、えっぐ、えっぐ……」泣きじゃくりながら、

次に志は親友その二にダイヤルした。

【20】

コードネーム、ペンギンこと片吟綾はスナイパーである。ワールドの高台にライフルを構えて陣取り、高感度のスコープを覗き、獲物が姿を現すのを待っていた。南極圏のペンギンが流氷漂う水面近くに現れる餌を待ち伏せるように、じつくりと。

.....きたっ！

スコープの隅に迷彩柄の服を着た、女の子の上半身が映りこんだ。エルヴィーン・クイード・コンベルハイアーか？

しかし、どうも彼女の挙動にはおろおろという動きで素早さが感じられない。

オレンジ色の太陽の光が気になり、綾はスコープから目を離し、バイザーを上げ肉眼で確かめる。八十メートルは離れているだろうか、それゆえに判別が難しいが、夕日を煌かせている髪の毛はエルのものに違いないと踏んだ。

綾は立ち上がり、背後を気にしながら、場所を移動するべく立ち上がった。エルが敵前にふらふらと現れるなど、囿以外の何者でもなれと思われたからだ。

綾は高台をゆっくりと下り、左斜め後方、エルが歩く場所よりも二メートルほどの高低差のある位置に、回り込んだ。そして周囲を軽快しながら、ライフルを構えるためにしゃがみかけた、そのときだった。

『らあー、ららららあー、にゅーうえい』

綾のケータイの着うたが鳴り響いた。志のバンド、第七軽音部の新曲『ジョイス』が森閑としたワールドに響き渡る。この曲が流れたということは志からの着信である。

一体、何の用だろう、よりによってこんなときに掛けてこなくたっていいのに、普段、こっちから掛けても、『毎日会ってるじゃん』

とか冷たく言っつて、おしゃべりすることに付き合ってくれないくせにいい！

ともかく、綾はケータイに出ることなく、弾を装填し、銃を抱え、低く走った。背後にもし敵がいた場合、気付かれた可能性がある。

照準を定めての射撃はリスクを伴う。三十メートルの距離を全力で駆け抜け、ゼロ距離射撃を実行する。エルをやってから、背後にいるかもしれない敵と対峙する、そういう算段を綾は瞬時に組み立てていた。

エルが上下左右を見回し、綾の位置とは逆方向に視線をやってから、背後の綾に振り向こうとしていた。

綾はズンズンと距離を詰め、速度を緩めることなく、

「ていやあああっ！」とキンキン声を上げ、エルに向かって跳躍した。走り幅跳びの要領で中空で全身をそり、その反動で足を前に突き出す。

さながらドロップキックである。

そのままエルを倒し、胸元をペイント弾で汚す、そういうイメージである。

が、しかし、綾の奇声に振り向いた人物は、エルとは似ても似つかない別種の美人さんであり、綾の好物のお顔だった。その右耳にはケータイが当てられていて、なぜか胸元には一匹の黒ブタがいる。でも、敵の迷彩服姿だし、コレは裏切り？ 志様が裏切り？ でも、そんなはずはあ、今日は遊んでいる暇ないって、えっ、そういうこと、寝返ってお前らを殲滅してやるって、そういうこと？ そういえば志様、この前ケガをさせてしまったアリーナっていう可愛い子になんだかご執心だったし……、なるほど、そういうことね、そういうことだったんですねっ！

綾は空中でドロップキックの姿勢のまま、瞬時に自己完結して、志に向ってミリタリーブーツで武装された両足を突き出した。

「ふぎゃっ」

と、悲鳴を上げた志の口元に、綾はマウントポジションを取り、銃

口を突きつけ、そして言い放った。「そんな、ひどい、ひどい、ひどい、あんまりです、志様、裏切るなんてあんまりです！」志の潤んだ瞳。綾は許してしまいそうな心境をぐっと胸元で押しとどめる。

「涙ながらの裏切りですか？ そんな手には乗りませんからね。志様は私を、京ちゃんを、そしてピロ2をも裏切ったんです！ 許してたまるものですかあ！」

綾は勢いに任せて引き金を引いた。ぱしゃっという軽い音がして、ピエールと志の凹凸のない胸に毒々しい黄緑色の蛍光塗料が付着する。「ぶひいひい」とピエールは怯えきった様子でその場からトコトコと逃げていった。

「志様、いえ、志！ 何か言ったらどうなのっ！」

引き金を引いたところで綾のスナイパーライフルに込められた弾は実弾ではない。志は当然生きているし、つまり綾の気は済んではいなかった。綾のライフルに実弾が装填されていなくて、本当によかった。綾は狂ったようになって、志の肩をゆっさゆさと揺らす。「謝罪しろ！ 謝罪しろ！ 謝罪しろ！」

しかし、志の口から飛び出したのは、綾には意味の分からない「ありがとう」だった。

「あーや、ありがとう、あーや」

「へ？」何の脈絡もない涙ながらの『ありがとう』に綾はそこで志の様子がおかしいことに気が付いた。「ど、どうしちゃったんですか？」

そして、次の瞬間、

「あーや！」ぐわしっ、と百合でもレズでも変態でもない志が綾の腰に纏わり付いてきたのだ。物凄い力で。

「ゆ、志様？ どうなさって？」

「あーや、助けに来てくれたんだね。寂しかったよお、怖かったよお、あーやあ」

聞いたこともない志の緩い声と泣き声を聞いて、思わず「よしよ

し」と頭を撫でる。

綾は何がなんだか分からない。が、とにかく愛しの志様に纏わりつかれて嫌なはずはない。ともかく、マウントポジションを解いて、熱い熱い抱擁をやり直そう。

そう「うへへ」と思ったときだった。背中にぱしゃっという衝撃と音がした。すっかり警戒心の失われた綾はやられてしまったわけである。

しかし、志とのヒメゴトに励むべく体位を移行していた綾にはやられたことなど気にもとめなかった。

【21】

さて、綾を撃ち取ったのは誰かというところ、バルチャーの生き残り、ワルサーの引き金を引いた弥恵だった。

「た、倒したんだよね？」

状況はよく分かんないけど、まずは一人、撃退。弥恵はその場から離れながら、マイクに向かってその旨を告げた。しかし、返事がない。これも厳しくいく、のうちだろうか。それにしても先ほど、奇襲を浴びて散会してから、何の連絡もないのが気になるけど。

弥恵の腰には、金色の部分を露になったプラグがゆらゆらと揺れていた。無線機から外れてしまっている。これではいくら性能がよくても耳にまで届かないし、声を送ることはできない。

弥恵はそれに気付かず、エルの厳しい仕打ちだと思い、イヤホンの不具合であるとは露ほども考えなかった。それに弥恵は三国の心配を他所にこの森で遭難するなどはコレっぽちも思っただけいな

い。
なぜなら、ここは幼い頃、毎日毎日比呂巳と駆け回っていた遊び場だったから。

弥恵は次の標的を求めて、敵が好みそうな場所を考えて歩く。バラック小屋が北の方にあっただけ。

廃バスが西の方にあつたはず。

社が南の方にあつたはず。

そして東には……。

そう思いを巡らしたところで、まるでロケットランチャーが炸裂したようなけたたましい炸裂音がした。

弥恵は音がしたほう、東の方角へ向つて走つた。するとこちらに背を向けた黒を基調にした迷彩服を着た女性の姿が木と木の隙間から見えた。つまり、敵だ。どうやら弥恵には気付いていない様子だ。弥恵は射程距離までゆつたりと歩を進める。

幼い頃、比呂巳との鬼ごっこを思い出しながら。

比呂巳との競争に比べれば、目の前の敵を仕留めるくらいなんてことなかった。

約五メートルの距離から、弥恵は引き金を引いた。軽い音がして、女性の背中に黄緑色の塗料が弾ける。

打たれたことでやつと弥恵に気付き、振り返つた女性は目を見開き、心底驚いている様子だった。

「いつの間に、全然分からなかった」やれやれと首を振り、大きく溜息をついた。「一体どんなペテンを使ったの？」

弥恵は銃口を向けたまま応えないでいると、

「コードネームは？」と聞いてきた。「コードネームくらいいいでしょ」

「ニューファング」弥恵は短く言った。

「ニューファング、いいね。アリーナに代わるバルチャーの新鋭、ニューファング、悪くないね、凄くない。でも、「レオパルドは一度背後を見てから、女性は死んだフリをするために崩れ落ちた。」うちの新しい牙に勝てるかしら」

女性の影になって、弥恵には見えずにいた向こう側には、銃剣を構えた少女が立っていた。背丈が弥恵と変らない小柄な少女が立っていた。バイザーと帽子で顔が分からない。けど、咄嗟に比呂巳？と思つた。まさか、そんなはずはない。そんなはずは……。

そんなことを考える暇はなかった。

少女の銃弾がズダダダダと、鋭く襲ってきたからだ。

弥恵ははっとして両腕で胴体への攻撃を防ぎながら、近くの幹へ転がり込んで、立ち上がる勢いでそのまま駆け出した。向う先は東。東にある、弥恵と比呂巳と兄貴の、いや、兄貴なんていないけど、二人の秘密基地だった。

秘密基地は、確か二人が五歳になったくらいとき、弥恵のパパと比呂巳のパパが与えてくれた軽井沢のペンションみたいな小さな二階建ての白塗りの建物だった。二人はいつの頃からか、普通の雨風を防ぐ建物に飽き足らなくなり、主に比呂巳が忍者屋敷のように改造を始め、いたるところに罠を作った。比呂巳の発想力に幼い頃の弥恵はどれほど瞳を輝かせ、何度罠に嵌められたことだろうか。その罠、嵌められた罠だけに、その存在は弥恵の記憶に鮮明に残っている。その罠に敵を嵌めてやるっ！ 比呂巳の罠に掛からないわけがない。

二年生になって、三年生になって、四年生になって、弥恵はあまり秘密基地に訪れなくなってしまったが、その罠は健在なはずだ。

そこへ誘き出せれば勝利は確定したも同然だ。

弥恵は比呂巳、比呂巳、比呂巳と走る。

秘密基地が見えた。

紅葉の中、不自然に建つ人工物が見えてきた。記憶よりも白い外壁に古さが垣間見えるが、秘密基地は廃墟にならず、健在であった。懐かしい。比呂巳との二人っきりの時間が思い出される。が、現在目下戦闘中、懐かしさを噛み殺すように脳みその片隅に追いやって、背後の気配に気を配る。ココに入るところを見られなきゃ始まらない。よしよし、いい距離に近づいてきている。

弥恵は真っ先に玄関に向わなかった。正面入り口には鍵がかかっているだろうし、なによりも昔の行動慣習が、弥恵を常に鍵を掛けているなかった小窓へと誘った。鍵は弥恵の兄貴、まあ、兄貴なんていないんだけど、年上の兄貴が持たされていた。鍵を兄貴に借り

行くと、必ずついて来るし、秘密基地で比呂巴と二人つきりになれないから、弥恵はそっとリビングの小窓の鍵を外しておいたのである。

カラカラ、案の定、小窓は開いた。体が一回りも二回りも成長し、中に入るのはちよっぴり辛かったけれど、なんとか潜り込む事に成功した。中は光が届かず暗かった。けれど、この場所で何度かくれんぼをし、何度罨に嵌められたかは分からない。弥恵は敵が侵入できるように玄関のドアを開けに足早に歩く。

そして、リビングを出ようとしたときだった。玄関が開かれる音がした。

咄嗟に身を隠すために二階の階段を物音立てずに駆け上がった。

なんで、どうして？ 鍵は兄貴しかもっていないはずなのに……。

針金か？ 特殊工具でピッキングか？

相手はイーグルスの新しい牙、それくらいやってのけるのだろう。ともかく、弥恵は玄関の気配を窺いながら、階段の壁際に手の指を這わせ、とあるスイッチを探した。確か、この辺りだった。敵は律儀に靴を脱いでいる。まあ、弥恵も律儀に靴を脱いでいるが、今がチャンスである。あつた、壁に一センチ画のプラスチックの感触。

罨、その一。来訪者の脳天を叩き割る、金ダライ。

ふふっ、実際にやる側となると、こんなにも笑いが堪えられないものなのだろうか、弥恵は十歳とは思えない魔女の顔で、スイッチを押した。敵はタライにやられ、きゅーとなって、私のワルサーの餌食だ。そして、先輩方に誉めて、いや……罵ってもらおう。弥恵はお風呂場でそのお肌を見る前から、三国の罵りにならないヘタレ攻めを虎視眈々と狙っていたし、隙を見て、お姉さま呼ばわりしようとしていた。

さあ、さあ、さあ、タライよ、やっちゃって！

が、弥恵の思い通りにはいかなかった。玄関の天井がかぼつと開き、タライが落ちてくることはなかった。逆に、
があんっ！

と、タライ独特の音がしたのは弥恵の脳天からだった。

「……………イタイい」脳天を押さえて弥恵はその場に「うつつう」とうずくまった。目尻にはうつつすらと涙の粒。

……………なんでよお。って、ハムスターみたくうずくまっている場合じゃない！

タライの音を聞きつけ、敵の気配はゆっくりと、こっちに向ってきていた。

マズイっ！

そして、さらにまずいことに、弥恵の手からワルサーが零れてしまっていた。ペイント弾が装填された武器がなければ元も子もない。罨に嵌めても意味がない。足元を探った。暗闇の中、なかなかワルサーは手にかからない。その間にも、敵はゆっくりと近づいてくる。落ち着くのを、弥恵。冷静になるのを、弥恵。宇宙の物理現象が根底から覆らない限り、絶対にワルサーは消えていないんだからっ！

ほづら、あつた！

と、弥恵がワルサーを手にした瞬間だった。

猫目になっていた弥恵の瞳に強烈なLEDライトの感覚。

眩しいっ、弥恵は思わず目を瞑る。

初め、弥恵は目を瞑ったから、なんだか体がふわっと浮き上がったような感覚になったのだと思った。重力をすると感じているのはそのせいだと思った。滑り台を滑っているような気持ちのよいお尻の感覚は瞳がそつと閉じられたときに起こってもおかしくない現象に思われた。

そして、弥恵がそんなお気楽なものではないと気付いたのは、階段が自らの段差を捨てて、なだらかな傾斜を作り上げているという驚愕の事実気付き、この罨の存在を鮮烈に思い出し、少女 ピロ 2に睥睨されているときだった。

滑り台と化した階段から私は廊下にすんなりと落ちてきている。

私は罨に嵌められた。

弥恵は空手で鍛えた動体視力を活かさなく発揮して、咄嗟にリビン

グに転がり込み、振り向きざまにワルサーを発砲。一発、二発。しかし、ピロ2は機敏な動きで扉を盾に銃弾を防いだ。そして、そのまま膠着状態が十秒。弥恵は唾を飲み込む。喉が渇く。沈黙は弥恵を責め立てる。どうする？

弥恵がワルサーを向けている限り、この部屋にはピロ2は出て来れないだろう。一見、弥恵の優勢。だが、だからといって、扉の向こうに調子に乗って、ノコノコと出てゆけば、黒く鈍く光る銃剣の餌食になることは間違いない。

感情が高ぶっているとはいえ、それくらいは弥恵にでも判断できた。どうする？ 動く？ アクションを起こす？ カウンターを恐れずに行く？ 扉を蹴り跳ばして突入する？ どうする？ どうしようもなかった。

突然、弥恵の体は空中に放り出された。リビングの床がバタンツと開き、弥恵は落下した。

悲鳴も出ないほど、それはそれは、唐突だった。

「……いてててっ、」弥恵は瞳をマイナス記号にしながら、柔らかい井草の床に打ちつけた形のいいお尻を擦る。「はうっうっうっ」

……………ココ、どこ？

弥恵は畳の上だった。十六畳ほどの広々とした部屋。多分、地下室だった。

しかし、弥恵の記憶に、この秘密基地には地下室なんてない。

弥恵は自分の現在の状況を把握すべく、その和風の部屋を見回した。壁に和紙で囲われた薄ぼんやりと光るLEDライト、狩野永徳の唐獅子が模写された襖。違い棚の上には司馬遼太郎全集、その下には日本刀が飾られていた。

いわゆる書院造の部屋だ。当然、和服を着た鑑定士や和服を着た骨董屋が喜びそうな掛け軸も垂れ下がっていた。そこにはこう書かれていた。

《翠帳紅閨》

なんて読むんだろう？　そしてどういう意味だろう、弥恵は掛け軸に目を近づけた。

と、またしても唐突だった。

ばさつと掛け軸の向こう側から、ピロ2がぬつと現われたのだ。

形のいい唇だ。弥恵はその唇に見覚えがあった。

まるで忍者屋敷だ。いや、そんなことは何年も前から分かっていることだったが、思わず弥恵は仰け反って尻餅をつき、くるっと、その勢いのまま後転してしまった。

しかし、弥恵、ピロ2にいいように驚かされてばかりではなかった。起き上がりざまにワルサーをぶつ放す。撃つ、撃つ、撃つ。

しかし、その銃弾は全て畳に阻まれた。ピロ2がドンと床を足で踏み込むと、目の前の畳が黒髭危機一髪のようにスポンと跳んで、盾となったのである。

ライトグリーンに染まった畳が押し寄せてくる。ピロ2が迫ってくる。

「来るなっ！　来るなよっ！」

弥恵は後ろに下がりながら撃つ。ペイント弾に貫通力はない。弥恵の連射は畳が汚れるだけの、非生産的な行為だった。しかし、撃たずにはいられなかった。その他にこの状況であぐ方法があれば教えて欲しかった。

カチツ、カチツ。

もう弾がない。予備もなくなった。

背中が壁に衝突した。もう後ろには下がれない。万事休す、絶体絶命、チェックメイトだ。

畳が横に払われ、ピロ2が姿を見せた。

バイザー越しに、視線が絡み合う。

間違いないっ！

すぐさま、ピロ2の銃剣が襲ってきた。銃を撃つ気がないのなら、弥恵にもまだ勝機がある。気合を入れなおし、弥恵は全力全開で、その銃剣から避けた。間髪いれずに、第二撃。弥恵はそれも紙一重

のところかわす。その表情は闘志に溢れているながらも、どこか涙を必死に堪えているようにも見えた。

「やっぱり、やっぱり、そうだった！」

弥恵はピロ2の太刀筋から確かに感じ取った。思想、哲学、イデオロギー、彼女が背負う世界観を確かに感じ取った。というか、この秘密基地を知り尽くしている人物はこの世でたった一人しかいない。

「間違いないっ！ お前っ、比呂巳だっ！」

弥恵はがなった。

すると、ピロ2の動きが止まり、口元がほころんだ。そしてバイザーがゆっくりと外された。「弥恵ったら、今頃、気付いた？」

ピロ2こと比呂巳は、もう最初から弥恵だと分かっていたらしい。

「随分前から気付いてはいたよ」ただ信じたくなかっただけ。弥恵もバイザーをぽいっと捨てる。「比呂巳がこのゲームに参加してるなんて、知らなかったよ」

「今日だけのピンチヒッターってやつだよ」

「そのわりには銃剣捌きが自衛隊の上等兵並じゃない」

弥恵はぶすつと答えながら、考えていた。

比呂巳に勝つ方法を……。……こんな地下室があるなんて知らなかった」

「どう、ビックリした？ 弥恵を驚かせようと思って、前に作ったんだ」

「別に、なんとも思わないわよ。コレっぽっちも比呂巳のセンスに脱帽なんてしてないわよっ！」

「弥恵ちゃんてば、冷たい」

比呂巳はわざとらしく銃剣をぎゅっと抱くようにして、悲しげな視線を寄越す。思わず暖めたくなるほどの愛らしさだ。でもでもでもと首を振る。コレもきつと比呂巳の罠だ。同情を誘ってクサッと胸を突く気だ。私に向ってあんな目を向けるはずはない。

「最近、なんだか弥恵がとてもよそよそしい気がする」

「そんなことない」語気が荒い。

「……何か私に、隠し事でもしてる？」

隠し事ならある。比呂巳への気持ち。多分、それが理由。でも、言えるはずないじゃない！好きだ！なんて比呂巳に面と向って言えるはずないじゃない！全部、比呂巳のせいよ。冷たいのも、よそよそしいのも、隠さなきゃいけないのも、全部比呂巳のせいよ！ヒステリーで、弥恵の頭は沸騰しきっていた。

比呂巳なんて大嫌いっ！って叫びそうだった。

「隠し事してるっていうんなら、比呂巳の方じゃないのー！」
担任の藤原と仲良くしちゃってさ。不潔よ！ 犯罪よ！

何、『はあ、何それ？』みたいな顔してるんだよ、コッチは比呂巳の一挙手一投足に目をやっているんだ。さながら、バルチャーのようね。

「弥恵ってば、何を言うの？」

「別に、とぼけなくてもいいわよ。全部分かってるんだから、比呂巳が憎たらしかった。私のものになってくれない比呂巳が憎い。だから、絶対勝つ！ 空手じゃなくていい、テストじゃなくていい、もう、なんでもいい！」

比呂巳に勝ちたい！ 何が何でも勝つてやる。

弥恵は決めた。再度、時計を見る。残り時間はわずかだ。比呂巳から逃げ切り、バルチャーズとイーグルスを引き分けに持ち込む。それがこの状況での勝ちだ。「それより、比呂巳、今はゲーム中でしょ？」

「うん、そうだったね」

比呂巳は銃剣をカチャツと構えた。弥恵も、弾があるようにワルサーを握る。

「私のコードネームはピロ2、弥恵は？」

「……ニューファング」

「何それ？」

比呂巳は笑った。比呂巳は覚えていなかったのだ。

比呂巳がつけたんだよ、ニューファングって、覚えてないの？

あの後、私の八重歯が可愛いつて言ったのもきつと、覚えていないだろうな。

私、すっごく嬉しかったんだよ。比呂巳のことがあんなことやこんなことをしたいほど好きって気付いたのは最近になってからだけど、でも、そのときから、私は比呂巳のことを好きだったんだ。だから、覚えてるんだ。

でも、比呂巳は、比呂巳は、比呂巳は……。

「バカッ！」

弥恵は叫び、ワルサーを思いっきり投げつけた。

比呂巳が驚いた顔で、銃剣で受け止める。

その隙に弥恵はその部屋から脱出を図る。経路は左側の襖に絞っていた。

そこへ飛び込み、制限時間一杯逃げ回る。

唐獅子が弥恵を睨んでいる。開けるな！ という風に睨みつける。

構うものか！ 弥恵は襖をバツと開いた。

「……………そんなぁ」

愕然とした。襖を開けてみて、弥恵は言葉を失わざるを得なかった。一気に感情が萎えた。徹底的に打ちのめされた。なぜならそこに道はなく、一面灰色の壁だったからだ。この部屋に誘い込まれた時点で、弥恵の負けは決定していたのだ。

「残念でした」

弥恵の愛してやまない、比呂巳の無邪気なロリボイスが聞え、弥恵の背中がクサツと銃剣でやられてしまった。

【22】

午後七時のルダシユは三国とエルとピエルだけだった。この時間帯は夕食を食べているお客が多く、三国は一人で八角形の浴場を占領できた。

「ふう、極楽、極楽っ」

極楽そうな声が浴室に反響する。勝負に負けてしまったのにもかわらず、深い水蒸気の中の三国の表情はさっぱりとして緩い。エルとは違い因縁を明日まで引きずらないタイプなのである。

「先輩、今日は本当にごめえん」

エルは情けない声を投げた。エルが必要以上に沈んでいる理由は敗北を喫した以外にもあった。終わってから分かったことだが、イギリスはどうかやら志抜きで戦っていたようなのである。最後にベースボールの試合みたいに真ん中に集まって礼、とかしないから事情は詳しくは分からないけれど、ともかく志は代わりに、若干十歳を送り込んできたのだ。まあ、結果的に十歳のピロ2の方が格段に厄介だったわけだが、考えれば考えるほど胃がムカムカして、ピエールを洗うタオルに力が入るというものだ。ピエールの体は、なぜかペイント弾の塗料で汚れていたのだった。どこで浴びたのかは謎だった。が、ともかくアリーナに悲しい顔をさせないために、エルはシャワーでわしゃわしゃと一心不乱に洗っていた。

「ペイント弾なのに、こいつをかばったばかりに……」

ピエールは少し力入れすぎが丁度いいらしく、恍惚の表情を浮かべていた。麗しきピアンネ娘との混浴を心置きなく楽しんでいる様子である。ああ、なんとوراやましいご身分であろうか。「ぶひひい」

「エル、深呼吸するのよ。心を落ち着かせなさい。ご乱心はお肌によくはないわよ。今日のこととはきっぱりさっぱり消化してさ、まだこれからもイギリスとはやり合うんだしさ、そのときにリベンジしようよ。元気出せ、エルヴィーンなんかかんとかあ」

「……………先輩って、マジ先輩って感じに励ますよな。先輩はずるいよ。かなわないなあ。たまに泣きたくなるよ。自分が情けなくなつてさ」

「泣くな、エルヴィーンなんかかんとかあ」

「うう……………面倒臭いから、エルでいいってえ」

「それにしても弥恵ちゃん、かなり凹んでたねえ。大丈夫かなあ。」

「ココにもついてこなかったしい」

「負けたことが悔しかったんだろお」

「それにしても漂う雰囲気グデーブだったように思うけどお」

「いい傾向じゃないか。深い敗北感はタウリンよりも、インドメタシンよりも人間を成長させる、だろ。それに弥恵のやつ、ペンギンインとレオパルドをやったっていう話じゃないか。これからビシバシ鍛えれば、きっと物凄いバルチャーになるぞお」

ふと、今まですっかり忘れていたという感じで、ピエールがエルの足元になにやら吐き出し、「ぶひひ」と『プレゼント』という感じに蹄でそつと差し出した。

「ん？ 何、このウ コ見たいなやつ？」

そのウ コみたいな、黒くて、丸くて、固いやつが四つ、ピエールの口から出てきた。

ピエールは「ぶひひひつ」と何か説明している風に鼻を鳴らしているが、ハンガリー語と日本語をしゃべることのできるバイリンガルのエルでも、さすがに分からない。

エルはシャワーで洗いながら手にとって調べる。

…………… チューリップかなんかの球根かな？

「おーい、せんぱあい」

「なあに？」

「花に興味あるう？」

「団子がいいい」

「だよなあ」

さて、この球根どうしようか。庭にでも植えようか。

あつとエルは保健室の壁際に咲き乱れた、球根から伸びる白百合を思い出した。

日頃の御恩に先生にプレゼントしようかな、エルはそう決めた。

第四幕

【23】

バルチャーズとイーグルスが神代峠で死闘を繰り広げた次の日、中等部校舎の昇降口には目蓋を半開きにした志の姿があった。ピアノは朝の慌しい喧騒を終えて、めいめいの教室では授業が行われる静かな時間帯を迎えていた。つまり、志は遅刻してしまったというわけだ。

その細い眉とカラーコンタクトとピアスとロングスカートとミリタリーブーツ（今日はカラーコンタクトもピアスもしていないし、ロングスカートもミリタリーブーツも履いていない。至って特徴のない制服の着こなし方をしている）からは遅刻常習犯の香りがぷんぷんと匂うが、意外と遅刻するということはなかった。綾のモーニングコールがあったし、同室の京子が毎日律儀に起こしてくれるからだった。

しかし、今日はその行為を全てはねつけてしまったようだった。ようだったというのは、志の中での朝の記憶が曖昧だったからで、いや、昨日、何があったのかも良く思い出せない、うつすらと覚えているのはあーやにチュツチュされまくっていた変な夢(?)を見ていたということだけで……、そんな二日酔いに似た『きもちわるー』に志の前頭葉は襲われていたのだった。

それでも学校に来てしまうのは元来の真面目な性格のためだろう。人間、マジでしんどくなると、着飾るなんて出来ないのである。ゆえに、今日の志はサラッサラの金髪を除いては普通の優等生に戻っていた。

「うつ……、きもちわるう」

青い顔をしながら、口元を押さえ、志は下駄箱を開いた。

「……………ん？」

さつさと上履きに履き替えて、教室へと気持ちがあつていた志は、ここで一テンポ考えさせられた。

上履きの上に何かある。手紙だ。エアメールのような白い封筒に入つた手紙だ。しかし、志の下駄箱はポストではないし、入れておけばポストまで届けておきますなんて吹聴した覚えもなかった。さすれば、この手紙は至極単純に志宛のものだろう。誰だろう？ 封筒には何も書かれていない。裏表三度ひっくり返しても何も書かれていない。ただ、気になることがある。封筒はシールで封がされていた。そのシールは……、世間一般で言うところのハートマークだった。

「なっ!？」

回らない、働かない、それに鈍痛を抱える、産まれてこの方最低レベルの脳波を記録していた志の脳みそは、ハートマークをしかと認識したところで一気に産まれてこの方最高レベルの脳波を記録した。

嘘、マジで、マジか、マジなのか!？」

「……ふう」落ち着け、落ち着くのよ、志。しっかりしなさい。私はたった一枚のラブレターに浮かれるようなキャラじゃないですよ。ファンレターをもらうときはなんとも思わないじゃないの。そうよ、コレもファンレターかもしれないじゃない。恥ずかしくて、面と向つて渡せないから、下駄箱に入れたのかもしれないじゃない。

いや、一気に頭を沸騰させた手前、それはそれで悲しいというか、悔しいというか……？

ともかく誰だろう？

そう考えを巡らせたところで、この学園に男の存在が全体の一パーセントもないことを知って、「うがーっ」と落胆した。

そうよ、一喜一憂しちゃってバカみたいじゃない。

ココは男子禁制の乙女の園。下駄箱に恋文を忍ばせるなんて出来ないんだ。

百合的なことにあまり造詣と関心がない志は相手がよもや、女の

子とは考えていない様子である。

ともかくにも、今日は朝から表情豊かな志は、この手紙がフアンレターである確立九十九パーセント、ピアンネの敷地を取り囲む城壁を越えてきた男子からのラブレターである確立一パーセントの面持ちで、ちよっぴり甘酸っぱい視線で、封を開けたのである。

が、中に入っていた手紙は、そんな甘酸っぱい気持ちを神代峠の向こう側に放り投げるほどの破壊力を持っていた。

以下文面である。

『拝啓。天志殿。秋風が頗る君のロングスカートをはためかせようと躍りになって今日この頃、君は幸せに暮らしているだろうか？ 幸せだろうなあ、君は才能に溢れているし、信望者も多いし、血統も申し分ない。君は実に素晴らしい女性だ。金髪とカラーコンタクトとピアスとロングスカートとミリタリーブーツを脱ぎ捨てた君は、この国の十四歳の中で一番の幸せ者だ。羨ましくはないよ、僕はロリコンだから、君みたいな女性をロリコンすることに幸せを覚えるんだ。もちろん、君に危害を加えたりはしないよ。だって君と僕は一生出会うことができないだろうからね。僕の心配はいらないよ。僕の妄想力はB.Lの十歳に比べれば劣るけれど、君を脳内でロリコンするくらい簡単なことなんだ。この文章をタイプピングしているときも、君は僕にロリコンされているよ。どう、嬉しいかい？ あははっ（爆笑）、そんなに怖がらないでよ。手紙を読む手が震えているよ。それともちよっぴり漏らしちゃったかい？ 心配しながら、落ち着いてくれよ。僕は出来れば君にはずっと幸せでいて欲しいと思っているんだから。本当だ。本当だ。でも、もう察しがついていると思うけれど、こんなことを書くからには、もしかしたら君は幸せになれないかもしれない、その選択を迫られてることなんだよ。どうしてだと思おう？ 最近君の手に転がりこんできた、幸せが原因さ。君はその幸せでもっと幸せになろうとしているね。でも、それは許されないことなんだよ。もう分かるね。あの手帳を返して欲しいんだ。君が手にしている手帳は私のものなんだ。』

返してくれたら、君は幸せになれる。その権利があるんだ。いいかい、今日の午後二十四時、明日の午前0時だ、ピアンネ前のローソンのテレフォンボックスのタウンページの下に、手帳を置くんのだ。僕を捕まえようなんてバカな真似は考えるんじゃないよ。もし、君に限ってそんなことはしないと思うけれど、もし、言い付けを守らなかった場合は、分かってるね。ロリコンの、ロリコンのための、ロリコンによる、ロリにしちゃうからね。敬具』

志は手紙をクシャッと握り締め、保健室にダッシュした。

【24】

陵はゆっくりと水質検査をしながら、「ふわわわあ」と欠伸をしていた。いけない、いけない、しゃきつとしなくちゃ。「んーっ」と伸びをしていると、プロパンガスが破裂したような音が耳をつんざき、ドアが開かれた。

「せんせえ！」

ピアンネの森の雀を脅かすような声を上げて陵を呼び、ぽむっと懐に飛び込んできたのは志だった。

サラッサラのゴールドヘアに、ってあれ？ カラーコンタクト、ピアス、ロングスカート、ミリタリーブーツはどこへやら、普通の品行方正を象った、ノーマルお嬢様に脱皮している。そのお姿は教師という立場から見れば好ましいが、陵個人の感想としてはビールからアルコールが抜けたような、コーラから糖分を抜いたような、コロッケの中身が豆腐になったような、つまり毒が抜けて物足りなかった。

しかし、その表情は朝食に毒を盛られたように青ざめていた。

「一体全体どうしたの？ まだ一限目も始まったばかりだし、ゴード&シルバーの決闘のすえに運ばれてくるにはまだ早過ぎるし、そもそも授業はどうしたの？」

「そんなことよりもお！ ロリコンの、ロリコンのための、ロリ

コンによるロリにい！」

「ロリコン？ 私がロリコンって言いたいなの？」

まあ、あながち間違っではないけれど、一体いつバレちゃったんだろ。

「せんせえじゃなくて、「ブンブンと首の骨がどうにかなりそうなほどの勢いで志は首を振る。「ロリコンが、私の幸せな義務教育をぶち壊す気なんですよ」

一体、志は何を言っているのやら……。

「ともかく、義務教育より大切なものはないわよね」先生みたいなことを言いながら義務教育に対しては何ら崇拜の念も不満もない陵であった。だから、そのポーズには重みが全く感じられない。「ま、とにかく落ち着いて話してご覧なさいな」

志を教室に返す気などさらさらなく、というか、水質検査が終わればやることもないので、陵はベッドに誘いソコへ座らせた。陵も横に座る。

「で、何があったの？ トリュフのことで問題発生？」

昨日、陵はずっと志の帰りを待っていたのである。が、結局、鍵が閉まる午後九時までに戻ってこなかったから引き上げたのである。その間、陵は何をしていたかという、すでに薬を調合して始めていた。あとはトリユフを煎じて加えるだけである。

「まあ、間違っではないんだけど、「志の背を擦っていると、段々と落ち着いてきた。机の上のペットボトルのお茶を飲ませると、正常の呼吸に近づいた。「せんせー、コレ見て。さっき下駄箱に入ってたんですけど」

陵は志からくしゃくしゃになった便箋を受け取った。明朝体のワープロ文字を読んでいく。次第に陵の顔が怒りで歪んでいく。

許せないっ！ このロリコン野郎、絶対に許せないっ！ 絶対にっ！

「私、大丈夫かな？」

震えた声と素の黒い瞳で陵を見る。

こんな純情な子の幸せをロリコンしようなんて許されないわっ！
無間奈落に突き落としてやるっ！

陵は保健医とは思えぬほどの形相で、そう決意した。そしてぎゅつと志を抱きしめる。

「大丈夫だよ。私がコイツの手紙の主をとっちめてやるからね」

「何言ってるんですか」

「えっ？」

「喧嘩は一人でさせませんから、」志はぐぐつと胸の前で拳を作った。「せんせーは、私がロリコンを殺そうとしたら止めてくれるだけでいいんです」

……そうだった、志ちゃんはこんなことで、たまにおしっこをちびらしてしまうけれど、BB弾の攻撃を核弾頭でやり返す、悪名高き墮天使だった。ロリコン如きにむざむざと諸手を挙げる小娘ではなかった。「私の平穏な義務教育に介入したことを後悔させてやります！」

陵は頼もしいと思いつつも、少し複雑な心境だった。初めて頼りになる先生になれそうだったのになあ。

と、そこで、

「うっ、」と志が青ざめた顔に戻り、口元を手で押さえた。これもよおしてしまう感じだった。「と、トイレ行ってきます」

どうして志が原因不明の体調不良に陥っているのか、陵は検討もつかなかった。

【25】

弥恵は今日、初めて学校に遅刻した。迎えに来た比呂巳と会話を交わしたくなくて、寝坊したフリをしたのだった。でも、今日、一日を休んでしまったら、全てが駄目になりそうな気がして、結局は登校した。

授業の途中に扉を開けた弥恵に、比呂巳は『あっ、ねぼすけが来

た』という顔で微笑んできた。弥恵は仏頂面で無視して自分の席に戻り、休み時間は教室から逃げた。

さいてーだ、私は、さいてーなやつだ。

どうして比呂巳のことを考えて、こんな気持ちに、逃げたくなくなるのか分からなかった。

私は比呂巳にどうしてほしいのだろうか？

どうして欲しかったのだろうか、昔の自分の気持ちがい出せない、取り戻せない。

私は比呂巳をどう思っているのだろうか？

どう思っていたのか、浮かんでこない、真っ白だった。

好きだったのかさえ、分からなくなる。

昼休み、いつもだったら比呂巳と食べる楽しい昼食。けれど、志は弁当箱と水筒の入った手提げとコルネットのケースを持って、屋上上がった。屋上で吹き鳴らそうと思ったのだ。

扉を開け、正午の強い明かりに飲み込まれながら、ふと、耳に聞えてきた音楽があった。

アコースティックギターの音色と天使のような歌声。

それは、向かいの屋上、中等部校舎の屋上からの旋律だった。一昨日、飛び降りかけたフェンスをがしゃんと鳴らし、瞳を凝らして、天使を探す。

やっぱり、やっぱり、志姉ちゃんだ！

弥恵は手を振った。幼い頃から、脳内で液体窒素に放り込んだクソ兄貴よりも数億兆倍大好きな志姉ちゃんを見つけて途端に嬉しくなる。最近、めつきり道場に来ないから、彼女の姿を見るのは久しぶりだった。昔から、道場で、胴着を着たまま、よくギターを弾いて聞かせてくれていた。懐かしさ、センチメンタル、よく分かんないけれど、そういう感情が押し寄せてきて、涙が出てくる。

志姉ちゃん、気付いて！ 目一杯手を振る。しかし、弥恵に気付く様子はない。

そうだった！

私には武器がある。

弥恵はコルネットのケースを開け、マウスピースをブーブーやって、本体に装着。

志が奏でる旋律に合わせて、アドリブで、つまり適当に、メロディとリズムを吹き鳴らした。

周りにどう聞えているかなんてどうでもいい。

私の音色、志姉ちゃんに届いて！

耳に届くギターの音色に変化があった。飛び込んでくる志姉ちゃんの天使な視線。

下手な弥恵の演奏に、志が合わせてくれているのだとすぐに分かった。志はフェンス際に立って、歌っている。弥恵もフェンス際に立ち、吹き鳴らす。

しょうがないことだけど、弥恵は演奏暦が短いから、勝手に吹きやすい楽曲に指が動いてしまっていた。そっちの方が考えなくていいし、気持ちがいいから。

志姉ちゃんは笑顔で応じてくれる。

弥恵の『聖者の行進』に合わせて歌ってくれる。

澄んだ空気が鼻腔を通り、肺の淀んだ空気が音になって、体の外に消えていく。

空を仰いだ。雲が鳥の形をしている。鮮やかな群青色が鳥を覆っている。最高の天気だ。迷うのは止めにして、コルネットをひたすら鳴らせ、昨日のことは笑い話にすればいいじゃないか、今日の天気はそう弥恵を包んでくれた。

ふと、思い出すのは一冊の手帳。

すっかり忘れてしまっていた。

私が一年前、駅前の伊勢丹で買った重厚な近世ヨーロッパの哲学書のような手帳。気持ちを共有したくて、比呂巳にもプレゼントした、お揃いの手帳。比呂巳が手帳を開いて、何かを書いているなんて、一度きりしか見たことはなかったけれど、確か、唯一のお揃いのもので、私は比呂巳への思いを一年間綴った、大切な手帳。

どこ？ いま、私の気持ちはどこへ行ってしまったの？
純な気持ちも、不純な気持ちも、全部、全部、一緒くたに、そこにあるんだ。

見つけなきゃ、見つけ出さなきゃいけない。

ふと、弥恵の脳裏を過ぎったのはバルチャーズの二人だった。
その瞬間だった。

『死ぬなっ！』

エルと三国が弥恵をフェンスから引き剥がした。

啞然とする弥恵。覆いかぶさるエルと三国は千メートルを全力疾走した風に息を切らせている。どうやら、前科持ちの弥恵が一昨日と同じ飛び降り自殺を決行しようとした勘違いらしい。

「昨日すっごく凹んでたから、もしかしてもしかするかもしれない
って」

「さつき、弥恵ちゃんを呼びにクラスに行ったら、口々に今日遅刻したとか、様子がおかしいとか、自殺しそうな雰囲気だったとか言うし」

「そしたら案の定、屋上じゃないかっ！ このバカっ！」

「弥恵ちゃん、死んじゃ駄目だよ。死ぬ気になればなんでも出来ちゃうんだから。っていうか、死んだら私、泣くからね」

三国が涙ぐんで抱きついてきた。そしてエルももらい泣きしたようになって、

「そうだぞ。お前が死んだりなんかしたら、私も泣くぞ。夜な夜な化けて出てやるんだからな！」と弥恵と三国に覆いかぶさった。

『うわああああん！！』

上級生の二人は勘違いをしたまま泣いてしまった。どうしよう？
この状況、両手に花でとつもないけど、幸せだけど、この二人になんて説明しよう。まずはどうして屋上に来たのかから、……ええいい、もう面倒臭いっ！

だから、このシチュエーションを利用したるっ！

「あ、あの、「弱々しく、おずおずを心掛ける。「エルさんと三国

さんをお願いがあるんですけどお」

『何?』キスできそうなくらい顔を近づけてきてくれる。今なら油田の採掘権もいただけそう按配である。『何でも言つて!』
「手帳を、私の手帳と一緒に探してくださいっ」

【26】

志は陵の『保健室で休んでいけば?』の助言を断つて授業に出席ではなくて第七軽音楽部の部室に侵入して玉姉のアコースティックギターを勝手に拝借し、屋上で弾き鳴らしていた。

保健室で眠っているとロリコン野郎をとちめる気分が萎えるし、こっやって空の下でギターを鳴らしている方が、原因不明の嘔吐感から逃れることが出来た。まあ、お昼までの時間に三回トイレに駆け込んだが。

ともあれ、順調に胃のムカつき、お凸を襲う頭痛は和らいでいった、……気がする。

そんなところで、いいメロディーが浮かんできた。「んむ〜んむ〜んむ〜」ってな具合に歌いながら、ゆっくりと組み立てていく。

そうこうしている内に時間は流れ、曲は脳内ではぼ完成した。詩も産まれていた。

「よししょ、「ギターを構えなおし、じゃらん、「1、2、3、4」と歌い始める。

志には珍しく、ダーティで、ガツンという旋律でなくて、スローテンポで、ちょっぴりジャズテイストの、なんちゃってバラードだった。

不意に、トランペットの音が志の耳に流れてきた。流れてきた先に視線をやる。向かいの、初等部校舎の屋上でトランペットより小さな、確かコルネットとかいう楽器を吹いている女の子がいた。歌を止めずに、目を凝らしてよく見れば、見知った顔だった。比呂

巴の道場で、比呂巴の横にいつもいた、甘えん坊の弥恵だった。

そういえば、道場に通わなくなってから、結構な時期、会っていなかった。志は懐かしくなって、笑みを零した。弥恵は顔を真っ赤にして一生懸命に出来立てほやほやのこの曲にコルネットを合わせてる。

いつの間に、音楽を始めたんだ？

ともかく弥恵の演奏は志から見れば下手くそだった。でも、下手だけれど、外れてはいない。

志は立ち上がり、フェンスに寄り、それに応えるように声のボリュームを上げ、ギターを掻き鳴らす。

曲が再構成される。曲がコルネットの音色を吸い込んで、新しいものに昇華させる。

次第にアップテンポになってきた。しかし、ジャズっぽくて、ゆっくりと進む心地よい疾走感に、志は空に舞い上がったような気持ちになって、

いつしか曲は『聖者の行進』になっていた。

オアシスの『ワットエヴァー』からビートルズの『オクトパスガールズ』に重なり、移行していく感じだった。いや、神様に対して不徳で、言い過ぎだろうが、ともかく、そんな気持ちがいい一曲出来上がった。

テルミンをやらずとも済む名曲が出来上がったのだった。

ふっと志の意識は体に降下した。弥恵のコルネットが止んだからだった。志も弦の震えを止めた。

「？」人が折り重なっていた。なんだろう？ まあ、いいか。弥恵、ありがとう、感謝するわ。近くうちに、コルネットの音色を録音しに行くからね。

【27】

ピアノの正門前のローソンのテレホンボックスが未だ取り壊

されず健在なのは、ピアノネの女生徒たちの間で語り継がれる言い伝えが、その理由だった。

『午前0時のテレフォンボックスから相手のケータイにかけて告白すると、必ずその恋は成就する』

今日もその言い伝えに誘われて、午前0時のテレフォンボックスに一人の女生徒がやってきた。彼女の名前はカノ。中等部の三年、趣味は読書、飾り気のない黒髪と大人しそうな外見は彼女の内面をそのままトレースしたような具合である。カノは慣れないテレフォンボックスに入り、受話器を取り、父親の書斎を漁って見つけたテレフォンカードを挿入させ、ケータイの電話帳画面で愛しのミヤの番号を表示させる。喉を乾かしながら、ミヤのケータイ番号を押していく。

ぶるるるる。
カノはミヤが出るのを待ちながら、カバンから一冊の本を取り出した。まるで近世ヨーロッパの哲学書のような、一見、重厚な本である。それを電話機の上のタウンページの上に置き、とあるページを開く。

そこには彼女を勇気付ける文句が書かれていた。

『きつと、告白を待っていてくれるから』

カノはその本を音楽室の机の中から見つけたのである。中等部の生徒の写真が張られ、その下には詳細なデータが記されていたり、詩のように思いつくままに書きなぐったような文字の羅列であったり、最初は怪しげな日記帳だと思っただけで、特に書かれた詩(?)はカノの心にグサグサと突き刺さった。誰のものは分からないけれど、書き連ねられたある種の自己啓発の言葉は、カノの悩みを、曖昧ではなくピンポイントに突き、カノを動かさせた。

ごめんなさい、誰かは分からないけれど、告白するまでは。

カノは決心がつくまで、その日記帳に勇気を少しづつ分けてもらっていた。

そして、日付が変わった瞬間の、午前0時のテレフォンボックスに満

を持ってカノはやってきた。

『もしもし?』

ミヤが出た。

「……もしもし、ミヤ? カノだよ」

震えた声はゆっくりと愛の言葉を紡いでいく。

【28】

先ほどからローソンの店長（三十代、男性）が業務に勤しみながら、注意を伺っていたのは雑誌コーナーで立ち読みしている、不審極まりない若い女の二人組みだった。めいめい白と黒のフロックコートを着て、キャップを目深に被り、さらにサングラスを掛けていた。これは少なくとも店に小金を落とすに來たことでないことは容易に想像できた。

一体、何をしでかす気だろうか? 強盗か、ついにコンビニ業界に躍り出てはや十年、クレーム含め物騒なことに無縁だった俺に、ついに転機が来るのか?

店長はレジの下の警報ボタンと防犯用においてある竹刀とペイントボールの位置を確かめてから、在庫チェックのフリをして不審者の後ろに気配を殺し、回り込み、彼女たちが一心不乱に目を落とすしている雑誌を確かめ、そこで、店長の脳裏に一抹の疑問が点灯した。なんでエロ本を読んでいるのだろうか? 女なのに、……あつ。

と、そこでリベラルな店長は気付いた。なるほどこの怪しい二人組はレズで、一人じゃエロ本を読むのは気恥ずかしいから、一緒に読みに來たということか。そうだ、きつとそうに違いない。それゆえのキャップにサングラスというわけか。いやはやコレはとんだ勘違いをしていたようだ。危うく、お楽しみに來た二人を御用してしまつところだった。どうぞ、どうぞ、好き勝手読み漁ってください。この調子だと、十冊は買っていきそうな気配がするし。

店長はさすが女子校の前だなぁってな具合に強張つた顔を営業ス

マイルに変え、業務に戻った。

店長は確かに勘違いをしていた。エロ雑誌に目をやる二人は、両方もがレズではないし、エロ雑誌を読みに来たわけでもなかった。いわゆる張り込みってやつである。

白いコートを着ているのはどこからどう見ても志で、黒はどう穿って斜めに見ても陵だった。ピアンネの演劇部に借りてきた季節を先取りしすぎた厚手のコートで体の凹凸を隠し、午後十時にはそぐわないサングラスで覆い、髪の毛をお下げに結んでいても、見る人が見れば容易く、正体に検討はついた。

しかし、二人は完全に変装しきった気で、エロ本越しのテレフォンボックスにジト目を向けていた。テレフォンボックスはローソンの入り口付近、タバコの自動販売機の隣にある。店内の雑誌コーナーから見ると、それが少し影になっていてテレフォンボックスの中の詳しい事情は見えないけれど、人が出入りするのとはつきりと確認できた。

どうしてエロ雑誌なのかは、陵によればカモフラージュということらしい。

「エロ本を見ている人が、よもや張り込みしてるなんて思わないでしよう」

陵は志に気付かれないようにページを捲りながら、テレフォンボックスを見やる。

すでに『媚薬の研究』はタウンページの下に置いておいた。

陵の腕時計の針はそろそろ午前0時を指す。

「志ちゃん、いよいよだけど、」小さく陵が心配そうに言った。「顔色悪いよ、大丈夫？」

しばし寮に戻って仮眠を取ってきたらしいのだが、志の顔色は明らかに青っ白かった。せめてカラーコンタクトとピアスははずしてくればいいのに、と陵は思った。

志は突っ伏すまで十秒前という按配の虚ろな瞳、エロ本を持つ手は力が入らないという風に震えていた。

「大丈夫です……」消え入りそうな声は全然大丈夫そうじゃない。
「志ちゃん、」ここは私が、と言い掛けたところで、テレフォンボックスに変化が見えた。

犯人とは思えない、一人のピアンネ娘が入っていったのである。
それも中等部の少女だ。

「き、きたああああ！」

志はソレを確認すると、雑誌を陵に叩くように預け、テレフォンボックスに足を向けていた。しんどそうな顔だ。それでいて怒りはつきりと眉間に表われている。理性は働いていないと思われた。陵はぶらんぶらんしている志の腕を掴み、耳打ちした。

「まだよ」あの女の子が犯人なの？ いいえ、そんなはずはない。もし、そうだとするなら、「犯人だったらアレを抱えて一目散に逃げるはず。志ちゃん、もう少し待ってよう」

陵が思ったとおり、ピアンネ娘はすぐに『媚薬の研究』を抱え逃げることはなく、つまり志を脅迫した犯人ではなく、ただ電話をしに来ただけのようだった。ほっと胸を撫で下ろしながら、でもどうして、ここで電話を？ ケータイを使ったらいいのに、と疑問だった。まあ、思春期の乙女には様々な事情があるのだろう、私もあったよなと陵は回想して、深くは考えない。

彼女の電話は長かった。いや、うら若き乙女の長電話は付き物だ。一日中話したってしゃべり足りないのだ。そう考えると、彼女の電話は短かったといえる。約二十分間、彼女はテレフォンボックスにいた。そして出てきたときの横顔は、なぜか満面の笑みだった。やってきたときはまるで別人のように、身を悶えさせ、テレフォンボックスを後にしていた。彼女のその後が気になるところだが、さて、ココからである。

きつと、犯人は戸惑っているに違いない。テレフォンボックスに先に入られ、早く出る、早く出る、と額に汗を浮かべていたに違いない。

陵の雑誌を掴む手が汗で濡れていく。さあ、さあ、さあ、来い、

ロリコン野郎！

と、陵が目を血走らせてときだった。

「……せんせえ、」と志が弱々しい声を上げ、袖を引いた。何事？と見やると、志の青っ白い顔にはおもいつきり脂汗が浮いていた。「気持ち悪い……」

陵はロリコン野郎のことは、一旦溝川に放り込んで、膝をついて、志に向き合う。

「ちよつとお、大丈夫っ!？」

志は首を小さく横に振って、

「……ちよつと、吐いてくる」とコンビニのトイレに歩き出した。陵も保健医として介抱しに向おうとしたが、志は「せんせーは見張りを、」と頑なな瞳を向けてきたから、なんとも言えない心境で、つまり、志の言うことに従った。

志ちゃんをあんなに苦しめて、ロリコン野郎めっ！

ロリコン野郎が志の原因不明の体調不良の直接的な原因ではないのだが、そんな義憤が陵の胸に立ち込めた。陵のキツとした瞳が、テレフォンボックスへと向く。

そのときだった。信じられない光景が目飛び込んできた。

「……………嘘でしょ？」

【29】

学生時代の友人と食事に行く。

嫁からそういうメールが来て、藤原は安堵した。今日、どのように深夜に抜け出そうか、その妙案が思い浮かばなかったのである。しかし、そのメールに救われた。さらに幸いなことにその文面にはもしかしたら帰るのが朝方になるかもしれない、と書いてあったことだ。学生時代の友人とはきつと、同性愛の相手なのかもしれない。藤原は嫉妬心に近い寂寥感を感じながら、どうぞ心置きなく、という風な返信をして、さて、午後十一時を過ぎた頃にシルバーの力口

ーラを自宅から走らせた。

コンビ二の駐車場には止まらず、向かいの道路脇に車を止めた。一度、テレフォンボックスを確信してから、外の姿が見えないように背もたれを倒し、藤原は目を瞑った。心に点灯するのは後悔の念まさか、脅迫状を書こうとは……。しかし、仕方なかった。面識のない生徒ならいざ知らず、志とはうげーとか言われながらも心を通わせた仲である。ヴィトンのバックで釣ろうとか、フランス料理のフルコースで釣ろうとか、口封じの術を考えたが、志の顔を思い出すと、彼女は全てを断って、学園中に噂をばら撒くに違いないと思わざるを得ないわけで、結局、脅迫状に落ち着いてしまったのである。

もちろん、脅迫状に書かれたロリコンは志を脅かすための方便である。逆に激昂させてしまったなんて、藤原は露程も思わなかった。ロリコンは女子が最も恐怖する種族だ。ゆえに、いくら志でも言う通りに従ってくれるだろう。藤原の考えは甘かった。

いつの間にか藤原は眠っていた。

そして気が付いたときは、すでに日付が変わっていた。時計を見ると、午前0時二分。

慌ててテレフォンボックスの方を見れば、誰か、ピアンネの中等部の制服を着た生徒がいた。彼女が志でないことは直ぐに分かった。

志の代わりに手帳を置きに来たという感じでもない。今どきテレフォンボックスで電話を掛けている。

藤原は焦った。なかなかテレフォンボックスから出てこないからだ。別段、時間を気にする必要はないけれど、早く回収するものを回収してこの場を去りたかった。

二十分ほど経っただろうか、やっとテレフォンボックスは空になった。生徒が暗闇に消えていくのを待つて、藤原はテレフォンボックスに駆け込み、タウンページの上に開いて置かれていた手帳を持って、脱走するように車を発車させた。

一度、胃の中身を全て吐いてしまうとスッキリした。志は頬をこけさせながらも、ケロツとした顔でトイレから出てきた。瞳に精気がみなぎっている。

「ご心配をお掛けしました」志は所定の位置につき、エロ雑誌ではなく、一般の漫画雑誌を手にした。脳みそが落ち着いてきたので、元来お嬢様の気がある志は、エロ雑誌を一瞥、ぽつと顔を赤らめ、カァーツと湯気をこさえた。

と、なぜか陵はマネキンのような反応で、つまり志の帰還になんら反応しなかった。

「せんせえ？」

陵は考えていた。そして『どうして？』を脳内で連発していた。

どうして藤原が午前0時の、いや正確にはプラス二十五分だけど、いやそんな微細なことはどうでもよくって、どうして藤原がテレフオンボックスに現れ、そこから『媚薬の研究』を抱え、驚愕で呼吸の止まった私の目を走っていったの？ あの人はそもそもホモでしょ？ 脅迫状を送って、ロリコンで、志ちゃんにちよっかい出すってどういうこと？ いや、そうじゃないよ、きつとロリコンはカモフラージュで、……………あの人の目的はあくまで『媚薬の研究』！ でも、何で、あの人媚薬なんて……………。

そこで陵は思った。……………もしかして、あの人？

「せんせえつてばー！」

「あつ、あつ、志ちゃん、」陵は気が動転していて、今の今まで志が自分との壮絶な戦いから帰還してきたことを気付いていなかったようだ。「もう、脅かさないですよ」

「そんなつもりはさらさらありませんでしたよっ」

「ああ、そうね、ともかく、」陵は大きな深呼吸を一回。「気分はどう？」

「はい、随分と楽になりました」

九時間の睡眠から目覚めたように声に艶と張りがあつた。

「そう、……………で、もう帰る？」出来れば志にはココで頷いて欲しかった。藤原のことを志にしゃべれるはずはない。まだことの真相が掴めていないし。「ま、まだちよつと顔が青っ白いし、本調子ではないでしょ」

「なあに言つてんですか、これからじゃないですか、コレはパーティーですよ」喧嘩に飢える獰猛な顔付きに、陵はそれ以上帰る宣言を申し立てられなかった。ごねても、『そんなに帰りたいたならせんとだけ帰ればいいじゃん！』って怒られそうだった。「それより、変化なしですか？」

その問いに、今度は陵が顔を青くした。精一杯気丈に短く答えた。

「……………なかつたわ」

「そうですね」

陵の態度が、そわそわと落ち着きがなく、じとじと顔面に脂汗を掻いているのが、志は少し変だなあとと思ったが、陵がココで嘘を言う必要も理由もなければ、まさか嘘をつくなんて志は全く思っていないので、普通に陵の嘘を疑わなかった。

そして、新たなテレフォンボックスへの来訪者が現れぬまま、すでに午前一時になつた。

「……………来ないですね」

「う、うん」

現われるはずはないのだ。すでに藤原がやって来て『媚薬の研究』は持ち去られてしまっているのだから。ここにこうしていても仕方がない。「……………もう帰ろうか」

陵は提案した。

「そうですね」しびしびと、志は頷いた。瞳もとろんとして眠たげだった。でも、しっかりと頭を回るらしい。陵が一番言つてほしくないことを抜き取りなくおしゃつたからだ。「じゃあ、アレを回収して帰りますかあ」

「だっ、駄目よ！」

陵は癩癩を起こしたように声を張り上げた。立ったままいびきを掻いていた店長も目を覚ます。

「……………」訝しみが込められた反抗的な瞳が痛い。「どうしてですか？」

もしテレフォンボックスにアレがないのが知れたら、私が嘘をついたことがバレちゃうでしょ！

「私たちが帰った後に、ロリコン野郎が取りに来て、もしアレがなかったら、ロリコン野郎は激怒して、志ちゃんをロリコンしちゃうかもしれないでしょ！」

「大丈夫ですって、私はそう簡単にロリコンにロリコンされませんから、それに、」全く危機感とか、恐怖心とか抱いていない様子で、陵の肩をポンポンと叩く。「私を志様と呼んでくれる二人の親友がいますから。いくらロリコンでも、三人娘には手を出せないでしょ」

その軽薄なものの考え方とか、勢いで突っ走っちゃうところとか、根拠の薄い自信とか、思春期丸出しの志の姿は、陵の双眸にはとても魅力的に映った。眩かった。許されるならばお持ち帰りしたかった。でも、でも、今欲しいのはそれじゃないんだよ、志ちゃん。

「でも、相手が三人男だったら？ 簡単に陵辱されちゃうわよ、そんな志ちゃん嫌よ！」

「みすみす『媚薬の研究』を献上することの方が絶対嫌ですっ！アレを回収しておかなきゃ、ロリコンをこらしめる手立てがなくなっちゃう」

「そんな意地よりも、自分の身の安全を考えなさいって言ってるの！ 女の子の貞操は男の童貞より数億兆倍大事なんだからっ！」

「せんせーだって、やる気だったじゃないですか！ 今さら意見を翻さないで下さいよ！」

「意見が変わったのよ、志ちゃんの身の安全が、私の最優先事項に認可されちゃったの！」

「ふんっだ、せんせーも、フツの大人って奴だったんですね。見損ないました」

なんと心無い、悲しすぎることを言う。それはレズで保健医の陵の胸にグサツと突き刺さった。今にも泣きそうだった。

志は慌てて、「じよ、冗談ですよ」と謝る。

「冗談でも言っていていいことと悪いこともあるよお。私、志ちゃんは知らないと思うけれど、ゆとり世代と真ん中の教育を受けてきたから、ナイーブなの、繊細なの、ガラスなの。思ったことを真綿に包んで発言してくれないと、せんせー泣いちゃうよ」

「せんせー、言わせてください。……ゆとり世代に胡坐を掻いて、ゆとりと言えなんでも許されると思ってるませんか？」

陵の顔が一瞬凍りついて、二秒後に氷解して、なんだか人間性が面倒くさくなった。

「真綿に包めというのにつ！ 志ちゃんってばっ！」

コレがゆとり教育の弊害か、志は仰け反った。だからと言って意志は曲げるものか。

志は陵の隙をつき、踵を返し、ダッシュした。

「あつ、待ちなさいッ！」

陵も慌てて追いかける。が、十四歳のすばしっこさに保健医が叶うはずもない。志はテレフォンボックスに駆け込んで、すぐに『媚薬の研究』を抱えて出てきた。

「……………えっ？」

なんでソレが？

そんな思案顔の陵を残し、「じゃあ、せんせー、また明日っ！」と去っていった。

第五幕

【31】

翌日、綾は志の様子がどうにもこうにもぎこちない事に気が付いた。ゲームに参加せずだったり、エルとエアロバイクで不毛な争いを繰り広げているし、コレは京子には内緒だけど一昨日のゲーム中に過剰なスキンシップを要求してきたし、この頃、知らないところで志はコソコソと何か企んでいることには、綾も京子も気付いていたけれど、特に今日はそれらがただの気のせいだと切って捨てたくなるほどに、志は無理に強情な表情でそわそわしている。昼休みも二人を置いてどこかへ行っていたし……。

「つわりかしら？」

「京ちゃん、冗談でもそういうこと言わないで！」

京子と綾は例によって百合の花、ではなくコスモスが咲き乱れる花壇の横の枯葉を集めていた。いわゆる、放課後前のお掃除の時間だった。

「知らない？ 志様には仲のよろしい幼馴染の男子がいるのよ」

「……ソレ、本当？」

「本当と言ったら嘘になるわね、コレは嘘よ」

「京ちゃん、私の不安を煽って楽しんでる？」

「そんなことないわよ。ただ思ったことを口にしただけ」

「なるべく私の耳に入れないで下さい」

「名前は確か、リュウ、だったかな」

「きこえない、きこえない」

綾は人差し指を耳栓にして、京子に背を向け、遠くにいる志に視線を注いだ。

京子は五十メートルほど離れた花壇に腰掛け座っていた。箒を抱くようにして、思わせぶりに地面を見つめていたり、誰かが側を通

るたびに怯えるようにビクついていて、らしくなくて、まるでそういう悩みを抱えている十四歳に見えないことも……、「
「って、そんなわけあるわけない！」

綾はナイトメアを振り払うようにかぶりを振った。

志様は、将来、私と同棲婚を遂げる予定だ。この国では日本よりもひと足早く、同棲婚が認められていた。政府公認、つまり、誰も後ろ指差す権利なんてない。志様との距離はまだまだ遠いけれど、高等部上がる頃には、大学に進学する頃には、社会人になる頃には、きつと……。

そんな風に悶々としている綾の肩に、京子の手がポンと置かれた。

「そんな風に気に病まないの」

「京ちゃんってば、全てを知った風に言うのね」

「まあね、綾ちゃんよりは志様との付き合いは長いし、同室だし、そんなことはないと検討がつくし、志様はそんな思い切ったことが出来る性格の持ち主ではないし」

「じゃあ、京ちゃんは今日の志様のふわふわとした雰囲気はどう思っているの？」

「それは、京子はもったいぶるようにタメを作って言った。「正直言って分からない」

「結局、私と同じじゃない。幼馴染の男子との不純な関係を妄想してしまった私と同じじゃん」

「情動に理性を乱されている綾ちゃんとは違うわよ」

「はいはい、私は冷静沈着で、理論武装でフルアーマーな京ちゃんとは違って、ヒステリックでパラノイアですよーだ」

「綾ちゃんのそういうところは好感が持てるわ。好きよ。もし志様との恋が上手くいかなかったら私たち、付き合いわない？」

意表をつかれたプロポーズ紛いの京子の言葉に綾の顔は一気に真っ赤だった。

「そういうことさらっと言わないで！」

確かに志様がいなくなってしまうたら、綾は京子しか本当のこと

を話せる人はいなくなる、っていうか、今だってその状態には変わらない。そう思うと、京子の存在が大きく見えてくるのは事実だった。

「あら、振られちゃったかしら？」

「そそそそそそういうことじゃなくて、」

綾はきよどつていた。まさか振る振られるの関係を、京子の方から誘ってくるなんて思わなかったから。それに、それに、もし付き合うとしたら、京子は彼女として申し分はないから、もしを考えてしまっ。

京ちゃんがレズなのは周知の事実だし、ハードルは確かに志様より低いと思われるし、京ちゃんってばこんな風に私が喜ぶようなことをサラツと言うし、鈍感な志様と違って、私の気持ちに気付いてくれたのは京ちゃんだし、ともかく京ちゃんは美人さんだし……、

「って、それは、それは、ほんとっーに、最後の手段だからね！」
「嫌われていないようでよかったわ」

その笑顔に傾きかけたなんて絶対言わないけどね！

「まあ、そんな冗談はこのくらいにして、」

「冗談だったら言わないでよ！」

「あら、本気だった？」

「もついい！」ぷいっと綾は可愛い子ぶった。少しでも意識し始めてしまったから、もう戻れないじゃないか。情愛を引っ込めることなんてできないじゃないか。

「冗談でも綾ちゃんが最後の手段でも認めてくれたことは嬉しいわよ」

「……そう」そっけなく言ったけれど、愛されるって素晴らしいとポツカポカしていることは内緒だ。「ともかく、もう冗談って言葉は禁止！ 紛らわしいから」

「そうね。なるべく平易な文体を心掛けるわ」

「それがもう分かりづらいもの」

「そういえば、何を話してたんだっけ？」

「京ちゃんが、私のことを冗談でも好きだなんていうから跳んじやいましたっ」

「冗談禁止、でしょ？」

「京ちゃんが冗談言うのが禁止なのっ！」

綾の悶々とした苛立ちを「まあまあ」と宥めながら、「あっ、思い出した」と京子は思い出したようだ。「私と綾ちゃんは持っているカードが違うっていう話をしてたんだよ」

「そんなこと言ってた？」少なくとも、カードなんていうメタファは聞いた覚えはなかった。というか、「それ、メタファー？」

「メタファー？」

「比喻表現って意味だよ」今日の国語の時間に教師が自慢げに言っていたから覚えている。そういえば、京子はその時間、綾の背中を影にして少女マンガを読書していた。

「へえ、綾ちゃんってば哲学者みたいな言葉を使うのね」

「常識でしょ」

綾はここぞとばかりにえっへんと胸を張る。少し高尚な気分浸る。「でもカードっていう言葉自体に私が綾ちゃんに伝えたい意味がすでに含まれている可能性も無きにしても非ずだから、その辺りは金田一先生の辞書に当たらないと分からないけれど、メタファーっていう単語はココで使う場合は少しズレてるかも、と思いますな。まあ、そんなつまらない議論は高給取りの大学教授たちに任せて、ともかくもつと有意義な議論をしましょう」

綾はメタファーの本質を一瞬で看取した雰囲気京子におよよとたじたじである。

「さて、さっそく私のカードを綾ちゃんにさらけ出しましょう」

綾はメモでも取りそうな按配で京子の声に耳を傾ける。

「朝、志様は普通に、むしろ今まで経験してきたどんな朝よりも志様は気分良く起床され、朝食もいつもより大目に取りられた。つまり、志様の本日の不穏さは、朝以降のことに起こったなんらかの事象によることと思われます」

「ふむふむ」

「そこで綾ちゃんに聞きたい。綾ちゃんは昇降口で私たちを待っていた。そして合流したとき、志様から違和感を感じた？」

「うーん、感じなかったに八十パーセントかなあ。普通にお美しかったもの」

「それでは昇降口からホームルームの間は？」

「うーん、半々くらい？ いや、もう六十パーセントはおかしかった気がする。手汗が凄かった」

お手々を繋いで歩くことは友達なら普通のこと。そのときに感じた手汗の量は、メタファーするなら、紅茶から引き上げたばかりのティーパックを握り締めた感じのあのひたひた感。まあ、普段から志の手は湿っていたから、そんなには気にならなかったのだが、ともかく今朝の汗の量は半端ではなかった。

「そうなの。昇降口を経てから、志様は明らかに態度を豹変なされた。つまり、そこで何かあったのよ。私たちと一旦分かれたときに何かあったのよ」

ピアノネでは下駄箱は学年ごとの番号順で決められている。つまり、アで始まる志と、ひとペで始まる京子と綾の下駄箱の位置は、扉五つ分離れていた。ゆえに、その間に、志の身に何かあり、京子と志が気付かなくても不思議ではない。

「どう思う？」

綾に振る。京子はすでに推測をし終わった表情で、一応聞いてみるという感じに綾に目を向けている。綾は「うーん」と考えた。遠くの志の佇まいを注視してみる。アレは、あの雰囲気は……、きつと下駄箱で起こったメタファーだ。

下駄箱で起こること、まあ、考えたら、ソレくらいしか思いつかない。

「ラブレター？」

「そうよ」京子は頷いた。「あるいは、ラブレターに近い何かね」

「でも、」と綾は反論した。「ラブレター的な手紙なら、志様はフ

アンレターとか、一杯もらっているでしょ？ 私もことあることに気持ちを書いたお手紙を書いているし、」

今さら、あんな風になるのかしら。

「ファンレターとラブレターは違うわよ。それに綾ちゃんのはラブレターじゃなくて、ポエムじゃないの。超個人的な愛を無理矢理メタファーで着飾った抒情詩。私は綾ちゃんの気持ちを知っているからなんとなくは読めるけれど、志様はいつもポカンとして『あーやのポエムはノストラダムスの予言書みたいね』なんて言ってるわ。アレじゃ慈悲深いマリア様でもお手上げよ」

「だって率直な気持ちを書いたら恥ずかしすぎて死んじゃうもの！」

「ヘタレねえ」

「京ちゃんだって、」

「ええ、綾ちゃんが言いたいことは分かっています。私もヘタレだつてことは自認しておりますよ」

そうニンマリと開き直られると、追い討ちを掛けられなくて、惨めな気持ちになる。だって、京ちゃんはヘタレなんかじゃないから志様という壁が高すぎるだけなんだ。その気になれば、京ちゃんは彼女の二人や三人作ってしまえる度胸の持ち主だつてことは、私が一番分かっている。

京ちゃんはいつだって、私みたいにうじうじせずに、アクティブだ。

「もし、もしラブレター的な何かだとしたら、誰かな？ 相手は？」
なんて風にしどろもどろになる綾とは対照的だ。

「少なくとも志様があんな風になっちゃうほどのお相手であることは間違いないということは言えるわね」京子はそう言っただけだ。
焦りみたいなものはないのかしら？

「綾ちゃんと一緒に焦ってるわよ」
本当かなあ。

「それにさ、綾ちゃんがいるからなんとか冷静だけどね。私、かなり怒ってるよ。どうして志様は私たちに相談もしてくれないのかし

らつて。ああ、水臭い。私たちの気持ちに気付いていないのなら、せめて相談くらいしてくれてもいいと思わない？ もしラブレターをもらったのが本当だとして、あまつさえ志様が傾いているのだとしたら、私はきつと怒りくるって綾ちゃんをめちゃくちゃにしちゃうかもしれないわ」

「……あはは」汗が出た。京子の瞳は静かに煮えたぎっていた。「お手柔らかにお願いします」

「まあ、考えても予想できるのはそれくらいよね。勝手に怒っていても仕方はないし。結局、志様から事情を聞きだすしか、私たちがスツキリとする方法はないということ」

「うん。でも、志様が素直に話してくれるとは」

二人は、志の方向を向いた。志は相変わらず、数学の問題を何回も読み返しているような思案顔だ。唇は施錠されたようにきつと結ばれている。

「これはもう、」

京子は何か企む目をした。「クーデターしかないわね」

【32】

時は本日の昼休みにまで遡る。陵は窓際の白百合を突つつきながら、気持ちの整理がついていなかった。

藤原は一体何を考えているのだろうか？

陵の横顔は、物思いに耽っている、まさにそんな感じだった。

何気ない会話は出来る。その何気ない会話がせわしいことも、レスでも、女だから分かってしまう。

でも、『媚薬の研究』のことは聞けなかった。陵の推測はこうだ。

『媚薬の研究』はもともと、彼のもので、それがどうしてか分からないけれど図書館に置いてあって、姉妹百合をしたくなつた志が偶然それを手にしてしまった。藤原は図書カードを調べるか、志が『媚薬の研究』を小脇に抱えているのを目撃して、あんな節操の無い

文面を送りつけて回収に及んだ。

しかし、藤原の手元には『媚薬の研究』が渡っていない。それは確かだ。彼の態度から、仕事をやり終えたようなほっという安堵感を見出すことは出来なかつたし、どちらかというところ、原発のプロジェクトが暗礁に乗り上げたような深刻さが窺えた。

陵は昨夜の自分の眼を疑っていた。どう記憶を引き出してみても、藤原が陵の目の前を走り去ったときに抱えていたものは『媚薬の研究』の装丁をしていた気がするが、突然のことで神経回路に齟齬が発生したのかもしれない。藤原はきつと慌てて手帳の上のタウンペーじを持って逃げたのだ。テレフォンボックスに現われた少女に、藤原は出鼻を挫かれたに違いない。陵は、無理矢理そう解釈をつけた。

それはそれでいい。それはそれでいいのだ。

陵の問題は、藤原がどうして『媚薬』を作ろうとしているのか？ 気になるのはそればかりだった。

あの真面目な藤原のことだ。浮気なんて考えられないし、まあ、同僚の森川とよろしくやっていたことは知っているが、もう深い関係ではないと藤原は言っていた、多分、好みの男の子をたぶらかす目的での『媚薬』ではない気がする。それは希望だろうか？ 嫁としての希望であることは間違いない。でも、そうだと思つ。嫁としてそう信じなければならぬ。彼が私に真摯に向き合ってくれようとしていると信じたい。そのため『媚薬』であると、陵は信じたかった。

ふと、陵は完成間際の媚薬のことを思い出した。昨日のごたごたで、トリユフどころではなかつたが、まだ志から受け取っていないことに気が付いた。

そして、……媚薬になんて頼らなくなつて、と当たり前前のごたごたを思つた。私たち、二人の関係は二人で何とかできるはずでしょうか？ 志ちゃんと玉ちゃんみたく子供で、姉妹でもないじゃない。私たち、大人で夫婦じゃない。

でも、……………人間だもの、おクスリに頼りたくもなるさ。

そんな、みつを、みたいなリズムで考え込んでいると、カラカラと扉が開き、例によって志が入ってきた。「せんせいっ！」

赤い顔をしていた。もちろん、ラブレターをもらって恥らっているという感じでは決してなくて、カツカと義憤顔。志がココに来るようつといったら、エアロバイクと媚薬と……、もしかしたらラブレターを貰っても陵に相談しに来るかもしれない。ともあれ、志は陵の眼前に逮捕状よろしく、広げて見せた。

脅迫状だ。志の怒りは脅迫状へ向けられていた。

『昨日の愚行は頂けないなあ。下手なポエムなんて渡して、僕に楯突く気かい？ 僕は怒っているんだ。君には制裁が必要だよ。賽は投げられた。君が僕に投げさせてしまったんだ。ロリコンを甘く見るな。ソレを手放さない限り、僕は君にロリコンし続けてやるからな』

陵は、やっぱりと顔をしかめた。案の定、藤原はまた脅迫状を送りつけてきたのだ。《ポエム》の意味は良く分からないけれど、とにかく藤原はまだ諦めていない。

そんなに《媚薬》が欲しいの？

陵はなんだか泣きたくなつて、志にしつこく脅迫状を送りつける藤原が分からなくなった。でも、陵は藤原がロリコンではないと知っている。

脅迫状の主が藤原と知った今、志の身に危険は、……………多分、ない。

この文面から藤原が苦心しているのが良く分かったから。

しかし、もちろん、志にそのことが分かるはずもないだろう。

「せんせいっ、協力してこのロリコンをとっちめましようっ！」

好戦的に眉は釣り上り、ブルーのカラーコンタクトレンズはギラギラと真っ赤に染まりそうな按配だった。

そして、『せんせいならきつと協力してくれる』という視線が居た堪れなかった。

志ちゃん、ごめん。この件ばかりは、無理なんだ。

【33】

クーデターの気配。それを志は感じ取ることが出来なかった。

京子と綾が嫌にニヤニヤと、文句も言わずに掃除を執り行い、さつさと志を置いて先にどこかへ向ってしまったのにも関わらず、その不遜な気配に気付くことはなかった。

なぜなら、志はロリコンのおぞましい欲望でたぎった雰囲気アンテナを張っていたからだ。

京子と綾の欲望は、限りなくロリコンに近いが、犯人は女ではない、というフィルターが志の判断を鈍らせた。

だから足元に注意が及ばなかった。

志は今、顎に指を当てて、背後に神経を集中させ、草笛寮を歩いていた。自分の部屋二〇一号室に辿り着く。手はすでに伸びていた。ドアノブを回す手は伸びていた。緊張は緩み出す。

部屋に志の足が伸びる。ロングスカートが張り付いた、細い足だ。肩が部屋のゆつたりとした空気に触れる。鼻腔をつくのは、志の匂い。それに混じって京子の匂い。長い間で染み付いた、濃厚な匂いだ。志の五感は一瞬も鋭く敏感だった。鼻が利いた。トリュフの匂いに一瞬で惑わされてしまったのには、そういう理由がある。その鼻は一瞬、何か新しい濃い匂いを捕らえていた。その場にいなければ発生しない、息の生な匂いだ。その匂いに覚えがある。

あーやだ。

志は京子の吐息も察知した。二人は先に部屋に来ていたのだろうか？

でも、部屋には誰もいないのに……………。

志は左右をゆっくりと見回しながら、匂いの女を捜した。もちろん、志は無意識的に匂いを処理して、生活を送る上でかかせない二人、ブラジャーのような京子とパンツのような綾がいなくなっ

とに今さら気がついて、少し裸な気分でキョロ目をしたのである。

しかし、二人の姿は志の視界になかなか入ってこなかった。

そんなことよりも、志の視線はふっと一気に降下した。

「わっ!？」

足元に何かが引つかかった。ロープの感触だ。そして、志の倒れかけた体はそのままふわっと浮き上がった。エレベーターが高層ビルの最上階に着いたときのような血流が滞るような感覚。天井に頭が近い。

志はどういうわけか、アスレチック広場の頑丈なロープに包まれてしまっていた。

そして、きよんとしてから、一言。

「ココから出せっ!」がなり、瞳が狂ったような形になり、ジタバタと暴れる。咄嗟に思ったのはロリコンのこと。ロリコンの罠に引つかかってしまったのだということ。自分の失態を悔やんでいた。そうだ、狙われるなら、真っ先に自分の部屋じゃないか!

しかし、志のがなり声に反応したのは、京子と綾だった。

『コレから言う質問に全て、正直に答えてくれたら解放してあげますよ。志様』

完璧に口調を合わせて、言葉の主の二人は志の前にすべり出てきた。京子と綾はどうやら今の今まで扉の影に隠れていたようだ。あまり見せない高圧的な視線が注がれ、志は捕虜になった気分だった。いや、この状況はどこからどう見ても、すでに捕虜だ。

けれど、ロリコンでなくて安心した。自分に罠を掛けたのがロリコンではなく、優しい親友二人であることに安心した。

でも、どうしてこんなことするの? 質問って……何さ?

「志様はただ、答えるだけでいいんです」綾が申し訳なさそうに、スカートの前で手を重ねながら言う。「いいですか?」

「コレ、なんの遊び? あーや、早く放してっば」

どうやら、志は自分が置かれている状態が良く分かっていないようだ、と二人はアホな子を見るような目で志を見て宣言した。

『志様、コレはクーデターですよ』

「はあ？」クーデターって、王政復古に、テルミドルに、三越事件の、あのクーデター？

「志様、私たちに何か、隠し事をしていませんか？」

ギクツ。志はあからさまにギクツとした。

あつ、あからさまにギクツとした、と京子と綾は確信を強めた。

このクーデターは正義であることを。

「かかかかかか隠し事なんてしてないんだからねっ！」

志は少しツンデレっぽく慌てた。金髪をツインテールに仕上げれば完璧なツンデレの出来上がりだ。

「つまり、してるんですね。水臭いですよ。隠し事なんて」

「志様のお見苦しい姿は見たくないんです。どうか、正直に私たちに話してください。発狂したり、発熱しませんから、……自信ないですけど」

京子と綾、二人の脳裏にはラブレターの五文字がピカピカに点灯していた。すっかりお見通しですよ、とばかりの目をしている。

まあ、それは勘違いであるし、志にはどうして綾が発狂したり、発熱したりするのか良く分からなかったが、ともかくすっかりとバレてしまっているらしい。志の下着のような二人は、分かっているらしい。

何を？ きつと全てだ。志はそう思った。でも、洗いざらい話してしまうなんて出来ない。

だって、今朝のロリコンの手紙のことを話してしまったのは、媚薬のことも話さなければなくなる。テルミンが嫌で、実の姉に媚薬を盛って、修羅場を掻い潜ろうとしたことを話さなければならなくなる。軽蔑されてしまうだろう。事実、陵は一瞬軽蔑した。どういふことだか、すぐに協力体制を強いてくれたが、陵に媚薬を盛ることを話したとき、一瞬だが蔑まれたのは確かだった。二人の親友にそれをされるのはどうしても避けたかった。「……………」

嫌

おねしよで描かれたオーストラリア大陸をガン見されているような気分だった。志は両手で顔を覆って、呻いている。

ああ、コレで私は二人に愛想をつかされてしまつかもしれない。でも、でもね。全部玉姉のせいなんだよっ！

テルミンなんだよっ！

そんな風に言い訳をこねくり回している志に構いもせず、二人は真剣に読んでいた。

はじめ、嫉妬心をギラギラと背負っていた二人だった。どうやって破談させてやるのか、その気持ちもなきにしもあらず、だった。が、読み進めるうちに、二人は次第にポカンという顔になり、むむむつと眉間に皺を寄せたりしながら、最終的になんだか怒った風にキツという顔を志に向けて言い放った。

志の杞憂と裏腹に、二人は志が大好きだった。

『どうして黙っていたんですかっ！』

「へっ？」志は要領の得ない顔で、なにやら獅子奮迅の勢いの京子と綾を見つめる。

「志様がロリコンに付け狙われていたなんてっ！」

「許せない！絶対に許せませんっ！殺すべきです、ロリコンなんてっ！」

メラメラと戦闘的な二人は志を解放しながら、俄然ヤル気であった。

ロリコンを抹殺する気だった。

ベッドに座り、ロープでついた足の痕を擦る志に二人は聞いた。

『そもそも、どうして、ロリコンにロリコンされそうになってるんですかっ！』

「えええつと、」

志はもう隠し通すことは出来ない、全てを二人に話した。《媚薬》のことも洗いざらい話した。案の定、姉に媚薬を盛ると言ったら、二人はジト目を向けてきたが、そのジト目の意味は、『もう、志様ってば、』という、もうしょうがないんだから、の眼だった。

二人は志の性格を熟知していたから、今さら志が《媚薬》という怪しげなツールに手を出したところで驚かない。

ココで、三人は結託した。ロリコンを捕らえるために結託したのだった。

志はなんだか嬉しくなつて、二人を両手で抱きしめて、そのままベッドに押し倒した。

京子と綾はなんだか幸せになつて、優しく笑つた。

さて、じゃあ、どうやってロリコンを捕まえようか。

三人はキャツキャウフフしながら、話し合った。その結果、

『ここに誘い出して、縛り上げる？』

そのために、《遺失物拾得欄》を利用しよう。そういうことになった。

第六幕

【34】

貯水湖の周囲には、一面天然芝が広がっていて、ピアノネの生徒たちの憩いの場となっている。

放課後の湖畔には、夕日が反射してぼんやりと哀愁が漂う。

その水面に目を落としながら、エルと弥恵の二人は紅く染まったクヌギの木を背にして、寄り添い合うように座っていた。いや、寄り添うというよりは弥恵はエルに後ろから抱かれていた。

出会ってから、すでに一週間以上経っていて、二人はいつの間にかやら抱き抱かれる関係になっていた。バルチャーとして幾らか共に出撃したし、風呂で何回互いの裸体を拝見したか知れないし、弥恵は暇が出来ればエルの元に訪れていたから、次第に、自然とこんな風になっていたのだ。

もちろん、エルにあんなことやこんなことしたいだなんていう、やましい感情はない。ただ、出来の悪い妹が出来たような感じだった。ほっとけない。それに抱き合うなんて、女同士だから、普通だろ？ そんな按配である。

一方の弥恵はもうちょいっと関係が進展したような気になっていた。あと、もう少しでエルがロザリオを渡してくれるかもしれないなんて思っていた。そんなアニメみたいな制度は、ここピアノネには存在していないのだが。

ともあれ、弥恵がエルに頻繁に会いに来る理由は、会いたいという理由以外にあった。合理的で、言い出すことに勇気のいらぬ理由だった。

とどのつまり、弥恵の手帳はまだ見つかっていなかったのだ。

エルは手帳を探すのに手伝うと約束した。盗撮の記録がつぶさに書かれていると思われる手帳だ。思われる、というのは、エルは弥

恵に手帳の詳細を聞いていなかったからだ。エルは天秤に掛けた。弥恵の盗撮の罪と、弥恵がエルに見せる計り知れない謎の魅力だ。エルは弥恵の魅力がズドンと重いと確信した。盗撮あり気で、この十歳の勢いは利益だと認めた。

エルが弥恵に会う理由はソノ魅力だ。この一週間、弥恵はエルを大いにゾクゾクさせてくれた。まあ、ソレばかりではないけれど、こうして弥恵を抱きかかえているのはそういうことだった。そうしていると、ずーっと生まれたときから一緒にいたような気になるから不思議だった。凹凸がガツチリフィットした感じで安心できる。弥恵はエルにとってかけがえのない十歳になっていた。もちろん、ハズいから口に出しては言わないけれど。

「もう見つからないんじゃないか？」

「……諦めろつてことですか？」

弥恵は湖畔を睨んだ。

「……諦められないよなあ、」手帳の大切さをエルは重々理解していた。弥恵はそれで死のうとしたり、死のうとしたり、死のうとしたりしたのだ。「諦められるわけじゃないよなあ」

弥恵はエルのない胸に後頭部を押し付けてくる。そして、ぐずるように「うー」と唸って、エルの細い指に自分の指を絡ませてくる。まるで知恵の輪をもてあますような具合だから、エルはそのセックスパールに気付くことはない。

けれど、そういった男女の……、女同士の間微に聡い燦獄三国は薄々、というか、出会った頃から弥恵はそういう子なんじゃないかと気付いていた。だから、

「何、二人でレズレズしちゃってんのっ！」

と三国は二人の愛撫の背後に声を掛けた。全く、三国の登場を想定していなかった二人はビクリとなって後ろを「んあー」と窺つて一言。

『レズなもんかっ！』百合ですよっ！百合！それは弥恵が必死で心に留めた意見である。瑣末なことが紛争の引き金になりかねな

い今日この頃、百合かレズか、そういった瑣末なことは弥恵の中では重要だった。が、カミングアウトの準備が出来てない弥恵はぐくぐくと堪えた。

いつか、三国先輩もこちら側に……、なんて思いながら。

その三国先輩は二人の隣に腰掛けた。さっきの言葉と裏腹に、まるでレズレズするように、エルと弥恵に密着する。

三国は別段、レズかレズでないかのこだわりはないようだ。と、そんなことより、エルは気になった。

「今日は勉強するからって、早く帰ったんじゃないのか？」

「そういう予定だったんだけど」

「明日の数学のテストはなくなったのか？」

「いいえ、なくなってないんだけど」

「じゃあ、もう磐石なのか？ そのテストは一晩掛けて勉強するほどこでもないって判断したの？」

「そうじゃないよ。テストの予定も難易度も、私の数学に対しての免疫もなんら変わっていないんだけど」

やけにきざっぱく話すので、エルは、なんだよお、と少したじろぐ。その懐の弥恵がキャツキヤと言う。

「三国先輩、私に会いに来てくれたんだ」

「まあ、そういうこともね」

「うれしいっ！」 弥恵はエルのまな板から、三国の桜餅ほどの胸に乗り変えた。エルはなんだかおもちゃを取られたような顔で、くやしくないもんと強がっている。それを見ながら弥恵はうしし顔だ。

そんな、うしし顔に三国は一枚の用紙を広げて見せた。

「もしかしたら、弥恵ちゃんを探している手帳って、近世ヨーロッパの哲学書みたいなのなの？」

三国の手にあつたのは第一新聞部の発刊する『ピアノネ日日新聞』だった。外見はニューヨークタイムズのようなタブロイド紙。中身は専らピアノネで起こった規模は小さくとも奇想天外な事件の数々。生徒数が多すぎるピアノネにおいて、ネタがなくなる、なんていう

状態は起こらない。だから、巷で言う学校新聞を日刊で出しても、内容が軽くなるなんていうことはなかった。その新聞はもちろん無料配布で、各玄関入り口に毎朝ズドンと投下されている。

別段、三国は熱心な読者、というわけではないのだが、今日はたまたまクラスメイトと一緒に新聞を読んでいた。そしてそれを話の種に笑い合っていた。笑い合っていたところ、ふと、新聞というもののはさまざま機能を持っていることに気が付いたのだ。

それは《遺失物拾得欄》。簡単に言うと、こうこうこういう落し物を拾いましたので、心当たりのある方はここに来てください、ということが書かれている欄だ。

さて、十月十五日付けの新聞、その《遺失物拾得欄》には何が書かれていたのか。

遺失物はかなりあった。腕時計に傘に携帯電話にブラジャーに壺。三国は紙面のとある場所を指で差した。アイドルポスターとプラモデルの間、そこにはこう書かれてあった。

《十月一日、外観はまるで近世ヨーロッパの哲学書のような書物を取得。心当たりの方は草笛寮二〇一号室の豹然まで》

【35】

志に第二の脅迫状を送りつけて一週間、藤原はなんのアクションも取れずにいた。比呂巳に教師の威厳を保つために、十四歳の少女をロリコンするなんてバカな話だし、藤原はロリコンでもないし、女子をみてムラムラするなんてここ数年なくなっているから、そんな事件じみたことを起こしようがない。だからと言って、他に『媚薬の研究』を志から、それとなく奪い返すなんて巧妙な手段、思い浮かばなかった。

だから、藤原は放課後の職員室でコーヒを啜りながら考えていた。

「比呂巳は俺がホモセクシユアルであることを知っている。それは滅茶苦茶恥ずかしいことだ。生徒と教師の禁断の愛よりも、ある意味で禁断ではないのか？ 今さら手帳をなくして比呂巳に対しての威厳が傷つくくらい大したことはないんじゃないか？ それに、比呂巳は最強だ。最強の娘だ。手帳ぐらい、許してくれるはずだ」

そこまで考え、ふと、比呂巳の言葉を思い出す。

「大切な人からもらったものだから……」

そうなのだ。歴史の年号が羅列された宿題のノートとは違うのだ。なくした、なんてとてもじゃないが……。

ふと、そんな藤原の目に留まったのが、隣の席の森川が広げている『ピアンネ日日新聞』だった。この新聞は、普段の生徒の本性をあまり知ることの出来ない教師たちの間で人気が高かった。この学園の生徒は教師に教師以上のものをあまり求めないから、生徒たちの動向を追うためには、その新聞は欠かせなかった。それに、第一新聞部の精鋭たちの記事は笑えた。彼女たちの文章には基本があつて、ユーモアがある。現実逃避には丁度いい。

藤原のもの欲しそうな目線に気付いたのか、森川が一瞥くれて、「読む？」と畳んで差し出してきた。

「ああ、すまん」

「この頃、君の目は生きながら死んでいるようだけど、何かあつた？」

灰色のスーツの上に白衣というピシツとしたいでたちの森川は鋭い微笑を浮かべている。まだ、藤原が普通に結婚したことを根に持っている、という感じではなく、純粹に男好きの森川は純粹に藤原のことを心配してくれているようだ。そこが、森川のいいところで、やりにくいところでもある。

藤原は心配されるのにあまり慣れていない。「いや、別に……」

咳払いしながら言葉を濁す。そんな藤原の態度に、これ以上口出しするべきではない、ということを感じて、森川はブルーの付箋の付いた科学雑誌を広げた。

と、そのときだった

ぶっ、と盛大に藤原が口に含んだコーヒーを噴出したのだった。

一秒、驚いてから、森川は冷静にハンカチをポケットから取り出して、藤原に差し出した。「おいおい、なにやってんの、面白い記事でも見つけて、ツボに突き刺さったのか？」

森川は一瞬、そんな風に考えたが、何やら藤原の瞳は演算をしているように動いていなかった。全身の動作も停止していた。だから森川はハンカチで藤原の口元とコーヒーが飛んだ机の上を拭かなければならなかった。しかし、様子がおかしい。

「？」まるで南米の鉱山から金塊を発見した風な表情だ。「正史？」
問いかけられ、「ああつ」と額に手をやりながら、森川を一瞥。

そして演算が終了した精気の充填した瞳で森川をキッと見つめた。それはそれは魅力的な瞳だった。

「なあ、利洋、君、確かに科学教師だったよな？」

森川はうん、と頷いて、コーヒーがべつとりと付いた《遺失物拾得欄》を視界の隅に入れた。どうして、藤原がそんな当たり前のことを聞くのか分からなかったから、そこにヒントが隠されていると思ったのだ。けれど、藤原の次の小さなポリウームの一言にさらに分からなくなった。

「睡眠薬って直ぐに作れるか？」

森川はとりあえず、うんと頷いた。睡眠薬など学校にある材料を駆使すれば、化学式を解くよりも容易いことだった。

【36】

草笛寮二〇一号室では京子、綾、そして志が今やおそしと、ロリコンの登場を待っていた。

志たちが出した広告が新聞に掲載され始めてから三日経つ。

広告を見たロリコンはきつと逆上して、この部屋に乗り込んでくるはずだ。そいつを先日志が捕まったように捕まえる。そしてボツ

コボコにして、アリーナの養豚場の仔豚たちの餌にしてやる、というのは冗談だが、それ相応の制裁を加えてやるつもりだった。

そろそろ、《遺失物拾得欄》のあの広告が、ロリコンの目に入る頃合だろう。そしてロリコンがこの部屋にのこのことやってくる頃合だろう。まあ、この方法で駄目だったら別の方法を考えればいい。ロリコン野郎をとつちめる別の方法を。

志の鼻息は荒かった。もうすっかりテルミンのことなど忘れている様子で二段ベッドの下の毛布に潜り込んで、ドアの外の気配を窺っていた。京子と綾も、同じ毛布に包まれている。しかし、二人は志と違ってすっかり冷めている様子だった。なにせ、三日も同じ体勢でロリコンが畏にかかるのを待っているだけなのだから、当初は義憤した二人も、なんらロリコン側からのアクションがないので、脅迫状なんてただの嫌がらせじゃないの？　なんて思い始めていた。銃を持った敵がいないゲームは退屈だった。志が隣にいなければ、さっさと寝オチする状況だ。

「志様、本当にロリコンはやってくるのでしょうか？」

綾は志の体を探りながら言った。

「うむ」志は力強く返事をする。そして、薄暗い二段ベッドの下で志と綾の顔は急接近した。志が綾を導くように話し始めたのだ。ロリコンの生態について。「パソコンの授業中、暇だったから《ロリコン》でググってみたんだ。ざっくりとスクロールしながらあるブログを見つけたの。そのブログに書かれていたざっくりとした分析によるとね、ロリコンは、メガネ美人、挑発に直ぐに乗る、キレイやすい、ルールを遵守する、優しい、すぐにテンパル、頑迷で、ワールドで、クール、意外と人望が厚い、しかしその人望を有り難いと思いつながらも、どこかでバカにしている節がある、そしてレズビアン、というのがブログ主というロリコンの特徴なんだって。そして主はロリコンを人生の落伍者と言いつつ切っていたわ、半ば自嘲的にね。ブログ主はロリコンだから。そして、最後に主が上げているロリコンの重大な特徴はね、凄まじい所有欲なんだって」

綾は内心、気が気でなかった。なんだか、所々ロリコンの生態に綾が自認するところの生態が合致していたから。

凄まじい所有欲、……確かに志様への思いは、所有欲……かも。

でも、私はロリコンじゃないし……、いや、良く見れば志様はロリ顔……。

綾が自分は半ばロリコンだと認めかけている横で、志は言い切った。「必ずロリコンはやってくるわ。ブログ主、ハルカって言う人なんだけど、その人の分析はざっくりすぎて賛否両論あるかもしれないけれど、ロリコンは所有欲が強いっていうのは頷ける。ロリコンはこの『媚薬の研究』を取り返しにやってくるに決まってる。人生の落伍者はココにやってくるわ。そして私たちの罠にまんまと嵌められるんだ」

人生の落伍者はどんな手段を使ってくるか分からない。そのため武器はいろいろと揃えてある。サブゲー用のモデルガン一式と金屬バッドとスコップとヘルメット。少々、心もとないが、好戦的な三人娘には武器はコレくらいで丁度いい。三人には恐れへの感情はまぶなかった。どちらかというと、キャハハハハハって具合に金屬バッドでロリコンを撲殺したくてうずうずしていた。そんな風が一番うずうずしているのが、綾だった。しかし、肝心の標的がなかなか現われない。

「ねえ、京ちゃん」綾は志の向こう側の京子に声を投げた。「ロリコンはいらっしゃると思う?」

「……すぴー」

京子はすやすやと寝てしまっていた。そういえば、先ほどから志の戯言に一言も突っ込みを入れていなかった。

「京子ってば、勝手にシエスタしないの」志は京子の額にデコピンを決めた。すると、

「んあ?」と夢から飛び降りてきた。半開きの目によだれというわかりやすさ。

「緊張感がない」ピシヤリと志が京子の鼻をツンツンした。「この

体たらくでは先が思いやられますな」

京子は「……………」と、その言葉を無視して壁の方にくるんと寝返ってしまった。

「コラッ、京子っ！」

志はこつちに顔を向かせようと腕を引つ張る。京子は早朝の「あと五分っ！」とばかりに譲らない。珍しく立場が逆になっている。

「いやあ、張り詰めた糸もさすがに弛緩してしまいますよ」無言の押し問答の脇で、綾は食堂のチョコレートパフェに思いをはせながら言った。「ピアノネ娘に、この退屈は堪えかねます。京ちゃんでも寝ちゃったんです。私の退屈も志様がどうにかしてくださいとどうにかなりそうです。発狂してしまいます。ヒステリーを起こして謀叛を企てるかもしれません。さて、志様は私をどうにかしてくださいるのですか？」

志は京子を引つ張るのを止めて、ゴロンと綾に向き直って聞く。「……………」どうにかって、例えば何よ？」

その生真面目な顔、まるでどうにかしてくれるような品のある道徳的な顔、それはペロペロ出来るくらいに近かったから、綾は持ち前の恥ずかしがり屋を發揮して、

「もう、言わせないでくださいっ！」と、ゴロンと壁の方を向いてしまった。

「なによお」

志は眉をへの字にして、非協力的な親友たちに向って「うー」と唸った。

そんな中睦まじい三人娘の情景がパヤパヤと漂い始めたときだった。

コンコン

と、扉がノックされる音が草笛寮二〇一号室にこだました。綾、京子、そして志の目付きが変わる。鷹の目は扉を刺すように鋭く光った。イーグルスの三人は戦闘体制に移る。毛布の中で、いつでも口リコンを撲殺できるように身構えた。武器を持つ。京子はスコップ、

綾は金属バッド、志はメリケンサックを拳に装着した。

さあ、来るなら来いっ！

「どどどどどどなたああ？」

武者震いで声が上がってしまったのはご愛嬌、志の爆竹のような声は扉の向こうのロリコンに確実に聞こえたはずだ。

返事を待つ。まあ、ロリコンは返事などしないで、強行突破してくるはずで、まんまと罠に嵌まるという未来が出来上がっているのだけれど。が、しかし、どういうわけだか返事があった。「私よ、アリーナよ」

え？　アリーナ？

アリーナと聞けば、まず真っ先に思い浮かべるのはローマのコロッセオだろう。続いて日本の横浜アリーナと埼玉スーパーアリーナが続く。それが志の通常の思考形態で、そのどれにも行ったことはないが、志の小さな夢は埼玉スーパーアリーナでトリプルアンコールを決めることだ。まあ、今はそんな夢の話はどうでもよくて、ココでのアリーナは人間のアリーナだ。

アリーナ・レイアス。フランス生まれの留学生のアリーナ。志が憧れてやまない透き通る金色の髪の毛の持ち主のアリーナ。瞳は大きく、薄い紫色をしていて、いつだって眠たげなアリーナだ。

要は扉を叩いたのはアリーナである、そういうことだ、大事なのは。それを理解するのに志は五秒かかってしまった。だから、アリーナがノコノコと罠に嵌まるのを、ベッドの中から見守るしかなかった。

アリーナはドアを押して入ってきた。薄い金髪がさらさらと優美に揺れている。

「ごきげんよう、志」と伏せ目がちに、優雅に言いながら、ふんわりという空気をこさえたアリーナはまるでお手本のように罠にかかってしまった。

「！？」ロープの網に包まれて、脳天が天井にくっつくくらいに近づいたアリーナはキョトンと説明を求める顔をしている。「え？

なに？」

なるほど、私もあんな風に捕まったわけか、良く出来てるなあ。志はどうやって謝ろうか考えながら、精巧な罠に感心していた。

いや、そんな風に感心するより、アリーナがお披露目しているパンツの色をチエックするより、予想を見事に裏切る挑発的なブラックだった、いやいや、そんなことよりアリーナを罠から開放するほうが先決だ。

なんて考えて慌ててベッドから這い出ているうちに、京子と綾はすでにもうアリーナを罠から脱出させていた。製作者だけあって手際がいい。

ともあれ、三人は『あはは』と愛想笑いを浮かべながら、一列に整列し、まだまだ説明を求める顔をしたままのアリーナに頭を下げて謝った。『ごめんなさいっ！』

「……謝られても困るわ」

声に抑揚がなく、限りなく無表情なので怒っているのか、許してくれているのか、本当に困っているのか分からない。けれど、

「志は楽しい女の子ね。新しいアトラクションか何か？」

なんて言っているから、怒っているということはなさそうだ。

「アトラクション？ うん、まあ、そんなところかな。あはは」

ひとまず三人はほっと息を吐いた。ロリコンを捕まえようとしていましたところ、アリーナを捕まえてしまいましたなんて言えるはずが、……別に言っても構わないか。まあ、このチープなロリコン捕獲作戦は三人のチープで大事な秘密である。アリーナは可愛いけれど、元バルチャー、つまり部外者だ。

でも、どうして部外者のアリーナがこの二〇一号室に？

まさか、逢引的なかしましかしら？

綾はなんだか喧嘩腰で、ずけずけどんと居丈高にアリーナに聞いた。

「アリーナさんはどうしてココにいらっしやっただのかしまし？」

「かしまし？ それは日本語なの？」

「古典です」

「へえ、」留学生のアリーナは手の平を合わせてうつとりと綾を直視して感心しているご様子だ。「綾は才色兼備ね」

「!?!」

上目遣い、そして呼び捨てにされてドキッとしたのは、柔らかい大福のようなほっぺたに隠しておく。

「使い方、間違っていた?」

それはきつと才色兼備という言葉についてだろう。使い方という点では間違っているわけではないが、才色兼備はきつと志様にふさわしい、と綾は生真面目に「その言葉は人並みはずれた美貌と才能を持った人にしか使ってはいけませんよ。私を形容するなら、さしずめ鶏鳴狗盗というところでしょうね」と教えた。「それはともかく、アリーナさんはどうして志様のお部屋につ!?!」

「いけない、いけない、」アリーナは綾が発する突風のような雰囲気のをのりくらりと中和しながら、「アトラクションに驚いて忘れるところだった」と、鞆の中から一冊の書物を取り出した。

その書物はまるで近世ヨーロッパの哲学書のように……、ってあれ?

アリーナが差し出した一冊の書物は瓜二つだった。何にって、口リコンが付け狙う『媚薬の研究』にそっくり、というか、そのまま一緒だった。唯一の違いは図書館のものである、というシールが添付されていないという点だ。代わりに伊勢丹のシールが表紙の隅に貼ってあった。

志は優しく受け取りながら、聞いた。「アリーナ、コレは?」

「約束したでしょう」

「へ?」

「私の詩を読みたいって、志は言ったでしょう?」

志は記憶を辿った。ああ、そういえば、黒ブタのピエールを借りに言ったとき、そんな約束をしたようなしなかったような、まあ、こうしてアリーナが部屋にまで来てくれたってことは約束をしたのだろう。「あっ、うんうん、覚えてる。ありがとう、わざわざ寮まで

もって来てくれたんだ」

「……その顔は、今の今まで忘れていたって顔だ」
ギクツ。

「それに、詩なんて興味ないっていう顔してる」
ギクツギクツ。

「そ、そんなことないよっ」アリーナの瞳が透明すぎるから、志の心はビシバシと痛み、もう、アリーナの詩を読みたくてしようがなくなつた。「実はずっと、待ってたんだ、アリーナのポエム」

「……ポエムじゃない」珍しく悲しげな声音が漏れている。「私の詩はポエムなんていう、薄っぺらいものじゃない……」

「ええっ？」志はどうしようもなかった。だつて詩とポエムって一緒じゃん。どうしてアリーナが悲しむのか訳分かんないよ。

そんな風に天つぱってる志に京子が小さく耳打ちした。

「志様、ポエムと詩は違ふんです。例えて言えば携帯小説とライトノベルぐらい違います。それらは微細な違いですが、解釈の違いで起こる宗教戦争を上げるまでもなく、当事者にあつては大きな問題なんです」

京子の講釈をすんなりとは解釈できなかつたが、ともあれ、詩とポエムと判別すると宗教戦争が起こってしまうのだということは分かつた。それは大変だ。

「ご、ごめんなさい、アリーナ。さっきの発言は只今、無間奈落に叩き落としたよ。アリーナは詩を書いているのよね。大丈夫、バツチリ理解したから」

「うん。……でも、そこまで言われると逆に嫌ね」
ええっ!?

「そんな顔しないで、別に詩とポエムの違いなんてそんなに気にしてないし……、ごめん、嘘。私は詩を書いているのよ、志。それだけは知っていて。ポエム作家というカテゴリーに私を入れないでね。私を書くものを詩とみなしてくれればいいの。日本語は難しいけれど、出来るだけポエムにならないように頑張つたから。志は私が書

いたものを詩だと思って読んでくれたら、それでいいから」

凄く真剣にアリーナは志を見つめてくる。言い終えると、左右の京子と綾の瞳も一瞥した。「よかったら、二人にも私の詩集を読んで欲しいな。それと、私が詩を書いていることは、くれぐれもエルには内緒だからね」

アリーナはシャンゼリゼ通りを散歩する貴婦人のかぐわしさを残して、草笛寮から去っていった。残ったのは一冊の詩集だ。それは志の手の中にある。志と京子と綾はそれをじーっと見つめた。そして同じことを思った。

この詩集はアリーナの全てだ。……覗きたい。

志はおもむろに詩集を開こうとした。しかし、綾は横からすつと奪い取る。

「志様は詩にご興味がないようなので、まずは私が、」

「別に興味ないなんて表明してないわ。返しなさい、あーや」

まるで子猫のじゃれ合い。そしてまさに漁夫の利の様相で、すつと京子がアリーナの詩集を引っ手繰った。じゃれ合っている二人を背に詩集を捲る。「あっ」と遅ればせながら気付いた二人は京子にのしかかった。「私が先に読むのっ！」

ああ、かましい、かましい。

と、そんなかましい草笛寮二〇一号室に、またもや来客が訪れた。ノックもせず、日本の公務員のように、けたたましく踏み込んできたのはバルチャーズの面々だった。その先頭の弥恵の頬は上気していて、純な黒目はいつの間にもやら志の手に戻っていたアリーナの詩集に向けられている。

「弥恵？」志は丸い目をして、どうしてバルチャーズが？そして、どうして弥恵がバルチャーズの面々と一緒にココに？と思った。

弥恵がバルチャーズで大活躍していることは知らなかったのだ。

「志姉ちゃん？」一方、弥恵は丸い目をして、どうして志姉ちゃんが私の大切な日記を持っているの？そして、どうしてまるで日記を取り合いしていたような体勢で、美少女二人に押しつぶされてい

るの？ と思った。しかし、ともかく、見つかって、よかったあ。
弥恵はほっと胸を撫で下ろした。

後ろに控えるエルはそつと弥恵の肩に手を置いた。「へえ、二人は顔見知りだったのか。以外だな。志が寮暮らしだったことも。てつきり豪邸暮らしでのほほんだと思ってた。で、アレか？ お前の探し物って」

「うん」弥恵はエルの手を触りながら頷いた。「間違いないです」「よかったね、弥恵ちゃん」三国はまるで自分のことのように嬉しそうに言った。「コレでもう死ぬ死ぬ詐欺はなしだからねっ」

「はいっ」

「じゃあ、そういうことだから、」とエルは弥恵の横を通り、バルチャーズが万事解決！ の雰囲気を目を白黒させている志の手から詩集を奪った。いや、奪おうとしたけれど、志はその詩集を全力で離さなかった。「……放せよ」

「い、や、だ」

「放せて」

「だから嫌だと言っているっ！」

「どうして！」

「だって、コレは、」アリーナの詩集なんだから！ しかし、アリーナはエルには詩を書いていることを内緒に、と言っていたから義理堅い志は口を真一文字に閉じてから、適当に言い放った。「コレは音楽室前で拾ったポエムなんだ、だから、誰にも渡せな、」

「それは私の日記帳だもんっ！」

志の声を掻き消す弥恵の大音声。皆の視線が十歳の小さな体に集中する。「きつと、私。ソレを音楽室の前で落としたんです。私鼓笛隊に入ってるから、そのときにきつと落としてしまったんです。でも、詩は書いた覚えはありますけど、ポエムを書いた覚えはありません。あくまで詩です」

盗撮記録が連ねてあるとばかり思っていたエルは一瞬ポカンとしてから、

『なんだ、ポエムもとい、詩を書いた日記を落としたのか、なるほど、確かに死にたくもなるなあ。だってポエムだろ、ポエム。まあ、ともかく見つかってよかったな』

と冷静に頷き、詩集を持つ力を引っ張った。しかし、志は一向に放そうとはしない。いつの間にやら、事情を知る京子と綾も加勢している。

だって、この詩集は弥恵のものじゃなくて、アリーナのもものだから。

弥恵はきつと勘違いしてるんだって！

「志姉ちゃん、どうして返してくれないのっ！」

「そうだよ！」三国が最年長として、後ろから加勢する。「人のものは取っちゃいけないってママンに教わらなかったの!？」

「いや、だからコレは弥恵のものじゃないんだってば！」

「じゃあ、どうして遺失物拾得欄に乗せたりなんかしたんだよ!？」

エルはぐつとマグロを釣り上げるかのごとく目一杯引き上げる。「お前たちのものじゃないからだろ！」

『どわあああ!』

ピアンネ娘が三匹、エルに覆いかぶさった。志はぺしゃんこになりながらも未だ詩集を放さずだ。

「弥恵、ほら、ココに伊勢丹のシールが付いているでしょ？」志は伊勢丹のシールを指差し言った。「弥恵の日記には伊勢丹のシールなんて付いてないでしょ？」

伊勢丹のシールをつけたまま詩を書くなんて、留学生のアリーナくらいのもんだろう、なんて志は甘く考えていた。偶然の一致、ソレは人知を超えて多々あるものだ。

「伊勢丹のシール……」、「弥恵の目がバルチャーのように鋭くなった。八重歯がキラリと光る。「間違いない、ソレ、私の日記! 志姉ちゃん、返して!」

「ま、マジでっ!?!?」

これほどまで適当に言ったことが裏目、裏目に出てくると、もうう

んざり、という顔をせずにはいらなかった。もう言葉で弥恵を説得することは不可能に思えた。エル、そして弥恵も狂ったように詩集を奪いに来て、くんずぼぐれずの様相だし、こうなったら、こうなったら、こうなったら……。

「ああっ、もうっ！」志は全力でのしかかる味方も含めて皆を振り払い、喉を引き絞つてがなった。しかし、うららかな透き通る声ということ断つておく。

「エマーゼンシー発令！」

それはロリコンが予想以上に狡猾で俊敏な動きを見せたときのため、『媚薬の研究』を死守するための宣言である。

『了解！』

反応したのはもちろん京子と綾。二人はめいめいエルと弥恵を捨て身で組み伏せた。その隙に志は部屋の窓をガラツと開けた。秋風がヒュンと入り込む。ここは二階。簡単に飛び降りて脱出できる。

「じゅわっち！！」

志は幼児期を思い出しながら、特撮なポーズで窓の外に躍り出た。そしてかっこよく片膝を付いてスタツと着地、というわけにはいかず、バランスを崩し尻餅をついてしまった。「あいたた」だが、直ぐに体勢を立て直して、志は全身をバネにして、ダダダダと地面を蹴った。駆け出した。全力で逃げる。

何から？ 志の手にはアーリーナの詩集。

弥恵の、バルチャーの目から逃げるんだっ！

志は当てもなく、草笛寮からピアノの高等部の校舎へ向って走り出した。

その後を追うのは、

『待てえーっ』と同じように窓から踊り出てきたエルと弥恵だった。……っ、あれ？ どうして捨て身で組み伏せられていた二人が？

部屋の中を覗いてみよう。両手を頭の後ろに回して机に頼つぺたをくつつけているのは京子と綾だった。そしてその背中に二丁拳銃を付きつけているのは燦獄三国の他に誰が 있을까。「あなたたち

は今、制服を着ているわね。さて、私がここでペイント弾を打ったら、つまり、……どうなるかお分かり？」
考えるまでもなく、クリーニングだ。

【37】

中等部校舎と高等部校舎に設けられている地下に埋め込められた円筒型の駐輪場から、自転車を引いてリンリンと出てきたのはいつぞやの女子だった。いつだったか、藤原の机の上から大量の本と一緒に『媚薬の研究』までも回収した図書委員の女子である。今日は、彼女、ルルルンとご機嫌な顔をしている。図書館の業務がいつもより早めに片付いたし、今日はご鼻屑にしている作家様の新刊の発売日だった。いざ、駅前の大型書店に向いましょうか、とちよいときつめの顔も緩んでいらつしやる。

ふと、そんな彼女の耳に入ったのは、

『待てーッ！ コラアーツ！』という物騒な怒鳴り声。

「ん？」何事と、彼女が背後を振り返った瞬間だった。

「ちょ、ソレ貸してっ！」

突然、中等部の女の子が長い金髪をはためかせながら、ズドンとハレー彗星のように衝突してきた。毎日読書三昧の図書館の彼女は何もなすすべなく、自転車のハンドルを奪われ、コテンと尻餅である。

「はっつ……」

柄にもなく女の子らしい悲鳴を上げながら、彼女は自転車に跨ってペダルを踏み始めた金髪の背を「いきなり、なによあ。もう」と恨めしげに見送った。その彼女の両脇を全力疾走で通り過ぎたのは、黒髪と銀髪の少女だった。

『待てーッ！ コラアーツ！』

【38】

正門にまで続く並木道の脇のベンチではちょっとした諍い（？）が起こっていた。いつぞやの深夜0時のテレフォンボックスで成立したカップルによって。

「いいよお、ミヤが後ろに乗りなよお」

「だめ。カノのおっぱいを背中に感じたいんだってば」

「私だってミヤに、ギユギユってされたいんだから」

「だったら、運転中におっぱいをまさぐっても文句は言わないでよ」「おっぱいをまさぐったら運転できないよお。私はおっぱいでバランスを取ってるんだから」

「だったら、今触っちゃったら、どうなるの？」

「うーん、多分、……こうなっちゃうかも！」

「やーん（赤面）」

ご覧の通りバカップルの痴話喧嘩。その二人の世界に入り込まないのがこの国の常識であり、礼儀でもある。放っておく分には害はない。注視すると肘の辺りがむずがゆくなるから気をつけるべし。ほら、ミヤとカノのバカップルぶりを視界の隅に誤って入れてしまっただごぞの三人組は乾燥肌を掻くように、せわしなく肘の辺りを掻き始めた。

『なんか、かゆくね？』

さて、ベンチの半径五メートルを百合色に染めている以外に害のないバカップルであるが、ただ一つ、不敏に思えるのは、鍵が刺されただままで出発をいまや遅しと従順に待っているママチャリだろうか。擬人法を用いれば、ママチャリは今にも不可能を飛び越えたがっていた。つまり、ペダルを高速回転で漕いでほしがっていた。

それは、つい先ほど目の前を通り過ぎた、時速六十キロのママチャリのせいだった。その金色のハレー彗星のようなスプリントは凄まじいものだった。毎日のゆるい通学でたるみきったチェーンが震えた。ママチャリは己に問うた。

この世に自転車が生み出された目的はなんなのか？

それは、……………速さだ！

「じゃあ、お姫様っこして帰ろうよ！」

「一里毎に？」

なんて阿呆な会話をしているバカツプルを乗せている場合ではない。毎日、毎日、後味が悪いんだ。でも、変に使命を全うしているような気がする。そう納得しながら、でも、ペダルの具合はぎこちないんだ。究極の二輪車はバカツプルに付き合いながらくたばりたくなかった。もう、限界だ。いつかバラバラに壊れてしまうのなら、自転車にお似合いの速さをくらってから、炸裂したい。

もしかしたら、ママチャリはそう思っていたかもしれない。

だったら、ソコへ現われたエルと弥恵は救世主だ。

「おいっ、バカツプル！」 必死の形相のエルが問うた。「お姫様抱っこで帰るんだな！？」

突然の物言いに、ミヤとカノは慄きながらも、ゆっくりと頷いた。

「だったら、このママチャリはいらないな！」

キツイ断定口調。カノとミヤの「？」マークを差し込む隙間もなく、エルはママチャリに跨り、弥恵は荷台に飛び乗った。ママチャリは工場での出荷前点検ぶりに負荷マックスのギアをカチカチカチカチとチェンジした。

「しっかり、つかまつてるよな！」

ぐぐつと弥恵はエルの体に腕を回し、背中に、というかお尻にほつぺをくつつけた。

エルは最初から立ち漕ぎ。全体重をペダルに込めた。

エルと弥恵を乗せたママチャリはピアンネの敷地から飛び出した。

【38】

女子寮へは並大抵の覚悟じゃとてもじゃないが入れない。

つまり、藤原は相当な覚悟をもって草笛寮二〇一号室前に来ているわけである。ココまでの道のり、まるでミッション・インポッシ

ブルだった。

しかし横に立つ森川は覚悟も何も抱えてきてはいないようだった。さわやかなしよゆ顔で、「堂々としていれば誰何されないと思うよ」とゆつたりと言つてのける。「一応、教師なんだしさ、俺たちは」

「教師が睡眠薬を部屋に投げ込むなんていう怪しい行動を取つたりはしないだろ？」

「ホモな社会の教師だけだろうな。少なくともこの国ではね」

「笑うなら笑え」

「全部終わつてから笑うことにするよ」森川はニヤリと目を釣り上げてみせるだけだった。同時に差し出された手には発炎筒型の睡眠薬。森川によれば、先っぽの糸を引っ張るとバルサンのように煙が噴出し、室内の哺乳類をものの三分で眠らせる、材料は企業秘密の即席の睡眠薬だそうだ。「で、マジでやるの？」

「やる」藤原は何も考えずに短く言い切つた。考えれば考えるほど社会の軋轢に押しつぶされることは目に見えている。「今さら手ぶらで帰れるか」

「そういう一見実務的で慎重に見えて、意外と放胆なことをやつてしまう、そのドロドロとした二面性、」森川はドアノブに手をやり、部屋の気配を窺いながら、さらりと口にする。「好きだよ」

「……人を勝手に分析するな」

「じゃあ、入れるよ」

森川は気のせいかもしれないがエロティックに言つてから、糸をぐぐつと引っ張つた。すると短く小さい炸裂音がして、白い煙が立ち上る。すつと開いたドアの隙間から、部屋にソレを放り込んだ。すかさず、森川はドアを閉めた。部屋からはジタバタと慌てふためく物音と悲鳴。誰だつて発炎筒的なものを突然部屋に投げ込まれれば、そのような反応を示すことだろう。ドアが内側から何度かタックルされた。藤原と森川は協力してドアを封じる。一分ほどで部屋の中は静かになった。睡眠薬が効いてきてのだろう。それからあと

二分待つ。秒針が進んでいくのを待っている間は、まるでカップラーメンだった。

「よし、三分」森川が言って、ドアノブを回した。

部屋は予想通り静寂だった。静寂に寝息が二つ。志とルームメイトの豹然京子の寝息だろう、藤原は一瞬そう思っただけで部屋の光景を差し替えたが、しかし、部屋の床にグデンと寝そべっていたのは、京子と、確か片吟綾という奇特な苗字の娘だった。その二人は、どういうわけか背中合わせでロープに縛られていた。

まさかのロープに藤原は目を白黒させた。その横で森川は冷静に睡眠薬の証拠を回収しながら、お目当てのものを見つけてくれた。

「コレか？」

それは机の上にポンと置いてあった。藤原はペラペラと白紙のペー지를捲って中身を確かめてみる。「ああ、コレだ」

間違いない。『媚薬の研究』だった。藤原はあてつけに、深夜0時のテレフォンボックスで入手したポエムが書き連ねられた外装が瓜二つの日記帳を机の上の同じ場所に置き、その場からそそくさと退散した。ロープの娘たちのことが多少気ばかりだったが、長居はしてられない。ここは男子禁制の女子の城だからな。

ふと、脱出に成功し安堵の溜息を吐いた藤原の脳裏に過ぎった人がいた。

嫁の陵だ。

草笛寮を去り際、藤原は森川にもう一つ依頼した。

【39】

繰九度大橋の架かる一級河川は愛甲地区と銘電地区を分かち、流れの激しい、つまり濁流である。その川の両脇には三年前に整備されたサイクリングロードが中流域から下流域まで続いていた。志はサイクリングロードの存在を知ってか知らずか、ピアンネの敷地から出て、エルと弥恵から逃げ惑っていたら、いつの間にかやらの川

の匂いが染み込んだコンクリートの上をひた走っていた。

住宅街を車でのほほんと走っていたら、モナコのF1のコースに出してしまったような、そんな按配だった。

当然、志とエルのペダルの漕ぐスピードは上がっていった。コンクリートが滑らかでタイヤとの摩擦が絶妙なこともあるが、繰返される緩やかなアップダウンは両者のママチャリの回転数と勢い、ポルテージを上げていった。

サイクリングロードをひたすら上流に向って追いかけてこを続けて、気付けばエルと弥恵のママチャリは志とあと三十メートル、というところにまでつけていた。下り坂では二人分の重さを持った方が有利に働く。志の体重はエルよりもリンゴ 個分軽く、弥恵の体重よりリンゴ 個分重いから、つまりリンゴ 個分、下り坂では加速する。

しかし、上流に向っていくに従って、さすがにリンゴ 個分の重さを余計に抱えているエルの健脚にも疲労の影響が出始めた。製造番号が十三桁のペダルと引き締まった細い筋肉が張り付いた関節の連動がぎこちなくなる。が、しかし、このくらいの疲労は、エアロバイクの三十四分の壁に比べ大したことはない。人間が音速を超えたときの壁に比べたら、ドミノのような小ささと軽さと可愛らしさだ。

エルはまだ志に追いついていないのだから、まだ何も始まっていない。まだ振り出しになっていない。

このままでは負けだ。そして、求められるのは圧倒的な勝利だ。急げ、急げ、急げ、急げ、急げ。噴出す勢いだけで打ち立てたプライドが訴える。敗北感はいらない。ご免だ。想像したか？ 苦い味がした。負けると思うと、苦くて顔が引きつる。保健室の匂いに包まれる。保健室の匂いは甘い、温い、優しい。その優しさは人間を墮落させる。エルは落ちたくなかった。後ろに下がりたくはなかった。昨日の自分より前にいたい。沸き上る粘っこい意地がある。

絶対に志を抜く。

振り落とされないように必死ですがみついている弥恵のためにも、
だな。

「急ぐぞっ!」

エルは汗で濡れ始めた銀色の髪の毛の振り乱しながら甲高く叫んだ。

「はい!」

雲を突き抜けるような弥恵の返事が、エルの背中を力強く押し上げた。

濃厚なシロップのような夕焼けが後方から押し寄せてきていた。

が、黄昏ている余裕なんてない。うすぼんやりと青春を歩いている暇はない。ピアンネ娘に休息なんていらぬ。走り続けていないと、ピアンネ娘は退化する。進化の過程はゆっくりかもしれないが、進化の瞬間は全身全霊の疾走だ。回転だ。上昇だ。

サイクリングロードから抜けることの出来る、第三ポイントの侵入口、丁度逆三角のフラッグが立っている、志はその地点でママチャリの前輪を左に傾け、最高速度で左折した。段差でタイヤが音を立てた。

目的は急勾配の上り坂だった。オレンジ色に染まった住宅街を裂くような一本の坂を志は視界の端に捉えたのだ。その一本道は眼前にそびえる山の中腹まで一直線に開けている。

そこで、上り坂でエルを圧倒的に引き離す。二百メートル引き離す。エルに白旗を振らせる。体重がリング 個分重い分、エルの体力の消耗は激しいはずだ。すでに疲労ははちきれんばかりに溜まっているに違いない。エルの太ももに針を刺せば、トマトの汁が飛び散るような具合で乳酸が飛び交うだろう。これは圧倒的な勝機に違いない。

エルはコレを卑怯って言うかな?

「……………言わない、よね」

私たちは、そんな風に平等に育ってないんだからさ。

志は天空に駆け上がるような道を、流れている地面から、ゆっくりと視線を上げながら、確かめた。障害物は皆無だった。志はなん

だか照れたように、短くて、鋭くて、なかなか魅惑的な笑みを「クスリ」と零した。

瞬間、志は酸素で肺を満たした。そしてペダルを踏み込んで、さらに踏み込んで、さらに立ち上がって踏み込んだ。スパートを掛けたのだ。志は一気に上昇する気だった。

金色の髪の毛が夕日に反射する。キラキラと眩しい。水面よりも、汗を含んだ志の細い髪の毛は煌いて、乱れた。その輝きは、すでに背中に手が届くまでに接近していたエルを引き離れた。五センチ、十センチの単位でゆっくりと離れていく。

エルは奥歯を噛んだ。

志がとてつもなく遠くに見えた。志のブラウスから透けた地味な色のスポーツブラが遠い。

目がかすんできた。疲労じゃない。疲れた、とかじゃない。下半身がすっぽり抜け落ちた感覚。酸素が足りてないのだ。だからといって焦りはしない。息を大きく吸えばいい。整えればいい。軸を真っ直ぐに固定して、徐々に手足を緊張させていく。いつものエアロバイクと一緒に。けれど、今回は勝手が違っていた。

重い。

エルの体はとてつもなく重たかった。なびく髪の毛も、あまりない両胸の膨らみも、全てが重く感じた。踏み込んでも、踏み込んでも、機械が故障したかのように押し戻される。

どうしてだ？

なんでだ？

こんなはずじゃない。こんなはずじゃないんだ。

.....重力だ。

地面の力だ。地球の力だ。私の敵は志だけではなかったんだ。

突然だった。エルは全てのバランスを失った。ジエンガが崩れた、舞台上で指揮棒が落下した、膝の骨が抜かれた。ママチャリが倒れただけとは思えない砕けたような危険な音がして、エルは落車したのだった。

「エルさんっ！」

エルは仰向けに両手を広げ、魂が抜かれたような瞳をしていたから、弥恵は大声で呼んだ。エルはその声が入らなかつた。別世界に飛ばされたように、思考が停止してしまっていた。しかし、それもたつた三秒の間。エルははつとなると、手足にぐつと力を入れた。けれど、起き上がれなかつた。体が動くことを忘れてしまったように、筋肉が緩んでいた。

「エルさんっ！」

弥恵の悲しげな顔が見える。その顔は救急車を呼びかねない雰囲気だった。でも、エルは自分の体がどういう状態であるのか、なんとなく分かつた。しばらくすれば、元に戻る。そういう症状だ。

だから、そんな風に悲しい顔をしている暇があつたら、

「弥恵、志を追うんだ、早くしろ！」

言われ、涙目のまま静止した。救急車……、そんな顔をしている。「ああ、もう、お前は日記を取り返したいんだろっ!?」エルは上半身を起こしながら、力の戻り始めた右手で、弥恵の右手をぐいと引っ張った。引っ張ってから一旦離して、その手の平をパンッと叩いて、「バトンタッチ、お前と私はクランだっ、仲間だろっ、お前が勝てば私の勝ち、私の役割はココで終わったんだ、次はお前の番だ、しがみついているだけじゃつまらないだろ?」エルは右腕を掴んで、鼻先がくっつくくらいに顔を近づけた。「この手で志から取り返すんだ、そっちの方が面白いだろう、爽快だろ、いいな、行けるなっ!?!」

と、ソコでエルは弥恵に短いキスをした。わずかに残ったエネルギーをかき集めて注入するイメージだ。

唇が離れてから、弥恵はぼかぼかと酔ったようにぎこちなく頷いた。そして、その酔いを振り払うように、「は、はいっ!」すぐにもう一度しっかりと頷いた。エルさんのキスは前借だ。絶対に勝たなきゃいけない! 裏切っちゃいけないんだ!

幸いにしてママシャリのダメージはフレームに縦に入った傷だけだ。

弥恵はサドルを一番下まで下げて、跨った。

「よし、行けっ！」エルはくしゃくしゃな笑みでやけになって叫び、腕を振り上げる。

リンリン。

弥恵は緊張の糸を裁断する柔らかいベルの音色で返事をして、なんだか得意顔で振り返って親指を立てて紅い舌を出して、ゆっくりとスピードを上げていった。エルはぐるっと道路の中心でうつぶせになり、弥恵の背中を見送った。

【40】

山の中腹まで続く一本道、それは小さな公園まで伸びていた。滑り台とブランコとジャングルジムと砂場と鉄棒がある普通の公園。つまり、その小さな公園がゴールってことだ。志は一度もサドルにぐっしょりと汗で濡れたお尻をつけないまま、昇ってきた。すでに発射時の勢いと燃料は強い重力に奪われてしまっているから、その表情は必死だった。空中分解しないのをやっとのことで堪えていた。あと、もう……少し。

かすんだ目は黒い自分の影とオレンジ色の道路と公園の前の白い外灯を理解する。

エルの気配はすでになかったから、最後は自分との戦いだった。あそこまで昇れば、何か変わるんじゃないかって思えた。すぐにお漏らしをしなくなるかもしれないし、玉姉が優しくなるかもしれないし、短気が解消されるかもしれないし、おっぱいが大きくなるかもしれない。そんな予感が胸に点るから、前へ、前へ、知らない私へと進んで行けるんだ。

もう、少し。もう、少し。本当に、もう少しだった。
リンリン。

柔らかい部分に滑り込んでくる優しいママチャリのベルの音。
志ははっとなって、振り返った。

ママチャリには弥恵が乗っていた。ドドドドドドドという感じで迫ってきていた。その瞳は怖かった。志は体中を振るわせた。冷凍庫に裸で放り込まれたようにブルブルつとなった。パンツは少し漏れてしまった。けど、汗でぐっしょりだから、そんなことはどうでもよくて、ハゲワシに肉を喰らわれるような怒涛の恐怖が臆病な志には堪えがたかった。

逃げる、逃げる、逃げる。しかし焦れば焦るほどに筋肉は強張り、スピードも落ちてくる。苦しい。生きるための何かが足りていない。でも、志は我慢した。公園の入り口まで辿り着いた。そしてぶっ壊れたようにママチャリとともにその場に崩れ落ちた。息をするのに精一杯で何も出来なかった。やっこのことで薄目を開き、完全な無防備な状態で、コンクリートの上に大の字になって空を仰ぐ。と、弥恵の顔が見えた。気絶しそうなほど驚いた。

「私の、うっん、私たちの勝ちだね、志姉ちゃん」

公園に先に着いたのは弥恵だったようだ。弥恵は頬を上気させながら、勝ち誇った笑顔を志に見せびらかしながら、ママチャリの力ゴから転げ落ちていたアリーナの詩集を手に取り、胸で抱いた。

だから、それは違うんだって。叫びたかったが、喉が引きつって駄目だった。

「じゃあね、久しぶりに志姉ちゃんと競争できて、楽しかったよ」
弥恵はママチャリに跨って、坂を下っていった。志はもう何も面倒臭くなって、恥じらいも全てどうでもよくなって、呼吸が落ち着いてきたから、腹式呼吸で肺を空気で満たして、大声で歌を叫んだ。

【41】

「やっと見つけた！」

見慣れたヴォクシーの助手席から窓を出して叫んだのは燦獄三国。どうやら、エルと弥恵のことを探しに来てくれたようである。非常に有り難かった。エネルギータンクは空っぽだった。補充の術もな

かったから。

「しっかり」

三国はエルをタオルで来るんで抱き起こしてくれた。「助かったよ」

「全くもう、チャリンコでこんなところまで来るもんじゃないよ」

「志のせいだよ」

「二人とも意地っ張りなんだから」

「そういうんじゃない。ただ、ムカつくんだよ、あいつを見てると」

「そういう悪い言葉使わないの。そいえば、弥恵ちゃんは？」

「志を追ってる」

「弥恵ちゃんが？」

「私の燃料はココで尽きたから、ココから弥恵のエンジンに切り替えただ。二段構えの戦法。それに、もともとの目的は弥恵の日記だからな。あいつが自分で取り返すべきなんだ。きつと、すぐに取り返して戻ってくるって、って……ほら、もう来た」

見上げると、薄い暗がりの中、隕石のようなスピードでママチャリのライトが落ちてきた。段々近づいてくる。仲間の帰還に三国とエルは顔をほころばせた。段々近づいてくる。弥恵のママチャリはぐんぐんと加速している。三国とエルは「ん？」と顔を強張らせた。いや、もう速さはいらなからっ！

『ブ、ブレーキ……!』三国とエルは叫んだ。

キキイーツ。まるでデイズーアニメのような奇妙な動きをして弥恵は止まった。危ない危ない、危うくヴオクシーのバンパーがドスンと凹むところだった。

「えへへ」弥恵は悪びれる様子もなくニコニコと純真無垢な笑顔を見せている。「エルさん、三国さん、私、勝ったよ！」

【42】

息も絶え絶えに、ママチャリに刺さっていた傘を杖代わりに、草笛

寮になんとか帰ってきた志は驚愕した。京子と綾がロープで縛られ、床に倒れていたからだ。志は杖をコロンと床に倒して、倒れるように二人に駆け寄り、

「京子、京子ってば！ あーや、あーや！」と半泣きでしばしと体を揺すった。外傷は見られない。呼吸もすやすやしている。が、睡眠薬を飲まされたみたいにくっすりと夢の中で、目を覚まさないというのはどういうことだろう。三人の中で最も低血圧に悩まされているのは志であるし、二人は健康的な生活リズムを乱すことなんてしないから、お昼寝なんて仮眠を取るはずがない。まして縛られてなんて、とんだ変態さんじゃないんだから、誰かが二人をこんな風にこんな風にしたに違いないのだ。

私が追いかけてこしている間に、一体、何が？

とにかく目を覚まさせなきゃ。志は頬つぺたをふにふにとつまんだり、伸ばしたり、丸めたり、舐めてみたりした。京子は相変わらず睡眠薬が効きすぎたように眠りの姫から退位しようとはしない。でも、頬つぺたがべちよべちよになった頃合だった。綾がふわふわと大きな欠伸をして、クシユクシユと半目を開けてくれた。

「あーや！」思わず、涙声が零れてしまう。

「うにゅ……、ゆ、き、様？」

「そつよ、志だよ、分かる？」

「うにゅ」イエスのサインだろう、綾は三歳児のように潤んだ目でコックリとした。

「一体、誰がこんなことを？」

「うにゅ？」

「誰が、綾と、京子を、ロープで縛ったり、なんてことをしたの？」と、ゆっくり言ったところで志はまだ二人を縛り付けているロープを解いていないことに気付いて、ロープに手を伸ばした。なかなか頑強に結ばれている。

「なんだか、おぼろげなんですけど……、三国さんに縛られたことは、確かなんです」

やっぱりそうか。あの人か、可愛い顔をして、なかなか縛りがきつい。志は唸った。

イーグルスはバルチャーズに殲滅させられたってことか。

悔しいな。アリーナの詩集も取り戻さなきゃならないし、悔しいな。エルのほくそ笑んだジト目が思い浮かんだ。段々、ムカついてきた。全てをあいつに奪われたような気がして、氷点下まで下がっていた怒りの塊が熱を帯びてくる。

ふと、ブーブーと志の携帯がなった。綾が寝ぼけ眼で「まくらあー」と言ってきたので膝を貸してやる。膝枕をしながら、志はケータイを広げた。

志の目の色が変わった。リベンジのチャンスが舞い込んできたからだ。

【43】

エルの宿の脱衣所で、三国、エル、弥恵は仲良くバスタオルで体を巻いて、コーヒー牛乳を煽っていた。木製の長いすに座り、三人は絶賛茹で上がり中であつた。

『ふひー』と、三人は体内にこもった蒸気を吐き出す。

「で、弥恵ちゃん、」ぴと、と三国は弥恵の滑らかで白く透き通つた二の腕に触れ、揉み解しながら言った。「手帳を見せてもらいたいんだけど」

「えっ!？」

「駄目? 私たちがいなかったら、手帳が戻ってこなかったかもしれないんだし、少しくらいいいでしょ? 弥恵ちゃんの大事なものだから、余計に気になるな。ねえ、エルもそう思うでしょ?」

「そうだな。斜め読みくらい、させてくれたっていいよなあ。ふふ」
悪そうな笑い声だった。湯上りだから酔っ払っている風にも聞える。「ふふ」

「い、嫌です。日記は私のプライベートで、インフォーマルな、弱

いところなんです。いくらエルさんと三国さんだからといっても、読ませるわけにはいきません！」弥恵はふわつふわつと言いながら、着替えが置いてあるカゴの前にスタスタと歩いていった。そこに手帳も置いてある。弥恵は牛乳瓶片手に、カゴを背にして守りの体勢に移った。「どうしても読みたいのでしたら、その、先輩方をですね、先輩方を、先輩方を、とうとうお姉さまと呼んじやいますよお！」

それは弥恵にとっては物凄いい願いで、しいて言えばファーストキスのように、その、ハズイことで、決意のいる、昇天寸前の大事だった。手帳と取り替えてもいくらいの。でも二人が頷くとは、思っていないからこそその条件でもあった。

しかし、再度茹であがり始めた弥恵の気持ちを知ったように含み笑いながら、

「別に、ねえ」と三国はエルに言葉を続けさせた。

「そうだな、お姉さまって呼ばれるくらい、何てことないって」

「ほ、ホントおーですか？」弥恵は一瞬色めき立ったが、それは少々早かったようである。

「うん、」エルは弥恵の百合的な願望から、桁外れに見当違いなことを思いながら、「お姉さまって呼んで、私がいたたまれなくなると思ったら大間違いだぞ。最近、下級生が上級生をお姉さまって呼んでからかうのが流行っているからって、私はそんなことに、いちいち構ったりはしないからな」と、ぶっきら棒に言い放った。

「そうだね」なんとなく弥恵の心持を分かっている風な三国は、クスクスと相槌を打っている。「全然、お姉さまあん、って呼んでくれていいよ」

「ふ、ふええええっ！」弥恵は頭を抱えて、瞳をグルグルとさせた。どどどどどど、どうしよう!?

お姉さまって呼ぶことはとても魅力的だった。なんてたって、美しいピアンネ娘の中でもトリプルSクラスのお二方である。でもでもこの流れでお姉さまと呼んだって、この関係はアニメの中の話のよ

うな甘くて濃密な間柄ではなくて、流行に飛び乗ったような、浅はかで、根の短い、なんちゃってお飯事に過ぎないのではないのだからか？ 理想はお姉さまの困難を、私のそれとない普通の頭脳とラッキーで乗り越えて、その過程で固く結ばれた絆で、自然にぽつと口をつくといったような、甘々な関係であるはずで。確かに志姉ちゃんは勝利したのはエルさんとの結託だった。けれど、全面的に私は助けられていたし、エルさんに必要だと、きつと思われていない。三国さんもきつと同じだ。ぬいぐるみほどにしか思っていないような気がするし、それは本位ではないし、プライバシーも、比呂巳の気持ちを隠しておきたいし。でもでも、お姉さまって呼びたい。そうだ、呼んでいるうちにエルさんも三国さんもまんざらではなくなくて……いや、それはないかな、だってお二方とも、女の子というよりは、職人、っていう感じだから、妹なんて欲しがらないだろうし。もちろん、そういうところは大好物なんですけどね。ああ、どうしよう。ああ、どうしよう。………だったら、また、徹底的に付き合ってもらっちゃえばいいじゃん！ 面倒臭い、もう全てカミングアウトしちゃおう。比呂巳には一人で勝ってこないんだ。でも、エルお姉さまと三国お姉さまのお力をお借りすれば、私の手帳に閉じ込められた思いは、きつと成就するに違いない。

弥恵はくるつとカゴのほうを向いて、ゴソゴソやって、手帳を胸に抱え、二人のお姉さまに向って振り向いた。そして、おずおずと口にした。「どうぞ、お読みになって下さい。お、お、お、お、お姉さまああ！」

ぞわわわわわ、エルの背筋は湯冷めしてしまった。いざ、言われるとあんまり気持ちのいいものではなかった。一方の三国は本当の妹に接するみたいに、「はい、ありがとう」と何食わぬ顔で手帳を受け取り、ページを捲っている。

さてさて、何が書かれているのかな。
しげしげと二人は文面に目を落とし始めた。

弥恵は段々と純白のパンツを凝視されているような気分になって

来た。二人の反応を知りたいような知りたくないような、そんな風に顔を両手で隠して、フルフルと首を振っていた。「読みましたか？ 読みましたか？」

『まだ』

「ああんっ」弥恵は水風呂に頭まで浸かりたい気分だった。幸いなことにココは浴場と扉一枚隔てただけの脱衣所。その気になれば直ぐに飛び込めた。「読みました？ ねえ、読みました？」

『……うん』二人はパターンと日記帳を閉じた。しかし、反応がまるで難解なポエム（詩ではない）を読んだような、困惑の表情を浮かべている。『読んだけど』

「どどどどどどでした？」

『どつって言われてもなあ（ねえ）』

二人は顔を見合わせて、なんと応えればいいか

その反応は弥恵の予想していたいくつかのパターンから途方もなくかけ離れていた。ドン引きされるか、からかわれるか、ケラケラと笑われるか、そんな風な反応を返されると思っていたのに、コレは一体どうということだろう。弥恵は初等部の四年、それほど小難しい表現技法も会得していなければ、先輩方の知らない外来語をふんだんに盛り込んでいるわけでもないし……。

コロンと可愛らしく首をもたげる弥恵に、エルは訊ねた。「この難解なポエム、っていうか暗号文がお前の大事なもののなか？」

はて、難解なポエム？ 暗号文？ 比呂巳への気持ちしが難解で、暗号だというのだろうか？ 弥恵はエルの手元を覗き込んでみた。

「違う、」弥恵は一気に冷めた顔になった。「私のじゃない。私はこんな難解な暗号文を書いたりしないもん」

その手帳に広がっていたのは、弥恵の流麗な文字ではなく明朝体のワープロ文字だった。書いてある内容も弥恵の比呂巳への微熱を帯びた気持ちではなくて、………うん、意味不明だった。

「じゃあ、弥恵ちゃんの手帳は一体？」

「もしかして、」エルは眉を小難しくしてアイツの顔を思い浮かべ

た。「アイツが、志が、私たちを欺くためにすりかえたんじゃないか？」

「志が、わざわざそんなことするかな？」

「でも、実際、志は私たちをおびき寄せ、この意味の分からないポエムを抱えて逃げた。そして、私たちは捕まえた。でも、それは虚構の勝利だったんだ。志が練ったシナリオだったんだ。こうやって脱衣所で脱力するように組み込まれた罠だったんだよ。どうしてって？ 決まっているだろ、アイツは私のことが大嫌いだからな」

弥恵は煮えたぎったエルの言葉を信じて、「そんなあ、志姉ちゃん……」と頂垂れている。そして、三国は「いやいや、それはないっつて」と思いながらも、理由というか、この状況が分かりかねていたし、なんだか面白くなりそうなのでエルに向って生真面目に頷いた。「志ってば、酷い。こうなったら総力戦もやむを得ないね」

三国がエルのガスバーナーの炎を青色に焚きつけた。そのときだった。三国のカゴから《メロデー》が流れてきた。三国はてててと駆け寄って、携帯を開いた。

画面を確認。すぐに堪えきれないという風に笑みが出た。エルと弥恵に背中を向けてひとしきりおかしさを味わった。いいタイミング過ぎる。まるでマリア様が仕組んだよう。

「エル、弥恵ちゃん」三国はキツと真面目な顔をわざと作って振り向いた。「リベンジのチャンスがやってきたわ。神様は私たちに味方してくれているみたい」

携帯の画面を二人にずしつと向ける。サバゲーを統括しているいわゆる神様は、ゲームの三日前に、クランのリーダーにメールを送ってくる。場所と対戦クランと時間がそこには記されていた。「明後日はイーグルスをポッコボコにしてやるうね！」

第七幕

【44】

さて、エルと志が、散々追いかけてつこを繰返した次の日の放課後である。

その日の第三トレーニングルームでは、ピアンネのダンス・ダンス・ダンス部がダンスの練習をしていた。エアロバイク、その他のトレーニング機具が並べて置かれている背面には一面バレエ教室のような鏡張りになっていた。その前に十人ほどのダンス・ダンス・ダンス部の部員は等間隔に並んで、くるくるとバレリーナのように踊っている、と思えばカラフルなダボダボのトレーナーを振り回したり、バク転やバク中を危なっかしく披露していた。それがダンスか？ と問われると即答しかねるが、彼女たちがダンスを踊っているとと言えるのは、壁からコードを伸ばしたステレオの音楽によってであろう。彼女たちは、手が自然と拍子を刻むような軽快で、かつ、どこか歪んで狂ったりリズムに合わせて、爽快に汗を振り撒いていた。『ヘイ！』少女たちの甲高い声が上がった。

ステレオから流れ出る曲をBGMに、ダンサーたちを背景に置いて、体操着にヘッドバンドといういでたちの志とエルは、肩で空気を裂いて第三トレーニングルームに現われた。二人はドンピシャリのタイミングで、両端の別々の扉から入ってきた。そして昨日、アシだけママチャリで走り回ったというのに飽きもせず、揃いも揃って、上半身の筋肉をストレッチしながら、まあ、ココに二人が来たらやることは決まっている、愛用のエアロバイクの場所までやって来て、互いを鋭く一瞥してから、サドルに跨り、ウイーンと重低音を鳴らし始めた。

ゆっくりと足を回転させながら、最初にエルが口にした。

「明日のゲームは、互いに近世ヨーロッパの哲学書を賭けようじゃ

ないか」

志は弥恵の日記帳を持っているはずだ。

「奇遇ね、私もそう言おうと思っていた」

エルはアリーナの詩集を持っているはず。

「ルールを決めよう。哲学書はクランの誰かが持つておく。もちろん、持っていると分からないように」

「哲学書を持つているやつを倒した方が勝ち。そういうことね」

「そういうことだな」

「分かった」志は淡々と頷いた。そして、前傾姿勢のまま、下を向きながら呟いた。「もう、エアロバイクはこれにて最後にしましょ」「そうだな」エルは目蓋をそっと閉じて、ゆっくり開けた。「もう、決着をつけてもいい頃合だよな。お前とのエアロバイクは生産性がなくて、ムカついてくるばかりだし」

「今日勝てば、一兆分の勝ちってことでいいよね」

「はあ、喧嘩売ってるのか、なんだそれ、バカか？」

「あんたの方が一勝多いじゃんか。それって不公平じゃない？ 今

日、私が勝ってもドローじゃない、簡単な足し算も出来ないの、バカっ」

「別に、ドローになるとは思わないけどな、でも、一勝は一勝だろ。そんな、深夜のバラエティみたいな甘えをお前に献上してどうする？ バカっ」

「バカみたいに狭量ね」

「お前もな、バカみたいに器が小さいな」

志は足に力をぐっと込めた。「エセハンガリー娘は、フランスの柔らかい音楽を聴いて、脳みそがふやけるまで温泉に浸かっていれ
ばいいのよ」

志の悪態で、二人の最後のエアロバイクの幕が切られた。

トレーニングルームの入り口で二人の様子を眺めていた、ゴールド&シルバーの賭けを取り仕切るトーテムポールの彼女は気が付いた。

今日は、何かが違うぞ。何かが違う。起承転結の転の字をすつぱりと抜いて結ばれようとしているような最終回なムードが漂っているのではないか。彼女たちの中で、何が交わされたのかは、彼女には到底分かるはずもなかった。彼女の職業は、トレーニングルームの外から、二人のエアロバイクを覗き見るだけである。彼女の賭け事に興じているちよいと将来が心配なピアンネ娘の群れも同様だ。

と、そこへパタパタという足音がして、その群れに新たに一人加わった。

「今日はゴールド」声はファイヤーボールみたいに熱っぽかった。
「ゴールドに三百」

トータルポールの彼女は時計を見やる。「ギリギリだったな」
結果を言えば、今日はゴールドに賭けた少女が勝った。つまり、エルは保健室に運ばれた。

【45】

さて、場面はだいたい二十四時間後の神代峠。だいたい一週間ぶりの神代峠の紅葉は鋭さを増していた。新鮮なペンキを塗ったような発情的な紅から、血液が濃縮されたような肉欲的な臙脂に移行していたハゲワシの足形のような葉っぱは、鋭く先細り、刺々しく、ヒステリックな雰囲気、神代峠に作り出していた。

めがね橋の下で白と黒と灰色で構成された迷彩服に身を包んだ、志、京子、綾の三人はそんな異様な景色の中で異様に見える。迷彩服はその景色に同化することを拒むように目立っているし、全員銃器を肩から提げているし、何より志の胸が不自然極まりなく膨らんでいたからだ。

もちろん本物ではない。一晩寝て、授業を熱心に受けたからといって、むくむくと膨らんでくる、というものではないだろう。

志はソコに哲学書を隠していたのだ。試行錯誤した結果、胸に隠すのが一番しっくりときた。志の一向に膨らみ始めない胸も、やっと

役に立ったわけである。だが、なんとなくだが、哀愁を感じてしま
うのはなぜだろう。

京子は自分の巨乳を棚に上げ、綾は程よく膨らんだ形のいい胸を棚
に上げ、『志様は貧乳のままがいいのに……』と思った。

本人がまんざらでもなさそうなので、口には出さないけれど。

首に下げたストップウォッチは、丁度、デジタル表示で十七時半
を知らせた。

【46】

緑色と黄緑色と黒色で構成された迷彩柄は、紅葉の中では黒髪の中
の一本の白い毛のように目立っていた。さらに目を引くのはエルの
異様に膨らんだ胸だった。似たもの同士、考えることは一緒だっ
た。

弥恵は自分の最近膨らみ始めた胸を棚に上げながら、「エルさん
の貧しいおっぱいが好きなのに……」と思った。

本人がまんざらでもなさそうなので、口には出さないけれど。そ
んなプライベートルートなことはともかく、

パンツ！

弥恵は慣れた手つきでリバルバーの試し撃ちをしていた。十歳の
脳みそはすでにリボルバーの弾道を、微細な部分まで飲み込んでい
た。この前、比呂巳にやられたようにはいかない。志の体中をペイ
ント弾で染める自信は不自然なほどにあった。弥恵は静かに勇を鼓
舞した。

お膳立てはエルさんが保健室に運ばれるほどの働きで整えてくれ
た。

後は、志姉ちゃんをやるだけだ。

「今日は勝手が違う」「三国がマガジンをセットしながら言った。「
どうする、エル？」

問われ、「決まっているだろ？」という好戦的な表情をエルは見せ

た。昨日のエアロバイクでの敗北で、エルの神経は限界まで高ぶっていた。

「電撃戦でいく」

エルの短い回答に、三国は楽しみに軽い声音で言った。「作戦もなにもなしってことね」

「電撃戦って、なんですか？」

「要するに、」と、そこでストップウォッチがゲームの開始を知らせた。「突撃だ」

イーグルスと反対側のめがね橋の下を、バルチャーズはエルを先頭に走り抜けた。

【47】

藤原と森川はイーグルスに遅れること十分弱、よもやピアンネ娘のサバゲーの舞台とは知らずに黒ブタのピエールを連れて、めがね橋の下を潜った。

どうして二人、そしてピエールがココに？

簡単な話だ。藤原はトリュフを求めてココにやってきた。『媚薬の研究』には『神代峠のトリュフ』と書いてあったが、森川の膨大な化学的なデータベースに、この国、トリュフ、峠、と検索をかけたところ、この場所しかヒットしなかった。トリュフには麻薬作用が大なり小なりある。別段、生産地にこだわる必要もないだろう、まあ、ドンピシャで『神代峠』は特定されてしまったわけなのだが、そんな按配で二人は臙脂色に染まった葉っぱをクシャリと踏んだ。

ピエールは「ぶひっ」とつまらなそうに鼻を鳴らす。

「こんな豚が本当に仕事をするのだろうか？」

森川が何気なく言うつと、

「ぶひ、ぶひひひ、ぶひ、ぶひぶひ！」まるで人間の言葉が分かったようにピエールはぶんすかぶんと森川の足元に柔らかいタックルを始めた。「ぶぶぶぶひっ」

「まるで人間の言葉が分かっているようだなあ」

藤原は少しざらつくあごひげを擦りながら少し感嘆していた。「
そういえば、ブタは哺乳類の中でも抜群に頭がいいと聞いたことがある」

その一声に、ピエールは「その通りだ」と言わんばかりに鼻をツンと上に反らした。

このピエールは養豚場から借りてきた。檻から連れ出そうとするとき、まるでミンチにされるのを恐れるように必死の抵抗を見せていたが、まあ、実際は男どもに抱かれるのを嫌がったのだが、ともかくトリュフを見つけるためには豚がいる、ということと藤原と森川は無理やり、腕に傷を作りながらも連れてきた。一応、養豚場で献身的に世話をしているアリーナの了解もきちんとしてあるし、そのアリーナによれば、このピエールはトリュフ探しの名人、いや名豚ということだから、きっと《媚薬》の材料を揃え、完成させることが出来るはずだ。

藤原は意気込んだ。

「さあ、ピエール。極上のトリュフを見つけてくれ！」

重低音のいい声が響く。

その響きを煩わしげに耳を垂らし、ピエールは「ぷひ」としぶしぶ歩き始めた。

どうして男のために……、なんていうやる気のなさがその豚足から窺える。

ま、早くトリュフを見つけて、アリーナの元へ帰ろう、そんな風にピエールは鼻を地面にそっとつけた。と、そこでピエールの嗅覚は捕らえた。

ピクツと耳が立った。

藤原と森川は『早いな』と顔を見合わせた。

そして、急に、まるで女の子の匂いを嗅ぎ付けたようにピエールは走り出した。手綱がピンと伸びて、引きちぎれそうなほどに張り詰めてから藤原もつんのめる姿勢で走り出した。その後を森川は追

った。

【48】

コードネーム、ペンギンこと片吟綾はスナイパーである。ワールドの高台にライフルを構えて陣取り、高感度の赤外線スコープを覗き、獲物が姿を現すのを待っていた。南極圏のペンギンが流氷漂う水面近くに現れる獲物を待ち伏せるように、じつくりと。

「エルは電撃戦を仕掛けてくるはずよ、昨日、私に負けて保健室だったからね、だから、あーや、今日の勝利はあなたのスナイパーライフに掛かっているわ、チャンスは一度、あーやのスコープにバトリングガンでエルに動きを封じる、そして私のマグナムで終わらせてやる、絶対に完璧な勝利を手に入れてやるうじやない！」

志様に必ず勝利を献上いたします。綾は鼻の下の汗を舐めた。と、そこへ、

………きたっ！ いや、違う？

綾はスコープから一度目を離し、再度覗いた。

この季節、日が沈むのが早くなり、すでにスコープの明度はフィルタールがかかったようになっていた。そのスコープから見えたのは、限りなく見間違いだとは思うのだが、二人の男の姿と一匹のブタ、だった。

「？」綾の頭は二人の男と一匹のブタがすんなりと飲み込めなかった。一体どういう状況で、こんな雑木林の中、こんな時間、二人の男が一匹のブタを連れて走っているのだろうか？ 考えられるのは、モテナイ男が結託して、媚薬を作るためにブタを連れてトリュフを探しにきた、とそんなことくらいだけれど……。

咄嗟の推測、近からず、遠からずといったところで感服したいところだが、まさか藤原と森川とピエールとは露程も知らないし、思いもよらない綾は、そんな推測はポンと放り捨てて、自分のスナイ

パーとして申し分ない裸眼を疑った。

バルチャーズのどなたか二人が髪をベリーショートにしたのかもしれないし、別に迷彩服を着なくてはならないというルールもないから、敵の目を誤魔化すためにスーツ、それと白衣を身に纏っているのかもしれないし、きつとブタに見えるのは犬で、別に警察犬を使用してはいけないなんていう理由もないから、私たちの匂いを犬に辿らせているのかもしれない。

一旦、そう思い込んでしまったら、綾の正確な裸眼は藤原と森川とピエールを、エルと三国と警察犬だと誤認してしまった。志様のために、と異常に気負っていたことも要因の一つだ。

綾の瞳は絞られた。標的に照準がピタリと合う。綾は引き金を引いた。火薬が炸裂して鼓膜を刺すシャープな音が弾け、匂いが鼻腔をついた。当たったか、当たらなかったか、綾は確かめなかった。今は狩りの快感を味わう必要はない。目的は陽動だ。綾は即座にリロード。弾が尽きるまで、綾は一心不乱に撃ち続けた。

【49】

コードネーム、レオパルドこと豹然京子はガトリングガンを一面紅い景色に向って構えながら数を数えていた。

二十五秒、それが、京子が割り出した、今、このときに必要な秒数だった。

「十、十一、十二……」陽動が成功して想定通りにことが進めば、綾のライフルの初弾の銃声から二十五秒でバルチャーはガトリングガンの銃口の前に現れる。だから、京子は数を数えていた。まるで御経を唱えているように、神妙に目を瞑りながら。「……二十、二十一、」

人の息遣いが耳に聞えてきた。さて、と京子は引き金を引く準備をした。と、そこで、

「？」と京子の頭が不自然な事象に反応した。人の荒い息遣いの中

に、混じるブタの鼻息。そして人の息遣いは確かに人の息遣いだ、バルチャーズのものにしては呼吸が鈍重だ。普段、あまり運動していない人、それも男のものではないだろうか？ 二十代後半と二十代前半の息遣い、それプラスブタ。限りなくバルチャーズではないと、京子の耳は言っていた。

でも、どうして？ 疑問が過ぎらないはずはない。

だって、一体どういう状況で、こんな雑木林の中、こんな時間、二人の男が一匹のブタを連れて走っているのだろうか？ 考えられるのは、モテナイ男が結託して、媚薬を作るためにブタを連れてトリユフを探しにきた、とそんなことくらいね。

咄嗟の推測、近からず、遠からずといったところで感服したいところだが、まさか藤原と森川とピエールとは露程も知らないし、そんなこと思ってもよらない京子は、そんな推測はポンと放り捨てて、自分の解釈を疑った。

それに、綾の銃声も何度も聞えている。きつと、何度も綾の鼓膜をつんざく銃声を聞きすぎて正確な音を聞き取れなくなったんだ、綾ちゃんの裸眼が獲物を見間違はずないもの。京子は綾の腕を信頼していた。

だから、

「二十四、二十五」で京子はガトリングガンの引き金をガチャリと引いた。けたたましい金属の炸裂音。目を瞑っていても弾は次から次へと掃射された。ものの十秒でカタカタカタという耳障りな空回りの音がして、京子は「ふう」と目を開け、バイザーを持上げた。もちろん、そこには敵の姿はなく、無残にも蛍光色に彩られた前衛芸術の風景が広がっていた。

「なかなか趣があるんじゃない？」

京子は景色を黄緑色に染め上げたことにご満悦のようだった。

藤原は狂い死にしようだった。綾のスナイパーライフルの連射をくらい、京子のガトリングガンを立て続けに浴びれば狂ってしまうのも頷ける。常日頃の公務員生活で、平和ボケに片足を突っ込んでいるような藤原が銃に慣れてはいるはずもない。普通に殺傷能力抜群の本物の銃弾を浴びたと勘違いしていたし、毒々しいペイント弾の色合いを細菌兵器か、何か強力で物騒な類のものであると咄嗟に思い込んでしまっていた。

どこの世界に狙い撃ちされる社会の教師がいるんだ！

藤原は走りながらそう叫びたかったが、喉が引きつって駄目だった。ともかく藤原は草葉の陰に飛び込み、ヘタリ込んだ。恐怖もそうだが、走り続けて足の方にもガタが来ていた。二十代後半を思い知らされる。全身の細胞が酸素に飢えていた。けれど、肺はすべての細胞の渴きを満たすことは出来ないとはばかりに、藤原に息を詰まらせる。

ピエールも同様に、今からトンカツ屋にカリッと揚げられる寸前の、現世に疲れきった顔をしていた。「ぶひひっ」

「大丈夫か、正史」

唯一、涼しげで平然としているのは森川だった。森川はすべてを分かっている風に落ち着いていた。まあ、ココでサバゲーが行われていて標的と間違えられた、とまでは分かっているまいだろうが、森川は藤原には信じられないほどの平静さで背中を擦ってくれた。

「悪いな、もう、俺も、歳だな」

「そうだ、三十間近が無茶をするもんじゃない。でも、男は三十からだよ」

「そんなことより、何だったんだ、さっきの銃は？」

「さあ、慌てて逃げてきたからな、」全く慌てていなかった風に森川は少し考えて口にした。「きつと熊にでも間違えられたんじゃないか」

「ココに熊が出るのか？ 確かにそういう雰囲気はあるが、でも、熊相手にガトリングガンはないだろう、知っているか？ ハンター

は猟銃を使うんだ。あんな代物、使ったりはしないよ」

「でも、それは日本やアラスカの話だろ？」

「この国は違うっていうのか？ 利洋、お前はこの国のことを何も分かってないな、この国は確かに何もかもが新しいさ、でも、全てが新しく生まれ変わったわけでもないし、新しさの程度もタカが知っている、俺はお前より五年早く生まれたから分かるんだが、この国は、本当の意味では、なんら新しくないんだよ、人は何も変わっていない、変っているのは、新しいのはな、うちの生徒ぐらいなものさ」

藤原は地面に叩きつけるように呼吸と一緒に言葉を吐いた。

「正史が熱弁するくらいなんだから本当なんだろうな」

「きつと、アレはトリュフ泥棒を退治するためのものだ。この場所はお前が知ってるくらいに有名なんだろ？」

「俺がかろうじて知ってるくらいにはマイナーなんだけれどね」

「ガトリングガンをぶっ放す秘密結社に知られるくらいにはメジャーってことだよ」

「だったら、俺はトリュフを秘密裏に売買している秘密結社の存在を肯定するより、さつき正史が言った、この国で唯一の新しいもの仕業だと考えるべきだと思うな」

「はあ？ うちの生徒の仕業だって言うのか？」

「うちの新しい生徒だったら、スナイパーライフルで狙い撃ちしたり、ガトリングガンをぶっ放したり、トリュフを非合法に売買していたりしても頷けるだろ？」

「ありえない」藤原は首を横に振った。でも……、彼女たちは新しい。それは藤原が一番良く知っていることだった。「それはありえないって」

「いいや、ありえると思うね」

森川の反論に、藤原は頷きかけた。そのとき、「ぶひぶひぶひ」とピエールが鼻を鳴らした。その鼻先はジャガイモでも放り込まれていそうな皮袋を突っついている。それは木の根元の落ち葉の影に、

まるで人の道徳を試すように、ひっそりと隠れていたのだった。

……まさか？

藤原と森川は顔を見合わせた。藤原は体中の脱力感を振り払って皮袋を開いた。トリユフっぽいものが入っている。森川に確認させた。頷くのを確認して、その皮袋を背負った。と、その拍子に藤原の手元から『媚薬の研究』がストーンと地面に落ちた。いけない。

比呂巳の大事な手帳だ。

藤原は一仕事終えた顔で拾おうと手を伸ばした。しかし、誰かの別の手がその手帳に伸びた。森川の手ではない。もちろんブタのピエールの前足でもない。その手は綺麗だった。指はほっそりと長く、ささくれの跡もない。まるで毎日、お付の人にクリームを塗ってもらっているようにすべすべとしている。爪も艶々と光沢を放っていた。

藤原の手とは対照的だった。つまり、男の手ではなく女の手で、十四歳くらいの若々しい手。

藤原はその手の持ち主を、例えば担任の教師程度に知っていた。

【51】

バルチャーズは志の、いやコードネーム《ルシファー》の後ろ姿を確認した。

どういうわけだが、隙だらけだった。

エルは三国と弥恵に指示をした。

ルシファーを三方から包囲し、抹殺する。

圧倒的な勝利は必ず手に入れる。エルは溢れてくる唾をゴクリと飲み込んで、

「辛抱だ」と自分の右手の筋肉を諫めた。「エルヴィーン・クイード・コンベルハイアー、あともう少しの辛抱だから」

志はマグナムリボルバーの銃口をスチャッと向けた。綾のスナイパーライフルと京子のガトリングガンに煽られてやって来たターゲットに対してだ。しかし、ガチャリと撃鉄を起こしたところで、志のカラーコンタクト越しの瞳からでも、それが本来のターゲットではない、ということがすんなりと脳みそに入ってきた。雑木林の中はうすらぼんやりと明度が下がってきたとは言え、ざっと三十メートルほどの距離、見間違えるはずがない。

藤原と森川とピエール、よね？

なんだって、こんな時間に、こんな場所に？

志は何がなんだか、この状況が飲み込めなかった。どうして、綾と京子がこの二人の教師と一匹を追い詰めたのかも分からなかった。追い詰められたのだと分かるのは、藤原はしんどそうに地面に向けて何やら怒鳴るようにしゃべっていたからだ。

……一体何用だろう？ 一度、担任をしてもらった仲である。もし出来ることがあるのなら、とそんな風に、志は警戒心を若干緩め、つまり、バルチャーズの鋭い眼光からすれば隙だらけ、丸裸の状態で、ゆっくりと藤原たちの方へ近づいていった。

ピエールが「ぶひ」と鳴いた。藤原と森川は顔を見合わせていた。志が「おい」と呼んだが気付かない様子。藤原は皮袋を手にして子供のような顔をしていた。森川が皮袋を覗き込む。「せんせえってば、」ピエールは志の存在に気付いて足元に寄ってきた。やつとお目当ての匂いに辿りついたとご満悦だった。そのじゃれ合いを他所に、森川は冷静に頷いていた。藤原は皮袋を担いで立ち上がった。その拍子に、藤原の手元から、

『媚薬の研究』が落ちた。

藤原の目前に辿り着いていた志の手は『媚薬の研究』にスラリと伸びた。物を落とされたから自然と親切心が働いた、とも考えられる。志は育ちがいいお嬢様だからだ。また、物を落とされたからそ

れを自分のものにしようとしたとも考えられる。志は育ちがいいお嬢様ゆえに強欲でもあるだからだ。けれど、その二ついずれともこの場合は当てはまらない。なぜ志の手がスラリと伸びたのかと思えば、自分の胸にある『媚薬の研究』が落ちたのだ、とそんな風に思ってしまったからだ。よくよく考えてみればきちんとジッパーが噛んでいる迷彩服の前方が突拍子もなくおっぴろげになるはずはないし、『媚薬の研究』を固定するために拝借した胸に巻いた腰のサポーターが外れたら真っ先に足の甲にぶち当たることは分かりきっていたことなのだが、このときばかりは自分が『媚薬の研究』を所持している、と勘違いしていて、さらに藤原が『媚薬の研究』を持っていないはずはない、という思い込みがあったから、自然に手が伸びてしまっていた。

「あっ」とは、キョトンとなった藤原の声だ。藤原は痛烈に「やべえ」という表情をしていた。

その幸薄そうな表情を直視してから、志はなにやら一連の現実が不自然なことに気付いた。ものの三秒間思考回路を一本にして、ともかくにも確認したかったことは、私の胸には胸がある。

志は自分の胸をペタペタと触った。

「いや、胸じゃなくて、『媚薬の研究』が長方形ないびつなFカップを作り上げていることがたつた今判明した。

志は現実を突きつけられてちよっぴり泣きたくなかった。大丈夫、まだ中二だもん。

と、も、か、く、

？そのFカップは今も絶賛大活躍中。

つまり『媚薬の研究』は私の胸の中だ。じゃあ、私が拾ったこの哲学書は？

志は藤原の妨害をのりくりりと避けながら、ページをペラペラと捲った。

白紙が続き、最後の数枚に、志はしかと確認した。

？藤原が落とし、志がたつた今拾ったものが本物の『媚薬の研究』だった。

じゃあ、私のFカップを構成する大事なものは一体、何？

志は藤原とゆつたりとした追いかけてこをしながら自分の胸を弄って、胸の元を取り出して、保温され、志のいい匂いの香る、もちろん志には無味無臭だが、今まで『媚薬の研究』と思われるものの中身を開いた。

……何、コレ？

例えていえば、……自己啓発本の類に括られるのだろうか？ 本物の『媚薬の研究』の大多数のページを占める白紙とは対照的に、そのめいめいのページは酒蔵の帳簿のようにびっしりと黒く達者な文字で埋められていた。白紙のページはたった四ページだけだった。その黒く達者な文字が構成する文言は、自分を奮い立たせる、というか、そういう種類のものが多い。それは志がホップステップジャンプをしながらでも分かった。「性別とか関係ない！」とか、「性別とか関係ない！」とか、「性別とか関係ない！」とか、「性別とか関係ない！」とか。正直、志にはまだ早すぎた。

なんだか見ているだけで呪われそうなので、志はその内容を忘れるようにその偽物をそっと閉じた。

そして太い木の幹をグルグルと追いかけてこするのを志の独断で強制終了させ、振り向き、追ってくる藤原を慄かせる戦闘機のような剣幕で、

「藤原！」と、まるで近世ヨーロッパの哲学書の頑丈な表紙をタンタンと叩きながら、がなった。「どうして藤原せんせーが『媚薬の研究』を持っているの！」

追いかけるんじゃないかと、逃げた方がこれからの出処進退のためだったな、と藤原は「うっ」と情けない顔で後悔していた。咄嗟に口封じのために追いかけてこしてしまったが、相手は志だ。ゆえに平穩無事に済む見込みはほとんどないのだ。いろいろと悪名を付与されて、ピアンネ娘の間に吹聴される可能性も無きにしも非ずだし、

その噂が教職員の耳に入る可能性も無きにしも非ずだ。

藤原は引きつった真顔で嘯いた。「一体なんのことだかさっぱりだ？」

「とぼけるならもつと上手くとぼけてください！」

マグナムリボルバーを藤原の顎の骨にぐりぐりとやりながら、コレが結構痛い、志はミサイルが弾けたように怒鳴り散らした。「とぼけたって無駄ですよ、もう全てお見通し、藤原せんせえ、あんたがロリコン野郎だったんですね、そうでしょ!？」

藤原は額から下を一瞬で青くし、観念したように目を伏せた。が、往生際悪く、また呟いた。「一体、なんのことだか、さっぱりだな」藤原はB級映画の主演俳優のように首をすくめた。

つまり、クロだ。

藤原「ロリコン野郎（正しくはホモ野郎だ）。志はどうしてソレに気付くことができたか？ いやいや、気付かない方がおかしい。志のカラーコンタクトは視界の端々にヒントを見つけていた。『媚薬の研究』とトリユフ捜査に長けたピエールと以前志が回収したトリユフ入りの皮袋だ。

子豚でも解ることだ。志は最近起こった出来事にロリコン野郎の藤原を加えて整理してみた。

多分きつと、藤原が必要としていた『媚薬の研究』がひよんなことで図書館に紛れ込んでしまったんだ。ソレを私が偶然にも見つけて借りた。藤原がソレを知ったのは、……ああ、あのときだ。階段の踊り場で追突したときだ。そういえば若干藤原の挙動がおかしかったような気がする。そして、ロリコンの藤原は、きつとロリータなピアンネ娘をたぶらかすために媚薬が必要になったから、私に脅迫状を送りつけたんだ。理由はなんとなく分かる。まさか直接私に頼み込むわけにもいかない。なにせロリコンの教師というねじれたプライドがあるから。つまり藤原はロリコンであると発覚するのを恐れたんだ。ともかく、藤原は私の下駄箱に脅迫状を送りつけて、『媚薬の研究』を手放させるように仕向けた。しかし、何らかの事

情があつて藤原は指定の時間、指定のテレフォンボックスに現われなかった。その事情がある種のアリバイになつて、藤原がロリコン野郎と特定されるのを防ぐためか、藤原は再度、また脅迫状を送つてきた。けれど、根がロリコン野郎だから啖呵を切つたが行動を出せずにいたのだろう。私たちが動き出すのを待っていたんだ。私は一向に図書館の返却期限を守らなかつたし。そういえば、そろそろ督促状が届く頃合かな……。

志の推測はざつとこんな感じた。再度断つておくと、藤原はロリコンではない。ホモで、ゲイで、同性愛者だ。その決定的な事実を露程も考えずに、志は藤原がどうして現在の『媚薬の研究』の所有者であるのかを……考えるまでもなかつた。

すり替えられたのは、あるときしか考えられない。

『三国さんには縛られただけです。私と綾ちゃんが発弾のように眠っていたのは、睡眠薬のせいです。でも、誰に何のために眠らされたのは分からないですね。化学部の悪戯かもしれません。あの部には顧問の森川を筆頭に、奇人変人が多いですからね』

と、京子が言っていたことを思い出しながら、志は下唇を噛んだ。つまり、藤原はあの時、エルとママチャリで追いかけてこしている間に、草笛寮二〇一号室に睡眠薬（森川が作った）を投げ入れ、『媚薬の研究』と呪いの書をすり替えたのだ。どうして草笛寮に『媚薬の研究』があることに気付いたのかと言えば、志たちが新聞部に掲載してもらつた『遺失物拾得欄』によつてだ。完全な漁夫の利をくらつたわけだ。どうしてバルチャーたちがやってきたのかは謎だけれど……、もしかして藤原が仕向けたのだろうか、ロリコンは悪知恵が働くというし。ともかく藤原にしてやられた。そのことに今の今まで気付いてなかつた。敵はエルの他にもいたのに、私は見えていなかった。目の前の敵に没頭するあまりに視野が狭くなつていた。悔しくて堪らない。

けれど藤原の手の平で転がされていたという事実より、やっぱりセンサーシヨナルに心臓を抉つた事実が、

「藤原せんせーがまさか《ロリコン野郎》だとは思いませんでしたよ！」この勘違いに他ならない。「小さい女の子があんなことやこんなことしたって意味で好きだったんですね！信じられない！私のこともそういう目で見ていたのね、そう考えるとぞっとする！ロリコンキモ過ぎ！」

そして何より陵が不敏だった。陵はこのロリコン野郎と結婚したのだ。確かに藤原はドラマで考古学者の役を当てられそうな洪めのちよっぴりイイ顔をしていたし、山岳用のリュックサックが似合う髭も中々素敵だったし、人当たりのよさは志と普通に会話が成立している時点で証明されているし、体の芯まで優しく、ピアンネ娘たちからも適度な人気がある。あるかもしれないが、藤原はロリコンなのだ。ロリコンでは駄目だ。ロリコンでは駄目なんだ。

「陵せんせーのことを考えて心が痛まないんですか！？ロリコンの分際で陵せんせーみたいな綺麗な人と結婚しやがって！」

志のマグナムリボルバーは暴発寸前だった。

「いやいや、アメ、ともかく落ち着いてくれ、落ち着いて聞いてくれ、俺はロリコンなんかじゃない、いいか、もう一度言う、俺はロリコンじゃない」くどいようだが、藤原はロリコンではなくホモだ。「今までのことをちゃんと話す、話すからどうか話を聞いてくれ」

油汗を顔中に浮かせながら、必死に宥めようとしても、志はすでにコッテコテのロリコンが書いたような脅迫状を読んではまっているから、今さら藤原の言うことに聞く耳持てなかった。さすがの志も、ロリコンは怖いようで、怖いからこそコレだけ好き放題悪態をついているのだが、マグナムリボルバーで威嚇しながらじりじりと後ずさり距離を置いた。ロリコンされないためにだ。もう、藤原の言うことは全てロリコンするための戯言にしか聞えない。

つまり、

「ロリコンの話なんて聞いても分からないわよ！」という分かりやすい拒絶反応を見せている。志は藤原に銃殺を試みた。「しねえええええええ、ロリコおおおん！」

が、しかし、志は過ちを犯さずにすんだ。森川が志のマグナムリボルバーをストンと蹴り上げたのだ。鈍く光る銀色が宙に舞う。

志はペテンをくらったような呆けた顔でただの理科の先生とは思えない森川を見ていた。翻った白衣で一瞬だが目の前が白に包まれた。

その隙について、森川は半ば放心状態の藤原の手首をぐつと掴み、志の足元に転がっていた『媚薬の研究』（？）を掴み、トリユフの皮袋を抱えて逃げた。

「あつ、」虚を突かれた志は三テンポ反応が遅れた。「待て、ロリコン野郎っ！」

叫びながら志は地面に落ちる寸前のマグナムリボルバーを、身を沈めキヤッチして、萎んだままだった胸に地面に転がっていた『媚薬の研究』（？）を胸にあせあせと仕舞い直し、低い姿勢から、クラウチングスタートの要領で、素晴らしいスタートダッシュを見せた。そしてそのまま加速……、出来なかった。そういえば、

『ホールドアップ！』

もろ手を挙げて降参しろ、そんな意味合いの重なった文句が何回か耳に入ってきていた。しかし、ロリコンを追うことで高ぶった志の神経はソレがなんなのか、即座に処理出来ていなかった。出来ないまま、

ガッソ！

志の脳天は空間転移してきたばかりのように突如目の前に現われたエルの硬い胸に派手にぶつかった。

【53】

バルチャーズの包囲は完了していた。志の前方の十メートル離れた木の幹の陰にはエル、左方には三国、右方には弥恵が潜んでいた。磐石な布陣だった。どこへ行っているのやら、ココにはうざったい

ガトリングガンもまるでストーカーのスナイパーもいなかったし、あとはバカで無能で隙だらけの志のバイザーをライトグリーンにしてやるだけだ。

けれど、問題が一つ。いや、二人。

志の周囲にいる二人の男が問題だった。ピアンネに幼稚舎から通っているエルには当然見覚えがある。初等部の社会の教員の藤原と同じく理科の教員の森川だ。一体こんな場所で何をしているのだろうか？ まさか、サバゲーを取り締まりに来たわけでもあるまいし。私立ピアンネ女学園の放任主義はこの国の常識だったし。

けれど、ピアンネもいわゆる学校であることには変わらない。理事長の思いつきで急に学園の校風がきつちりとした方向に転換することも充分にありえる。二十世紀中頃の極端なファシズムを持ち出すまでもなく、長い歴史の中でそういう急激な出来事は繰返されてきた。もし、そうだったら、ピアンネ娘たちはどうするだろうか？ 抵抗する以外に何があるのか。

ともあれ、さささと忍者、もといくノーのように徐々に距離を詰めていったエルは、

《ロリコン》

という一見可愛げがあるが、とても卑猥な一語を聞いた。

ん？ ロリコン？ なんでこんな場所でロリコンなんていう場違いな用語が出てくるんだ？

エルは不思議がった。様子を窺う。どうやら《ロリコン》が元で口論に発展したらしい。さらに神経を敏感に尖らせて、志の言葉を聴く限り、藤原はロリコン、だということがなんとなく分かった。

「……えっ、マジで!？」

エルは小さく呻いた。だったら、とエルは過去の藤原との接点をざあつと点検していった。すれば思い当たるふしがあった。臨海学校のときのアレ、初等部の修学旅行のときのアレ、体育祭のときのアレ、藤原がロリコンであるとする、全ての事柄に上手く説明が付いた。つまり、藤原は真性のロリコンなんだ！

だったら、この状況はなんだ？

なんだかんだで美少女の志と二人のロリコン、それに口論を足した状況ってなんだ？

思いつくことはコレだけだ。

ロリコンだ！ 藤原と森川は志を拉致って、監禁して、ロリコンする気に違いない。

「……作戦変更」

作戦は電撃戦、つまりあってないようなものなのだが、エルはマイクに向って小さく、そして若干カツコつけた風に言った。「藤原と森川の二人を叩くぞ」

『はいっ』と弥恵は了解した。『にゅーふあんぐ、了解！』
けれど、

『えっ！？』と三国は戸惑った声を上げた。『エル、いきなり何を言うの？ 絶好のチャンスを逃す気？』

「志を倒すのは、ロリコンの二人をやってからでも遅くないだろ。ロリコンは女の敵だ。生かしておくわけにはいかないだろ。べ、別に志がロリコンにロリコンされるのが心配だからって言うてるんじゃないんだからな！ 志を倒すのはこの私なんだ、ロリコンじゃないんだ。むざむざとロリコンにロリコンされてもらっちゃ困るからな、そこるところ、勘違いするなよな」

『了解です！』

血が沸騰したような返事をする弥恵の一方で、イヤホンから届くエルのツンデレのようなそうでないような早口を聞きながら、三国は「ん？」と思わざるをえなかった。三国のアングルからだど、志が高慢ちきに「ロリコン野郎！」と藤原を罵っているのが良く見えた。藤原のたじたじな表情も良く視認出来た。だから、むしろいつそこの事、志を早く黄緑色に濡れさせてあげないといけないように、弥恵と三国には思われたのだ。ロリコン野郎も、なんだかいいがかりっぱいし。

けれど三国の反対側からのアングルから同じような光景を見てい

た弥恵にはそうは見えなかった。志が『ロリコン野郎！』と罵っていることに対しては何の疑問も起こさなかったし、むしろ加勢したいくらいだった。この頃、比呂巳と仲良くしゃがって！ てめえ、ロリコンだろ、ロリコンだったからロリな比呂巳と仲良くしていたんだな、ロリコンは比呂巳に近づくんじゃねえ、ってな悪い言葉で藤原を討伐してやりたかった。ちよいと私事の怨念のほうが強いうである。これじゃあ、正常な判断を下すことなんて出来やしない。つまり藤原をロリコン野郎と断定しているのは、この時点で志とエルと弥恵だった。そしてこの状況を冷静に判断していたのは森川と三国だった。

そして、不意に森川が動いた。これ以上、志に向かって説得を続けたも拉致が明かないとクールミントに判断した森川は、さささつと志の側に近づくと、志の手のマグナムリボルバーをすんと上空に蹴り上げたのだった。

それが合図になった。

大変、志がロリコンにロリコンされちまうかもしれない、そんなの嫌だ！

エルは癩癩を起こしそうなほど、理屈とかどうでもよくて、志がロリコンされてしまうのは嫌だった。間髪いれずにエルはマイクに向って短くがなった。「行くぞ！」

エルは木の幹から躍り出て、銃を構え全力疾走。弥恵も合図に従って飛び出した。

『了解！』了解もしていない三国も、仕方がないから全力疾走。ああ、もう！ という心境だった。話が折られてしまったような台無しな気分だった。けれど、三国は二秒後にはこの状況を楽しみ始めていた。さすが、クラスメイトからミス・ポジティブシンキングと呼ばれているだけのことはある。先生を狙うことなんて、なかなか出来ないもんね！ そうよ、あのせんせーはロリコンなんだ。勘違いってよくあるからね、撃つてもよし。問題ナッシング！

三国はアドレナリンを大量に分泌しながら、思わず叫んでいた。

「ホールドアップ！」

弥恵も真似て「ほーるどあっぷ！」と意味は分からないながら一生懸命に怒鳴った。

それに続き、最後は、エルの番、……にはならなかった。

三国と弥恵の二人の《ホールドアップ》を障害物と判断した森川が、スピードを緩めず、藤原の手を引いて体当たりせんばかりにエルの方向に走ってきたからだだった。サブマシンガンを構え、「ホールドアップ、」と言い掛けてエルは慌てて二人のロリコンをかわした。うわっ、よるな、ロリコン！ という風なゲテモノを払うような配置で、寸でのところであわしたのだ。と、そんなときだ。

エルはフルアクセルの軽自動車に跳ねられた、というのは冗談で、志の脳天がエルの心臓を襲った。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

エルは志の強烈な頭突きを浴びた胸を両手でぐつと押さえ、溜まらず膝を付き、うずくまり、呻いた。膨らむはずだった胸のつぼみをつぶされたような、センチメンタルな痛みだった。暗号文のポエムを胸に仕込んでいなかったら、被害はもっと深刻なものになっていたかもしれない。例えば、陥没するとか。エルは目尻に涙の粒を溜めながら、理解不能だがポエムだと分かるポエム集に陳謝したい気分だった。が、鈍痛がなかなか引かない。だから立てなかった。

傍らの弥恵の顔は、ペンキでも塗ったかのように群青色に変色していた。「しつかりしてください、エルお姉さまあ！ エルお姉さまってばあ！」

弥恵は淡々とエルの顔を覗き込んでいる。

そんなに心配そうな顔するなって……、でも、エルはなんだか幸せな気分だった。

「ああ、エルお姉さまのおっぱいが、エルお姉さまのなかなか膨らんで来ないおっぱいがあ」

弥恵は泣きじゃくり始めてしまった。……エルの気分は複雑だっ

た。

「弥恵ちゃん、大丈夫だよ」三国が弥恵の頭をポンポンと叩いて、
いとも簡単に言つてのける。「おっぱいはそんなに簡単にやられた
りはしないよ。もしかしたら、さっきの強力な刺戟が、エルのおっ
ぱいを開花させるかもしれないし、」

強い刺戟を与えるだけでおっぱいが大きくなつたら苦労しないっ
て。

「まあ、逆に引つ込んだかもしれないけどね。でも私はエルの貧乳
が大好きだよ！」

……人が苦しんでいるときくらい、Gカップ級の楽天的な話をし
てくれてもいいのに。変なところで冗談を言うんだから、この人は
そうだ、きつと冗談だ、冗談だ、冗談だ。

胸の将来のことを考えないためにも、エルは目の前で両の瞳をば
つてんマークにして気絶している志を見やる。

思えば、互いに助け合おうとするところがなかった。

初等部六年の体育祭の二人三脚。最高のタイムを目指し練習し
ぎたせいで、翌日、足首を結んだ紐が千切れて失格になったり、テ
ニスでダブルスを組めばセンターライン辺りでぶち当たるし、シン
クロの授業でシンクロし過ぎて周りのピアンネ娘に気持ち悪がられ
たし、思い出せば次から次へと出てくる。

そして今回、志を助けようと思った矢先の頭突きである。エルは
もうムカついて仕方がなくなっていた。いつの間にか胸の痛みは気
にならなくなるほどに落ち着いていた。

エルはおもむろにスタツとたつた。志は気絶している、というよ
り快眠しているようだったから、さらに腹が立った。三国と弥恵が
「？」と見つめる横で、エルは志の腹にペイント弾を打ち込んだ。
これで、バルチャーズの勝利は確定した。実にあっけない。けれど、
今回は賞品がある。それがせめてもの救い、かな。

「え、エルお姉さま、い、い、一体なな何をお！？」

突然、エルお姉さまは大胆にも志姉ちゃんの胸をまさぐり始めた

のだった。もちろん件の弥恵の日記帳のことに関連してのことである。志の胸は形の正確な長方形でいびつだったから、すぐに分かった。そして志も同じことを考えていたのかとエルはさらに腹が立った。

……だから、何の脈絡もない、だからだけど、《志のおっぱいの成長を確かめるくらい》、どうってことないよな？ 私たちは女同士だしな。

触診の間、弥恵は顔を真っ赤にしながら、エルの積極的な行為を一部始終つぶさに見学していた。まるでオペを見学する医学部生のように熱心に。そして二人を見て、ニコニコと面白がっているのは三国だった。

そんなに乳首の大きさまで調べんでもいいのに。

そんなに熱心に見ていないフリをしなくてもいいのに。

もう、面白いなあ、こいつら。

「……むう、やっぱり一緒かあ」

エルは指を卑猥に動かしながら、やっと胸の大きさが寸分違わずドロ―であったことをしぶしぶと認めた。しかし、認めたが、将来のために、頭突きのお返しにエルは志の胸のサポーターをきつく縛っておくことを忘れなかった。まるで種が撒かれた畑にコンクリートを流し込んだような気分で、まあ、多少、うん、清々とした。

そしてエルは弥恵に志の胸から引っ張り出したものを差し出した。

「ほら、お前のだろ」

【54】

「むう、凄い哲学ですなあ」

神代峠の東側の秘密基地の二階のとある一室では、比呂巳は熱心にある意味での哲学書を読み、その計り知れない哲学に感嘆していた。

暗い六畳半の室内では、机の上のスタンドライトの明かりが眩し

い。肉欲的なオレンジ色のライトは哲学書のページを強調していた。男と男の絡み合いが強調されていた。つまり、ただの哲学書ではない。

それはボーイズラブ、またはBLと世間一般で認知されているところのものではある。が、比呂巳はBLを《哲学》とかしこまって呼んでいた。BLについて月並みの十歳は読んだこともないどころか、存在を知りもしないだろうし、BLを読んでいる、なんてやっぱり恥ずかしい気持ちもあるから、親友とおしゃべりしたりするときなど、どうしてもBLのことが口をついてしまう場合などは、もっぱら『哲学ではね、』と前置きしてから話すようにしていた。

ともかく、BLは比呂巳の哲学である。少なくとも比呂巳が比呂巳であるために存在する、重要な要素の一つであることには間違いない。比呂巳は男が男にあんなことやこんなことをする場面を様々な角度から分析しながら、十歳が持つ疾風怒濤の好奇心を満たし、同時にそこから哲学を引き出して体得していく。その苛烈な好奇心と探求心は彼女の専売特許であった。

比呂巳は先天的に最強である。だから何をしても常に一番は約束されていた。それは楽しくて幸せなこともかもしれないが、本人からすれば、退屈なことだった。唯一面白いと思えたことは親友との競争だけだった。そのときだけ、比呂巳は本気で笑うことが出来た。

けれど、その親友は年を追うごとに、特に十歳になってからどことなく冷たくなった。同じクラスだからおしゃべりはもちろんするけれど、いつも比呂巳の頭上を見ているというか、親友はどこかうわの空だった。からかってもそっけないし、つまらない。もっと楽しませてよ！ 私たち、親友だろ？

そんなときに比呂巳は藤原と森川の、ヒメゴトを目撃してしまった。レバーをガッコンと引かれたような気分だった。激しく、鮮烈で、濁流だった。すぐにネットで男×男の関係を検索した。膨大な情報量がヒットした。それらを長い時間をかけて見ていった。『哲学だ』という感想が思わず比呂巳の口から漏れた。そして、BLは比呂巳

に初めて『難解だ』と言わせたのである。それから比呂巳はB Lにのめり込み、あくなき好奇心を注ぎ込んでいた。

それは両親にも、もちろん親友にも、親友の親友が大好きな兄貴にも言っていない、最強で、純粹無垢で、天真爛漫な比呂巳の唯一のドロドロとした、ブラツクな部分だった。そしてB Lの研究室は主に秘密基地の二階のこの部屋である。畏だらけの秘密基地はまさしくヒメゴトを行うにはもってこいの場所だった。

比呂巳は今日も時間を忘れ、B Lに没頭していた。瞬きの回数は極端に少ない。逆に呼吸は荒かった。比呂巳のお凸にはヒエピタが張ってあった。知恵熱が出てどうしようもないのだ。鼻にはティッシュが詰められていた。鼻の穴の血管が老朽化した水道管が破裂したように勢い良く破裂したのだ。

男×男からは何も産まない。けれど、この興奮はなんなのだろう？もしかしたら人間の新しい有り方、なのではないか？

同じ性別での掛け算、それは比呂巳の妄想を掻き立てる。ふと、考えが横道に逸れた。女×女ってどうなんだろう、って。想像してみる。こういうときに簡単に、自然に思い浮かんでしま

うのは、自分と親しい誰かのカップリングだ。

脳内では、比呂巳×親友の妄想が稲妻のように駆け巡った。

『比呂巳ってば、可愛い』

『ああつ、そこはあ、ら、らめえ！ らめだつてばあ！』

途端、比呂巳の上気した頬はさらに紅く染まり、叫ぶしかなかった。「どうして私が受けなんだよ！」

妄想は吹き飛んだ。はつとして、首を横に振りながら、比呂巳は「あ、危なかった」とげんなりとした。確かに興奮するけれど、なんとというか、ベクトルというか、ともかくB Lとは感じ方が全く違った。どうしてだろう？ 私が女だからかな、全然分らない、難しい、難解だ、G L、コレも熟考の余地ありだ、なんて比呂巳が思索を巡らせたときだった。

ピーン、ポーン。

秘密基地にインターフォンが鳴り響くとは、これ如何に。まあ、秘密基地と言つても外見は小ぶりな文化住宅だから、それは建設当初からついていた。コレからも外す気はなかった。外してしまつたら、B L本を手に入れる術がなくなる。比呂巳は年齢を偽り、ネット通販で非合法にそれ、いかがわしい本を入手していたのである。よい子はまねしちゃダメだよ！

比呂巳は鼻のティッシュとヒエピタを剥がし、玄関へと向つた。鍵を開け、ドアを開く。無警戒にもほどがある。美少女はちゃんと来客の身分を確認してからドアをあけなきゃダメだよ！

と、そこにいたのは藤原と森川だった。比呂巳は思いもよらぬ来訪者に一瞬キョトンとしてしまった。この場所を藤原にも、当然接点の薄い森川にも教えたことはない。なんで？

一方の藤原もどうして比呂巳がこんなところに、とキョトンとしていた。その横の森川がいかにも追つ手から逃げています、という風に、

「ともかく家のなかに入れてくれ」と短く言つた。比呂巳は顎を少し引いて、藤原と森川を秘密基地に招き入れた。

「どつぞ」

比呂巳は二人を和室の八畳間に案内し、なんだかどつとお疲れの様子子の藤原にお茶を勧めた。「粗茶ですが」

「悪いな」

藤原はお茶を一口啜つてから、罪を告白するように話し始めた。

もう洗いざらい全てだ。比呂巳になら最高裁の判事よりも、比呂巳はいい言葉を投げかけてくれそうだったから。比呂巳は言った。

「そんなことよりも、今、材料は全部揃つてるの？」

その一言と好奇心で出来た瞳で藤原の心は大分軽くなり、横の森川に視線をやる。

「ああ、」と森川はトリュフと、それ以外の材料、粉とか、粒とか、粘土質の灰色のものを白衣のうちポケットから取り出し、比呂巳に差し出した。

「よし、じゃあ、今から作るうよ、この媚薬の効能、ずっと確かめたかったんだあ、トリュフは簡単に手に入れることが出来るけど、他の材料までは手に入りにくかったから、今まで作ったことなかったんだよ」

ということ、キッチンに移動して、藤原と森川と比呂巳は手分けして媚薬の調査を開始した。まるでカレーでも作っている雰囲気。子一時間ほどでソレっぽいものは完成した。「できた」

鍋の中には一リットルほどのラブ・ポーション。

比呂巳はお玉にすくい、クンクンと匂いをかいだ。すぐにお玉を鼻から遠ざける。むせ返りそうなほどの濃厚な匂いだった。比呂巳はそれを青色のガラスのコップに注いで、「じゃあ」と藤原に差し出した。「味見願います」

藤原は首を振った。「いや、ココは理科教師の森川に」

森川もいかにも嫌そうに視線を遠くの方に逸らした。「いや、俺、媚薬には興味ないんで」

二人とも、その毒々しさに完全に及び腰だった。見た目、完全に毒だった。確かに効き目は凄まじそうだけれど。

「もう、しょうがないな。じゃあ、私が飲むよ」と二人を見かねて比呂巳は奮迅とコップを手にした。「もし、私がせんせーたちに積極的に迫りだしたら、必死で逃げてよね。二人とも、ゲイで、ホモで、同性愛者なんだからさ」

比呂巳は《媚薬》をゴクゴクゴクゴクと栄養ドリンクを摂取するように一気に飲みほした。藤原と森川は少し心配そうに見守る。その気遣いを他所に、比呂巳は一言、

「意外と上手いんだね」と呟いた。

それ、上手いのか？ って味のことよりも、藤原が欲しいのは《媚薬》の効能の方だった。本当に効くのかどうか、興味関心はソコにしかなかった。で、どうなんだ？

「んー、少し体がポカポカしてきたような気がしないでもないけど、んー、まだかなあ、良く分かんないけど」

「そうか、」と藤原は少し諦めかけた。古いタイプの人間だから、《媚薬》と聞くと漫画のような即効性のあるものと勘違いしていたが、そうではないらしい。「あっ、そういうえば、忘れないうちにコレを返しておかないとな」

と藤原は『媚薬の研究』を比呂巳に手渡した。と、そのときだ。ピーン、ポーン。

またもや、インターフォンが鳴った。来客がこつも続くなんて、秘密基地として失格だ。比呂巳はそんなことを考えながら、『媚薬の研究』を手に持ったまま、ドアを開き、客人を迎えた。

親友の弥恵だった。比呂巳はいきなりだったから、キョトンとしてしまった。そしてなんだか体がポカポカ、いや、ムラムラとしてきた。さつき想像した比呂巳×弥恵が発熱するように思い返される。なんだか変だ、おかしい、いやこれが《媚薬》の効果か、だったら正しい、でも正しくない、だって相手は親友で、女の子の弥恵なんだよ？

「比呂巳？」

弥恵の心配そうな顔が水晶体で屈折したところで比呂巳の意識は、ソコでめがね橋の向こう側まで飛んでいってしまった。そこから先は覚えていない。一生、その後何が起こったか思い出すことも出来ないだろう。高野家秘伝の《媚薬》とは、つまり、そういう過激なものだった。

【55】

京子と綾はもうすっかり戦闘体制を解き、夕日が差し込む雑木林の中をまるでデートしているみたいに肩を並べ、ゆっくりと歩きながら、志を探していた。

「京ちゃん、この前の話だけど、」

「この前？」

「その、私たち、付き合うとか、付き合わないとかの話」

「……そんな話したっけ？」

「そんなあ、覚えてないの？ 京ちゃんが言ってきたんだよ。私たち付き合わない的事なこと」

「ああ、そういえばしたねえ」

「私、考えたんだけど、」

「何を？」

「別に女同士だったら、ハーレムを許されるんじゃないかってこと。先日、ギャルゲーを思い切つて購入いたしまして、そう思った次第で」

「何よ、藪から房に」

「つまり、京ちゃんと志様と同時に付き合っちゃってもいいんじゃないかなって」

「つまり何？」

「だから今晚京ちゃんと志様の部屋に、」

「駄目」

「なんで！？ 京ちゃん、私のこと好きって言ったじゃん！」

「私、中途半端は嫌なの。付き合うんなら、志様の召使を解任してからね」

「そんなあ、私の性格知ってるでしょ？ 惚れっぽくて、好きになつたらストーリーカーになっちゃう、情緒不安定で危ない女なんだよ！」

「綾ちゃんは、大丈夫よ」

「駄目だもん！」

「大丈夫、綾ちゃんは大丈夫。一途でしょ？ 浮気性だけど、一途でしょ？」

「なんだか誉められているような気がして頷いた。「うん」

「私はそういうところを好きでいてあげる。こんな風に手も握つてあげるし、腕も組んであげるし、ほっぺにキスくらいならしてあげる」サービス精神旺盛な京子はいちいちそれらを実践していった。

「それでも駄目？」

「……全然、大丈夫」

真顔で見つめられ、綾は顔を真っ赤にして俯いた。と、その視線の先に志を見つけた。思いもよらないアへ顔で眠っていた。

『志様？』

綾と京子は顔を見合わせ、志のいびつな胸の膨らみがなくなってペイント弾が打ち込まれているのを確認して、このとき初めて負けてしまったのだと理解した。まあ、通信が途絶えていたから、予想は付いていたけれど、アへ顔は予想外だった。一体何の夢を見ているのやら。

ともかく、こんな場所で寝かせておくわけにはいかない。かなり気持ち良さそうなので起こすのは躊躇われたが、そういえばどうして寝ているんだろう？ まあ、それは後で志から聞くとして、京子と綾はわしゃわしゃという手つきで揺すり起こした。

『志様、起きて下さい。風邪を引きますよ。大切な喉をやられますよ。志様つてば、お姉さまに怒られますよ』
すると、

「はっ」と跳ね起きた。「あいたたた」と脳天の辺りを擦って、京子と綾に視線をくれて、そして何かを思い出したように叫んだ。「

ロリコンは！？ ロリコンはどこに行ったの！？」

『ロリコン？』

京子と綾は仲良く小首を傾げた。「ロリコンつて、小さい女の子が大好きな犯罪者予備軍のことですか？」

「うん」

でも、ロリコンどころか、ここにはイーグルスの他には誰もいない。志様はまだ夢の中なのでしょうか？ それとも頭を打って幻覚でも見ているのでしょうか？ コレはホスピタルで検査をしたほうがよろしいかしら？

ともかくなるべく安静に、と二人の手が志に伸びた。それを振り払うように、

「保健室行ってくる！」と志は唐突に立ち上がり言った。

でも、保健室にはMRIはないですよ。

「せんせーに言って来る！」

せんせーに言ってもしょうがないような、そんな顔をした京子と綾を置き去りに、志は駆け出した。

アンコール

【アンコール】

「志つてば、（中略）挙げ句の経てに、（中略）なんですのよっ！」
堪忍袋の緒が切れた。切れてしまったけれど、怒りをぶつける張本人がいなから仕方なしにココに来たという按配で、志の姉の玉は気が済むまでぶちまけた。陵は「うんうん、そうだねえ、そうだよねえ、でもそれは玉ちゃんにも、」なんていう風に適当にカウンセリングしていた。

怒りの発端は第七軽音楽部の練習をサボり続けたこと。大事なオーディションが迫っているのに志はなかなか姿を見せないの、今日こそは、と玉含め第七軽音楽部のメンバーは志の搜索を行ったらしい。が、ピアンネ中探し回っても見つからなくて、ということらしい。

「もうテルミン奏者にしてやるしかありませんわっ！ せんせーもそう思いますでしょ！？」

「まあまあ、別に悪気があってサボっているわけじゃないと思うよ。ただ、玉ちゃんとう折り合いをつけていいか、必死で悩んでいるんだよ。それに志ちゃんつてば、テルミンするの、滅茶苦茶嫌がつてたからやめてあげてね。玉ちゃんはお姉ちゃんなんだからさ、もつと志ちゃんを可愛がつてあげなくちゃ」

「可愛がつてもつけあがるだけですわ！」

「まあまあ、……それはともかく志ちゃんの嫌がりようと、そのテルミンを小ばかにしたような玉ちゃんの発言は少しいただけないかな。テルミンはいいものよ。まあ、あのかゆくなる音のよさは二十二になるまでは分からないかしらね」

「バカにはしてませんよ、あの創造的な音色が欲しくなるときもありますわ、けれど、観客の前でテルミンをやることを考えると、ま

るで無駄毛処理を公に披露するみたいな気持ちになりませんか？」

陵は、二人はあんまり似てないけれど、やっぱり姉妹なんだなあ、なんて思った。そしていい姉妹百合だなあ、とも考えた。陵はそんなことを考えていたから、意識は玉の怒りよりも、たった今、完成したばかりの媚薬のことに向けられていた。窓際の百合の花の横に置かれた小さな小瓶のなかには、媚薬がある。

どうして、陵は媚薬を完成させることが出来たのだろうか？ 陵は神代峠の場所は知らないはずだし。

でも、現に媚薬は完成していた。

昨日のことだ。放課後、例によってきゆうつとなつたエルが運ばれてきた。陵は保健医として、当然の処置と介抱をした。エルは少しして目を覚まして、スポーツドリンクを飲んでから、ふと、思い出した、という風に切り出した。

『せんせーにはお世話になつたからな』まるで今生の別れの台詞だった。『せんせー、花好きだよな。珍しい球根を手に入れたんだ。明日、プレゼントするよ』

どういうわけだか、今日の午前中の休み時間にエルがビニール袋に入れて持ってきたのは球根ではなく、トリユフだった。理由を尋ねようとしたが、エルは忙しそうにすぐに保健室を出て行ったから、聞けなかった。コレは球根じゃない、トリユフだよ、とも訳が分からなすぎて、エルに伝えることができなかった。一人の保健室で、陵はそのままどうしたかと言えば、トリユフ以外の媚薬の材料を調合していたビーカーを棚から取り出し、トリユフを煎じて混ぜてみた。つまり、多分、媚薬は完成したのだ。

完成したが、飲んではいない。だって、貧血で倒れてきた女の子が目の前に差し出されたら、媚薬の効果で職を失ってしまうかもしれないからねっ。媚薬とは欲望を増幅させる薬だから。

その薬を、玉ちゃんに飲ませたら、どうなるかしら？

さつきからその実験願望が浮かんでは消え、浮かんでは消えている。どうしても、陵は姉妹百合を拝みたくなっていた。

「ねえねえ、玉ちゃん」前のめりで陵は聞いた。「精神状態が安定して、どんな妹でも許せちゃう薬があるんだけど、飲んでみない？」

もちろん、陵が勧めているのは効能が、精神状態が高ぶって、どんな妹にも百合百合してしまう薬である。

しかし、そんなことを知らない玉は、

「ええ」と頷いた。「ぜひ、その薬を頂きたいですね。脳みその血管が千切れそうなんですもの」

陵は席を立って、窓際の小瓶を取って、そつと渡した。玉は蛍光灯に小瓶を透かして言った。「まるで媚薬みたいですね」

「えっ!？」陵はあからさまに、不審に、非常に分かりやすく反応してしまった。

これは、……………バレたか？

しかし、

「この容器が」と、玉は小瓶のことを言っていたらしい。「とても綺麗ですわね」

「あ、なんだ、そういうこと。うんうん、そうそう、怪しい容器に入っているからこそ利くんだよ。媚薬みたいに。でも、中身はれっきとした精神安定剤だから、安心して……………あつ、そうそう、出来れば志ちゃんと一緒に飲んでね」

って、陵が大事なことを皆まで言うまでに、玉はズボンと蓋を開けて、グビグビととてもおいしそうに飲み干してしまっていた。そして一言。

「美味ですわ」

え？ おいしいの？……………じゃなくて、陵は一度「ういっぷ」と酔っ払ってしまったようなひゃっくりをして、頬っぺたにまあるいピンク模様を映し出していた。可愛らしい瞳がとるるように吊り下がる。壁掛け時計の秒針が進むごとに、玉の表情は泥酔していった。なんて古典的な反応!……………じゃなくて、ともかく惚れられても、まあ、惚れられてもいいけれど、惚れられたらいろいろと

困るんだ。先生と生徒〓禁断だし、女の子と女の子〓禁断だし、はいはい、女と女の子に訂正しますよーだ！ そんなことより、ともかくいろいろいと面倒臭くなる。

陵は周囲をぐるりと見回して隠れる場所を探した。ココは保健室。隠れるベッドなら腐るほどある。陵はその一つに飛び込んで敷居のカーテンをサツと閉めた。そのときだった。

「せんせー、大変！ ロリコン野郎の正体は実は、」と志が保健室に現われたのだった。

陵は返事をしなかった。ロリコン野郎の正体？ そんなことより、姉妹百合でしょ。陵は片目を瞑って、カーテンの隙間から二人の動向を見守った。いや、盗み見た。

「な、何で玉姉がここにいるのよ」「罰が悪そうに、とりあえず志は強情に足元を睨みながら聞いた。本当はすぐに保健室から逃げ出したいのだけれど、でも、もしかしたらと姉の優しさを期待している少し甘さの入った声音だった。でも、その期待どころか、問いの答えすら、なかなか玉から返ってこなかった。

「？」と志は眉間に入れた力をゆっくりと抜きながら玉の顔を直視した。すぐに志の表情が、見てはいけないものを見てしまったと言わんばかりの強張った表情になり、「うわっ！」と太平洋の色合毒々しいナマコが下腹部に張り付いたような悲鳴に似た叫びを上げた。玉がいきなり志を捕食するように、ギューと抱きしめたからだだった。陵は「むはー」と二人の愛撫を見て、鼻から蒸気を噴出させて興奮していた。

そして愛撫されている当事者の志には、少しパンツを濡らしてしまった。コレは十中八九、いわゆるお仕置きのなかしまだと思っただからだ。玉姉がココにいるのはきつと私を探しに来たんだ、そしてキングゴブラのように気味の悪いスマイルで威嚇して、私の体を締め上げている。駄目だ、体に力が入らない。

当の本人は、愛撫を愛撫と思っていないようである。それは陵の

誤算だった。志の玉に対する刻み込まれた恐怖は相当なものだったようであり、つまり、急なスマイル及びハグは志の恐怖心を駆り立てるだけだ。

志ちゃん、ココはもっと甘えちゃっていいんだよ。

そんな陵の助言は志に届くこともなく、青ざめた顔には脂汗が浮かんでいるばかりであった。そろそろ、そんな志が不敏に思えてきた。コレはこういうパターンの姉妹百合として、アリかもしれないが、私はそこまで変態じゃなし、傍から見ているので拷問だったから、陵は志の助けに向こうとカーテンを開こうとした。その時だ。

「ねえ、志」

陵は玉のタマのような猫なで声に動きをピタツと止めた。玉は志の汗が浮かんでいる両頬を両手で包んで、うっとり見つめている。

「は、はい」志はブルブルと怯えていた。「な、ななななんて御座いましょうか？」

「私、志のこと、食べちゃいたいくらい、大好きですわ」

【ダブルアンコール】

弥恵は自宅に帰ると、お出迎えしてくれた兄貴を殴り、二階の自分の部屋のベッドにダイブした。数秒息を止め、「ぶわっ」と跳ね起き、ベッドの上に鎮座した。そしてカバンの中から日記帳を取り出し、抱きしめ、すつと両手で持った。

この中に、私の忘れてしまった比呂巳への想いが刻まれている。

おかえり。おかえり、私の恋心。

そして、どうか起死回生の術を頂戴。

弥恵はねっころがりながら、手帳を開いた。

「……………？」

白紙だった。まっさらのさらだった。消しゴムで消されたのでも、修正液で消されたのでも、あぶり出しを施されたわけでもない。手

帳は白紙だった。弥恵の想いは一行もない。

「なんで？」

難解な暗号文のポエムはエルお姉さまが持っているし、コレは白紙だから、私の手帳が難解な暗号文のポエムとすり替わってしまったことはないだろう。でも、これは違うんだ。私のものじゃない、私の手帳にはびっしりと比呂巳への想いが書かれているはずだし……、あつ、そういえば伊勢丹のシールも貼られていない、代わりに図書館のシールが貼られているし……、じゃあ、また志姉ちゃんにしてやられたってこと？

そんな風に頭を捻って逡巡しているうちに、白紙が延々と続くかに見えたこの手帳に数ページ何かを書いてあるのを見つけた。

「……媚薬の研究？」

媚薬。媚薬かあ、媚薬もイイかもしれない。でも、コレに手を出すのは本当に切羽詰ってからだ。中等部の一年の頃になつても、比呂巳と理想的な関係に落ち着いてなかったときのために取っておく最後の術だ。媚薬は、さすがにねえ。

なんて、弥恵は妙に達観した頷きを繰り返していた。が、それが急に止んで、漢字テストに四苦八苦している表情を五秒くらいキープしてから、

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」と壮絶な叫び声を上げた。まずはその壮絶な叫び声に反応して、「どうした！？」と傍若無人に妹の部屋のドアを開けた兄貴を片付けながら、

「この手帳は《比呂巳》のだ」

と、ゆっくりと理解する。以前、比呂巳とお揃いのものを持ちたくて、半ば強引に弥恵がプレゼントした手帳だったから、忘れられるはずもない。そのときのことを弥恵は鮮明に覚えている。比呂巳は手帳にもものを書く習慣がないからと、そのプレゼントに困っていたっけ、でも、比呂巳は「大事にするよ」と受け取ってくれたのだ。そして比呂巳は手帳に何も書くことをしなくても、毎日、肌身離さ

ず学園に持っていったことを弥恵は知っていた。唯一書き連ねてある、《媚薬の研究》のことも。だから、最後の数ページの文字を見て、弥恵はコレが比呂巳のもので自分のものでないことを理解したのである。

でも、なんで、比呂巳の手帳が……？

「よしー」

弥恵は立ち上がった。考えていくら推測を巡らしても埒が明かない。比呂巳の手帳をどうして志姉ちゃんが持っていたのか、それを比呂巳に聞いたほうが手っ取り早い。弥恵と比呂巳は幼馴染の親友だ。そんなことを聞くくらいなんてことない。うん、比呂巳への未だ整理のつかない想いを比呂巳に打ち明けることに比べたら、なんてことない。

だから、弥恵は手帳を抱えて、隣の比呂巳の家に向い、インターフオンを鳴らした。

「ああ、弥恵ちゃん」比呂巳のママさんは、比呂巳に似ていて、可愛い。十七歳、と言っても通じそうな若々しい外見のせいで、比呂巳のお姉ちゃんと同様だった。弥恵は比呂巳のママの匂いがママって言う感じで大好きだった。いつだって悩み事のなさそうな澁刺とした物腰で比呂巳のママさんは言った。「比呂巳なら、秘密基地よ」

弥恵は秘密基地に向った。広瀬道場の裏手に回り、紅葉の落ちた地面を踏んで進んだ。少し早足で、もちろん迷うことなく弥恵は秘密基地にまで辿り着いた。

インターフオンを鳴らした。中に比呂巳がいるのなら、鍵の開いた窓を探す必要もないし、体に無理な姿勢をとってもらうこともない。比呂巳がドアを開くまで弥恵が感じていたことは、比呂巳は秘密基地で一体私の知らない何をしているのだろうという寂しさだった。面白いことをしてるんだったら、私を誘ってくれてもいいのにさ……。

弥恵は少し拗ねた。

「はい、はい」

ドア越しに聞える、うららかな比呂巳の声がなんだか妬ましい。このまま手帳を投げつけてやるのか。そんな風に思う自分の気持ちが、さらに分からなくなる弥恵だった。

そして、比呂巳の姿を視界に入れた途端に、弥恵の頭はふわふわと浮き足立って、ツンツンし始めた。直視できない。それが不自然なのは分かっているけれど、ここ最近、比呂巳の目に目を合わせるのがコルネットを上手に吹くよりも難しいことのように思えた。弥恵は比呂巳の形のいい顎のラインに視線をちらちらとやりながら、秘密基地の玄関に入り、靴を脱がずに、手帳を差し出し、用件を短く言った。

「こ、これ、比呂巳の手帳だよな？」

けれど、比呂巳はうんともスンとも言ってくれなかった。投げたブーメランが戻ってこないとき感じる不安に襲われた。

どうして返事をしてくれないの？

弥恵は視線を足元からゆっくりと持上げた。その視線で新たに捕らえたのは、比呂巳の手にあった、まるで近世ヨーロッパの哲学書だった。そして、その哲学書には伊勢丹のシールがペタリと張られていた。

……それは、……つまり、はてまた、どういうことだろう？

比呂巳は、私の気持ちを知っちゃった、ってこと？

そういうこと、になる、のかな？

弥恵は恐る恐る視線を上げて、比呂巳の表情を確かめた。

お凸に張り付いた前髪。

湿った形のいい唇。

上気したピンク色の頬。

そして、もの欲しそうに潤んだ瞳。それは弥恵を見る目ではなかった。

恋人を欲しがる目だった。

「比呂巳？」比呂巳の全てを確かめたところで、哲学書が床に落下

した。比呂巳のも、弥恵のも同時にだ。

まさかの事態だった。比呂巳からキスされたのだった。情熱的だった。弥恵は玄関のドアに押し付けられた。弥恵の充血しきった瞳は比呂巳の目蓋に閉じられた瞳を探していた。比呂巳の気持ちからなかつたから。

でも、比呂巳の唇は柔らかくて、弥恵の一抹の疑問を吹き飛ばすほどの強烈な弾力を持っていた。気持ちよすぎて、もう何もかもどうでもよくなった。サンクチュアリだった。体に力が入らない。比呂巳を支えきれなくなって、弥恵は床にお尻を付けなければならなくなった。比呂巳は弥恵に覆いかぶさるようにキスを続けた。まるで、まるで……、いい比喻が浮かんでこない。

【トリプルアンコール】

さて、《媚薬の研究》、その成果をまとめよう。

ある保健医は媚薬について、こう証言した。

「……何事も、薬に頼ってはいけないわね。反省、反省」

ある社会科の教師はこう証言した。

「薬に頼るとロクなことがない。頼ろうとしている時点で、薬の魅力にやられてしまっているんだろ。確かに起死回生の術だが、

……まだ、俺には早すぎる」

《媚薬の研究》、それは保健医と社会科の教師に薬に頼ってはいけない、という一般常識を叩き込み、二人の人生を正しい方へ軌道修正した。

それはいいことだ。

けれど、《媚薬の研究》の副産物として、ヒヨコ程度の不幸が産まれてしまった。

実の姉妹のキスと幼馴染のキスが畳み掛けられるように発生してから数日が経過したある日の放課後のことだ。

エルとアリーナは養豚場から二十メートル離れた場所に、乾いた

藁薺きをポンポンと敷いて、その上に寝そべり、黄昏時の二十分前の秋が騒いでいる空に顔を向け、他愛のない会話を楽しんでいた。エルは腹の上には黒ブタのピエールが気持ち良さそうに寝ている。時折、小さな笑いが起こった。

「あつ、そういえばな、」

アリーナが国語より少し濃くて、文学を少し薄めたような話ばかりするので、エルは難解な暗号文の哲学書の話をして聞かせようと思った。エルはその哲学書を常に持ち歩くほどに読み込んでいた。元来パズルとか、ルービックキューブとか、テトリスとかにのめり込んでしまつた者であつたので、エルは暗号文の解読に着手していたのである。しかし一向に解読は進んでいなくて、「もうただのつまらないポエムなんじゃないのか？」と諦めかけていたところだつた。エルは枕にしたカバンから、その哲学書を取り出しながら言った。

「この前、つまらないポエムを手に入れたんだ」

「ポエム？」

「うん、ポエム。一見、凄いこと書いてありそうに見えるんだけど、繰り返し読むたびに実につまらないポエムなんじゃないかって思えるポエム集。もしかしたら、アリーナなら、このポエムの隠された本質やら意図やら見抜けるかもしれないな。ま、このポエムを書いたやつはきつとひねくれた野郎に決まつているから、もしかしたら、志が適当に書いたのかもしれないしそんなことは、どうでもいいんだけどなあ」

エルはアリーナに哲学書を差し出した。「ほい」

途端、アリーナの抑揚のない瞳が、ゆらつと動いた。その哲学書は紛れもなくアリーナの詩集だつたから。伊勢丹で買ったダイアリーに、アリーナは詩を綴っていたのであつた。アリーナは志を呪うような目をした。だつて、エルがこの詩集を持っていることは、志がエルに渡した、それ以外に考えられないから。エルには絶対に見せないでつて、言ったのに。「志の……、バカあ」

アリーナは伏せ目がちに、エルの耳元に届かないくらいの小さな

声で呪詛の念を呟いてから、

「エル、コレはポエムじゃなくて、詩よ」と語気強めに言った。「ポエムじゃない、詩なのよ」

ソレはアリーナにとって、決して譲れない部分だった。ポエムなんて、しかし、エルはコレばかりは譲れないとばかりに、

「いやいや、コレはポエムだって。アリーナも読んでみたら分かると思うけど、コレは詩じゃなくてポエムなんだ。書いてある内容を全部噛み砕いて、消化してはいないけど、でも、コレはポエムだってことだけは分かるんだ」

「ソレはエルの、エルヴィーン・クイード・コンベルハイアーの世界が判断していることですよ。フランスの文壇はきつとコレをポエムと認めない。フランスでは、きつとコレは詩に分類分けされる。うん、きつとカテゴライズされて、オーソライズされるわ」

アリーナは「ふんっ」と鼻息荒く、頷いた。

「今日のアリーナはなんだか強情だな、」エルは、そんな細かいことと、まあ、どうでもいいんだけどな、別に詩かポエムか、そのことで宗教戦争になった例は……、なんてぼーっと思いつながら、エルは気付いた。「……ん？　っていうか、アリーナはまだ一度もポエムを読んでいないじゃないか。どうしてそんな風に意固地になるんだよ」

「……だって、」アリーナは問われ、ピンク色で恥ずかしがって、「コレ、私を書いたものだから……」と顔を背けた。

約五秒の沈黙が到来した。その間、エルはハゲワシにつままれたような目をしてた。そしてどういう反応をすればいいのかと悩んだ。すでにハゲワシにつままれたような反応はしているのだが、エルは無表情を貫いていると誤認している。

ともかく、大事なことはアリーナの詩集と《知らず》に、好き放題にポエム、ポエムと言っていたことを知らせなければいけない。不慮の事故だと世間に知らしめないといけないのだ。

「えっ!?!　このポエム、じゃないえつと、その、この詩はアリー

ナが書いたのか？」

詩がいくらポエムに仕上がっていても、隣の彼女が嫌がるのなら、即座にポエムは詩にカテゴライズされ、オーソライズされる。エルとアリーナの関係は、常にそんな感じだった。弥恵と一緒にいるときの横柄な態度はどこへやら、エルの全身にはサウナに十二分閉じ込められたときのような、必死な汗が浮かんでいた。

「そうよ、私作よ」

「い、いやあ、気付かなかったなあ。あつ、はははははっ」

「つまらないポエムでごめんなさいね。エルには、一人称が《あたし》のなんちゃってポエムにしか思えなかったのね」

「い、いや、その、うん、じゅ、充分、アリーナのポエ、じゃなかった詩は面白いつて、なんていうか、その、」エルは頭を捻って比喩を搾り出す。しかし、人間切羽詰っていると、本音しか浮かんでこないもので、

「迷路みたいでさっ！」

とつい本音が出てしまった。迷路みたいなポエム、本音はソレだった。エルはご機嫌取りに失敗したことに、アリーナが「はあ」と嘆息した頃にやっと気が付いた。

「もういい」

そのそつと遠ざけられたような一言がエルには辛かった。慌てて言葉を足そうとしてももう遅い。アルコールランプで足の爪をあぶられたような気分だった。エルは弥恵の前では見せたこともないし、未来永劫見せることは絶対にないと思われる情けない顔をして、

「そ、そんなあ」と呻くばかりである。怒鳴られたり、罵倒されたり、金属バットで叩かれる方がいつそのこと分かりやすかった。アリーナは怒っているとすんなり理解できるから。でも、横顔を見ていると、アリーナの気持ちは薄っすらとしか分からない。

多分………、何かを真剣に考えてる？ と、エルはアリーナの心情をうつすらと読み取った。だから、このタイミングでアリーナの口から出てきた人物は、エルにとって、つまりム力つくやつだった

た。

「志には、エルに詩集を絶対に見せるなって言ったのに……」

「ん？」ゆき？ 雪？ 志、だって？ 「ななな、なんでアリーナのナイーブなポエムの話に志が出て来るんだ？ っていうか、私の知らないところでアリーナと志は会っていたのか？ まさか、メルアドとか電話番号とか教えてないだろうな？」

アリーナはうつとうしそうにエルの瞳をチクリと見てからゆっくりとそっぽを向いて、

「エルの……、バカ」

とおかしそうに呟いた。そして、エルにその表情を見せないようにアリーナは養豚場に駆けていった。

さて、エルは、

「アリーナ……」と占いの館を裏路地に開きそうな項垂れ加減で、力のない右腕を持上げていた。

『《媚薬の研究》。それは人が安易に手を触れてはいけない禁断の領域である』

そのことを言ってみたくて、私はピアンネ娘たちのノンフィクションを借りてきた。彼女たちの日常はキラキラと輝いていて、正直で、真っ直ぐで、躍動していた。

そして何より、彼女たちのありふれた、あらゆる言葉は自分自身が根拠となつて出てくる言葉だから、揺らがな。証拠を外から持つてくる必要がない。言葉の説得力は彼女たちに担保されている。

私には言えることが何も無い。でも、私は彼女たちの物語を担保にすることで、やっと一つのことを言える。

きつとまた、私は彼女たちの物語を借りて、何か言ってみたいと思うんだ。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0103v/>

媚薬の研究 A Study of Love Potion @ Collective Rotation

2011年10月9日11時59分発行